
恋慕、美しく ～現代滝口譚3～

世木維生

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋慕、美しく ～現代滝口譚3～

【Nコード】

N3857B

【作者名】

世木維生

【あらすじ】

<現代滝口譚3>>この世ならざる『魔』を狩る滝口・渡辺詩緒。彼の新たな環境にも、戦いの影は迫っていた。その渦中、少女たちの純粹で美しい想いは、闇と交錯していく。

第巻話：胸中（前書き）

この物語はフィクションです。作品に登場する人物、団体、事件、『刀』等は実在のものとは一切関係ありません。

第巻話：胸中

今夜は記念日。

貴方と私の結ばれる、とつても素敵な夜。

そう。貴方は私の運命の人。

だから、これからは私が貴方を守ってあげるの。

一番、恐ろしいモノから、私が貴方を。

例えどんなに強い貴方でも、従うことしか出来ない摂理から。
私の想いは貴方を永遠に守るの。

ほら、見て。月が綺麗。

いつもは見えない星も空一面に輝いてる。
きっと、星たちも私たちを祝福してくれているのよ。

だから。

ねえ。

私の想いを受け止めて。

貴方のために、紅く色づいた唇。

そこから零れるこの炎は、私の心そのもの。

貴方を想い、恋焦がれた心が具現化したものなの。

私の想いは、それ程に強く深いよ。

そう。この炎は私の想いを綴った愛の言葉。

でも、それなのに、貴方はそれを避けてしまう。受け止めてはく

れない。

どうして？

私の想いは、貴方には届かないの？

私の前に立つ、愛しい貴方。

黒一色の衣服に身を包む、この世の者とは思えないほど美しい貴方。

貴方のすべてが私の心を奪う。

一挙一動、そのすべて。貴方の動きから、私は目が離せない。

私の想い。私の愛の吐息を避ける動作さえ、舞うように綺麗。

貴方は手にした武器を構える。

知っているわ。それは日本刀でしょ？

そして、貴方は私にそれを振るう。

でも、私は避けないわ。甘んじて、この体でそれを受け止めるの。激痛が走る。

柔肌を裂いて、そこから赤い血が飛び散る。なだらかな曲線を描く私の肢体に沿って、鮮血が流れ落ちる。

深く裂かれた傷跡。

そう。その傷さえ、いつか貴方と私を結ぶ絆に変わるはず。

私はそれを強く確信しているの。

貴方だけが、彼を忘れさせてくれる。

いいえ。違うわ。

私は貴方に出会うために産まれて来たんだもの。

あの人は、貴方と出会うための過程に存在^いただけに過ぎないのよ。

そのための役割を担っただけだったの。
その証拠に私はこうして生まれ変わったんだもの。
美しく変わる蝶のように。醜かった殻を破り捨てて。
貴方の前で生まれ変わったんだもの。
そう。貴方と出会うために、私は生きてきたのよ！

それなのに、貴方はただ厳しい視線を私に送る。
どうして？
どうしてなの？

……そう……そうなのね？ きっと、そうよね！
貴方にはまだ、私と違って、私の想いのすべてを受け入れる心の
準備が出来ていないだけなのね？
だから、抵抗を続けるのね？

確かに愛しい人の想いであっても、そのすべてを受け止めるには、
大きな覚悟が必要なものね。
でも大丈夫よ。
きっと貴方もすぐに解ってくれるはず。

人は美しさを永遠に維持は出来ないもの……。
いずれ老い衰え、そして、それを失ってしまう……。

だから、私が貴方を殺すの！

そうすれば、貴方は私の中で美しさを保ったままの永遠の存在に変わる。

貴方を想い、私は瞳を閉じる。そこにはいつも、美しいままの貴方が居続ける。

ねえ？ 素敵でしょ？

永遠の愛なんて、存在しないと他人は笑うでしょう。でもね。例外は確かに、ここに在るの。

それが貴方と私。

そして、私の行動こそが、それを現実のものに変える唯一の行為。それこそが至高の愛の形。

でも、その想いは、未だ貴方に届かない。

どうして？

なんでなの？

いくつもいくつも。私の口から貴方に向けて送られる愛は避けられる。

届かない。届いていない。

嗚呼！ 言葉だけじゃ信じられないよね？ それだけじゃ、寂しいのよね？

安心して。解るよ！ そんなコトじゃ、貴方を嫌いにならないわよ！

……だって、私もつい最近までそうだったもの。
言葉なんて希薄なモノに、想いのすべてを見出せなかったもの。

だったら……。

だったら、そう。私が抱きしめてあげる。

産まれたままの、一糸纏わぬ、この体で。

ねえ？ そうすれば、私のぬくもりが伝わるでしょ？

ほら？ 私の想いが伝わるでしょう？

私の鼓動を感じるでしょ？

私の存在を強く感じるでしょ？

もう、寂しくなんかないよね？

微かな音色が聞こえた。

綺麗な綺麗な旋律。

それは、貴方の左手から聞こえる。

そこにあるのは、小さな小さな銀色の鈴。

黒い革紐で貴方と繋がれた、小さな銀色の鈴。

飾り気のない、でも、素敵な鈴ね。

まるで貴方そのもの。

きつと肌身離さず付けていたんだよね？

綺麗な音色が私の心にまで響くよ。

ああ！ そうなんだ！ それが貴方が私に聞かせてくれた愛の言
葉なのね？

素敵……。

瞼を閉じなくても、それを私が形見として受け取れば、私も肌身離さず付けていれば、いつまでも二人は一緒だよ、っていうメッセー
ージなのね？

貴方にこの想いは通じたのよね？

本当に素敵……。

人を愛するって、本当はこんなにも喜びに満ち溢れているものな
んだ！

悲しくなんかない！ 切なくなんかない！

孤独なんて感じられもしない！

貴方もそうでしょ？

フフフ……コレデワタシトアナタハエイエンニヒトツニナレ
ルンダネ……

「悪い！ 浩輔のヤツがさ、好きな子に告白したいから、どうして
も付いて来てくれって、煩わづくてさー！」

少し地味目な印象を受ける、そのそばかすの少女の携帯電話を通

して、言葉とは裏腹に明るく語る少年の音がする。

「……そうなんだ」

携帯でその少年と話す少女

姫川清美ひめかわきよみは、彼女なりに努めて明るく返答をしたつもりだった。

しかし、その言葉に心から納得していないことは一目で解る。

曇った表情。俯き、長めの黒い前髪が、その顔に影を落としていた。

「あれ？ 浩輔、知らなかったっけ？ F組の田辺浩輔たなべ こうすけだよ。中学ん時からの親友でさ。話したことあっただろ？ それでさ、断れないんだよ。どうしてもさ……」

「……うん。わかった……」

電話の向こうの少年に、答える声に正直に沈む。清美が話す相手は、彼女の彼女ボーイフレンドである。

名前は安藤慎太郎あんどう しんたろう。長身でルックスも悪くない。とても外交的な明るい人物で運動神経が抜群。学園催事イベントには常にクラスを中心にいる人物である。

清美と慎太郎は今年、高校生活の始めの日に交際をスタートさせた。

中学三年間の想いを、清美が告白したのだ。

その行為は清美にとって、まさに一大決心の行動であった。人生で初めての愛の告白だったのだ。

入学式の後。慎太郎と中学三年の時にクラスメイトだった、親友の及川奈津美おいかわ なつみに頼み込んで、中央公園の江戸彼岸の下に彼を呼び出してもらった。

この街の中心にある大きな緑地公園。その一角。大きな池に面する小さな広場。

その木は、その広場にある桜の老木である。

その下で、告白をして結ばれた者は幸福になる。

そういう何時いつから存在するかも定かでない伝説すがに縋り、告白したあの日。

その夕暮れ時の緊張を、その直後に流した感涙を、清美は昨日のことの様に鮮明に覚えている。

地味な自分を、まさか太陽のような彼が、その想いと共に受け入れてくれるなど、清美は夢にも思わなかったのだから。

「……清美。お前、俺を疑ってんのか？」

僅かな沈黙の間に、慎太郎の明るい声は一変し、咎めるような口調になる。

「ち、違うよ！ 疑ってなんかないよ！」

清美は慌てて取り繕った。

解っているのだ。

自身が二人の關係に於いて、一切の主導権イニシアティブを持たぬことを。

今でも慎太郎は女生徒の中では人気が高い。言い寄ってくるライバルも多い。

嫌われないように、捨てられないように。

都合のいい女。そう思われても構わないから、一番近く存在で
ありたい。

悲しいかな、それが清美の本心であった。

「そうか？ ……まあ、それならいいんだけど。んじゃ、そういうワケだから、みんなを待たせてるし、悪いから切るな」

「みんな？」

少しでも猶予を与えてしまえば、通話は容赦なく切られてしまう。せめて声だけでも、少しでも長く聞いていたい。そういう想いに囚われていた清美は、疑問を即座に口にしていた。

その発言が彼の気を損ねるのかも知れない。そういう後悔が後から湧いて来るも、もう後の祭りだった。

「あ？ ああ……浩輔のヤツが二人つきりだと、アガってなんにもできねえから、2・2で遊びに来てるんだよ」

棘のある声。案の定、再び機嫌を損ねたことが容易に知れる。

直後、携帯で話す彼の向こうで慎太郎の名前を呼ぶ、清美とは違う女の子の声が聞こえた。

「すぐ行くから！」

掌を返した様に明朗にそう叫び、その女の子に返す受話器の向こうの彼氏。

それは自分と二人きりの時には、決して聞かれない声のように清美には感じられた。

「んじゃ、切るな」

「慎太　！？」

まだ伝えたいことが残っていた少女の声を一方的に遮ると、通話は途切れる。

携帯を添えたままの清美の耳には、ツーツーと無機質なデジタル音だけが届いていた。

再び俯き、ゆっくりと、清美は携帯を折り畳む。

サブディスプレイのデジタル表示の時刻は、慎太郎との約束の間が、優に一時間以上前であることを彼女に告げていた。

「……　慎太郎……　今日は……」

清美は呟き、空を仰ぐ。目に溜まっていたものが、一つ。そばかすの目立つ頬を伝って流れ落ちた。

立ち尽くす少女。

世界が止まったように、ただ呆然とする少女を他所に、しかし、世界は確かに息づいている。

日は暮れかかり、辺りは喧騒に包まれていた。

この街で人通りの最も多いスクランブル交差点。ここは、その一角に存在する広場なのだ。

対面のこの街で一番集客力を持つファッションビルには、今が旬のカロスマモデルが大胆にポーズを決めている。清美と似たような服装に身を包みながら、しかしそのモデルは、彼女とは対極にあるように輝かしく明るい表情を見せていた。

そして、この広場にそびえる駅ビルの壁面には大型のテレビジョンが設置されていて、目印にも、時間を潰すのにも適している。

だから、ここは恋人たちを中心に待ち合わせのメッカとなっている

た。

人が集まり、賑わい、華やかで。

清美もそれを構成する一人になるはずであったのだ。

「ごめん！ 待たせたね！」

その耳に聞こえた、男性の声。慎太郎のものでは決してない。彼の声に比べれば、酷く大人びている。

それは全くの他人の声。
解っている。

頭ではそう理解しているのに、清美の体はその声に反応していた。

「もう！ 遅すぎよ！ 何分、遅刻してると思ってるの！？」

「ごめん！ 会議が長引いてさ…… 本当にごめん！」

声を追った視線。その先で背広姿の男性が、清美のすぐ隣に立っていた女性に声をかけていた。女性はそれに膨れ面で愚痴っている。

平謝りを繰り返す男性。女性は、もう、と大きく息を吐く。

女性は清美とほぼ時を同じくして、ここに立っていた。どうやら、ようやく待ち人が現れたようだ。

彼女は男性の腕を取り、今回だけだからね、と微笑むと、連れ立って人波に乗った。

視界から消えて行く二人の背中を清美は、ぼんやりと見送る。

「……私、何やってるんだろう？」

そして、寂しく笑うと、その頬に止め処なく涙が流れた。

慎太郎が、突如として約束を破ったことは、これが初めてではない。

友人に言わせれば、酷い彼氏だと言う。

それも解っている。

きっと、自分も友人の彼氏が、そんな態度を取るのであれば、その友人に別れを勧めるだろう。

しかし、駄目なのだ。

どうしても、駄目なのだ。

理性でそれが判断できても、感情がそれを許さない。

清美は心の底から、慎太郎を愛しているのだ。
どれだけ泣いても、どれだけ寂しい思いをしても、彼が愛しくて仕方がないのだ。

でも、今日だけは。

今日だけは、そばにいて欲しかった。

清美はそう思う。

今からでもいい。どんなに遅くなってもいい。
日付が変わるまでに会いに来てくれればいいから。
それまで、どんなに寂しくてもここで待つから。

心の底から、切にそう思う。

十六回目の誕生日を、彼女はこうして迎えた。

第式話：学舎

人の想いは遷ろうもの。儂いもの。

だが、同時にその真逆のものでもある。

人の想いは不変のもの。強固なもの。

だから。

時に、想いに強く囚われてしまった者は人の道を外れる。

それは決して倫理的観点だけから述べている話ではない。

彼らは、彼女らは。人の理ことわりから抜け墮ち、魔性のものに変ずることもありうるのだ。

それは世界の裏の現実。

それは人の世を乱すこの世ならざる存在、『魔』の在り方の一つ。

夜の闇に、その大部分を支配された施設。

少年と少女は注意深く辺りを窺いながら、ゆっくりとその内部を歩んでいた。進行方向右手側。そこには整然と並ぶ窓に混ざり、一定間隔に引き戸の配されていた。

二人の左手側には窓のみが続く。光源は非常灯以外は、そこから差し込む月明かりだけだった。

二人はこの施設の関係者であった。身に纏う制服がそれを示して

いる。

それは白を基調とした学生服。この学園の制服ものである。

その学生服姿の二人は、共に美しい容姿をしていた。並び写真に納まれば、この学園のパンフレットに学生モデルとして、十分過ぎる役割を果たすであろうことが容易に知れる。

なまじ、そこそこの契約金キャラクターで外部のモデルを雇うよりも、遥かに好印象を見る者に与えることが誰の目にも明らかかなほどに。いや。ともすれば莫大な契約金でトップモデルを雇うよりも、その効果は高いのかも知れない。

創り物。そう見紛うほどに整った容姿。黒髪。その少し長めの前髪が切れ長の目にかかるも、その真っ直ぐと前を見据える、黒い瞳に宿る強い意志を少年は感じさせる。彼はその小冊子に於いて、涼しげに理性、誠実さを演出するのだろう。

対する少女は色素が少し薄いのか、透るような白い肌ナチュラルと自然な美しい亜麻色の長い髪を靡かせていた。そして、そこに在る、見る者を魅了する知的ながら生き生きとした表情かお。彼女は味気ない小冊子を華やかに彩り、見る者に明るく楽しい学園生活をイメージさせるだろう。

尤ももつと。その少年は、人前に出る行為を酷く避ける嫌いがある。例え、この学校の教職員や運営に関係する者が本当に二人に白羽の矢を立てたところで、そのようなことは、実際には在り得ないことなのだろうが。

二人の歩く足音だけが、薄暗い廊下に反響していた。日に焼け、亀裂等は見当たらないものの、年季の入った建物であることが一目で知れる壁面に、その音が染み入るように木霊する。

不意に、少年の数歩後ろを行く少女が口元を左手で押さえた。吹き出しそうになった笑いが、噛み殺されるも抑えきれず、そこから漏れる。刹那、辺りと全く異なった雰囲気きふくが辺りを包んだ。日の当たる日常にあるような笑顔が、そこに浮かんでいる。

「……どうした？」

歩みを止めず、顔だけで背後の少女を見遣ると無表情に少年は訊ねた。こちらは依然、対照的に、辺りと同じ闇の気配を纏っているようだった。

「アンタ、本当に白が似合わないわね」

何がそんなに彼女のツボに嵌はまっているのかは定かではないが、涙目で少女はそう呟いた。学級クラスが違ちがうためか、少女は少年のその姿に未だ見慣れてはいないのだ。

「……帰れ」

変わらない表情で冷たく言い放つと、少年は再び視線を前方へと戻す。

「……で？　なんで突然に高校がっこうに通う気になったのよ？」

不気味さ。夜の校舎にあるその様相を意とも感じさせずに、背中を向けた少年に少女は訊ねた。こういつた場面シーンに於いて、恐怖に少年に寄り添うのが彼女のような美少女の定石セオリーなのかも知れないが、生憎と少女はこのような状況に慣れていた。否。より深い闇の中にその身を置くこともあるのだ。この程度の状況は、彼女にとって日常と何ら変わりはない。

「お前には関係ない」

一頻り笑い終えた少女のもたらした問いに、少年は即座に返す。

それは疑問の答え、にはなっていないのだが。

「高認受けるから、高校生活さんねんかん分は滝口やぐめに専念するって言ってなかった？」

しかし、少女は少年の態度に気分を害することなく会話を続けた。二人の関係は長い。友人関係、というほど親密ではないのかも知れないが、その関係は幼少時代にまで遡さかのぼる。これしきのことですぐ、四の五の文句を言っていたら、この少年とはまともに付き合えないことを熟知しているのだ。

「お前には関係ない」

少女の続けた疑問に返されるのは、先と一言一句変わらぬ少年の答え。

「関係なくはないわよ！ アンタのために私まで転校してあげたんだから！」

その返答に少女は柳眉を吊り上げた。しかし、僅か二言目で感情が認識を凌駕したようだ。

「……頼んではないない。お前が勝手にしたことだし」
しかし、少年の態度は何一つ変わらない。

「偏屈で無愛想なアンタ一人だと、余計な問題を起こすでしょ！？ 間違いない！ アンタにはそういう認識や予測が出来ないの！？ そうなると琴音にも問題が及ぶかも知れないでしょうが！？」

みづなせと ことな
源琴音。彼女の幼馴染である少女の名前。その少女が通うこの学校に、二人が転入して来たのはつい一月前のことである。

それは、その琴音という少女が『世界の裏』を知ってしまった夜から、一週間が経過した日のことであった。

実際のところ。疑問を口にしながらも少女には少年の考えは推測出来ていた。

世界の裏。それに引き込まれてしまった際に琴音は。
「くだらない話は後にしろ」

少年の言うこの言葉を要約すると、後で一人で勝手にほざいている、ということなのだ。そう会話を断ち切ると、少年は手にしていた刀の柄に右手をかけた。

刀。この国が誇る、芸術の域にまで高められた武器である。そして、それは彼らの魂でもあった。

少年は滝口。たきぐち。滝口とは、平安の世に設けられた退魔の役目を担う武家のことである。彼は現代に生きる紛うことなき武士もののふなのだ。

何時でも瞬間に抜刀出来る姿勢を維持し、警戒したまま辺りを窺う滝口の少年。

そして、その視線が前方にある教室の扉の前で止まる。
「……室内、ね」

少女が先程までと打って変わり、真剣な面持ちで口を開いた。
その言葉に少年は頷く。何かの気配を二人は察した。

魔力　この世ならざる力の波動。直後、それを感知した少年の口が開く。

「来るぞ」

その呟きが合図だった様に、静寂の帳を破り校舎内部に剣呑たる音が響いた。

二人の警戒していた教室。その廊下に面した扉を、窓を破壊し、教室内部から姿を現す異形。瘴気に混ざり、血の臭いがその室内から流れ来る。

その異形の影は一つではなかった。

力任せに開かれた隙間からその姿を晒すのは、大小、様々な形状をした鬼の群れ。

その異形たちの姿を視認するや、少年は抜刀し駆けていた。古雅で美しいその刀身が閃くと共に、朱と鬼の首が宙を舞う。

「詩緒！　コイツらは！」

後方。叫ぶ少女は、制服の内ポケットから紙片を取り出すとそれを宙に放つ。

「爆！」

そして、その艶やかな唇が奏でる起動命令。

その命に忠実に従い、突然に爆ぜる紙片。火種など存在しないのに、小規模な爆発が発生する。巻かれた異形の数体が砕け散る。

否。大気に火気は、存在するのだ。

陰陽五行。その火行の火気が。少女はその力を行使する術者。陰陽師。

「解っている。変じたものじゃない。召還者がいるはずだ」

言葉を返しながら、また一つ、二つと少年の刃は、鬼の首を一刀の元に刎ねる。

校舎の廊下。迫り来る敵の群れ。限られた空間でありながら、詩緒と少女に呼ばれた少年が見せる絶技に確実に鬼の数が減る。

だが、その群れは途切れはしない。次々と教室内部から殺陣の舞台と化した、その通路へと現れる。

「……まったく、厄介なことをしでかしてくれるわね！」

悪態を付きながらも、少女は舞うように鬼の繰り出す打撃を避けた。

ただ回避運動を行うわけではない。その動きに生じた風に、魔力を籠めるべく、素早く詠唱する。

「木行に命ず！ 風を以つて裂け！」

自然現象を意のままに操るべく、命じられる力ある言葉。その言葉に生まれる真空の刃。それは巨躯の鬼の体を易々と真一文字に割り、さらには後方に控えていた鬼の群れを裂く。

「ちっ！」

舌打ちし、少年は敵の群れを見据える。途絶えることなく、未だ鬼は現れ続けている。

滝口の眼光が一層強い力を放った。

その群れの向こう。そこに異形と異なる影を、詩緒は確認したのだ。

それは外套を靡かせ、戦場に背を向ける。

仕事を終えた。そう言わんばかりの悠々とした動作を見せ、歩き出す。

自分たちがこの場に現れた時機タイミングに合わせ、何かしらの術式の魔力の波動の後、鬼の瘴気が発生した。それは、つい先ほどの事。ならば、それらを此の世に呼び寄せた術者はすぐ近くにいる。その可能性は容易に予測できたことである。

「 奴か」

呟くと、滝口は敵の囲いを存在しないもののように駆け出した。

少年の進路。そこに立つ鬼が次々と切り伏せられる。

「ちよつと！？ 詩緒！？」

少年のその動きに少女は非難染みたの声を上げた。

「ここはお前に任せた。俺は元を叩く」

言いながらもすでに、少年は鬼で作られていた囲いを突破し終えている。

「アンタ、正気！？ か弱い美少女を置いて、それが男の子のすること！？」

抗議の台詞は続くも、少年の耳には届きはしないことを悲しいかな少女は知っている。

彼女の能力の高さを認めている。それだからこそその行動であろうが、窮地は窮地。納得が出来ていないことは、その表情で知れる。

「……強力な術の使える状況じゃないでしょうが。適材適所の有利性を無視してるわよ……」

断末魔の呻き。そう嘆く少女の後方で、その耳障りな騒音ノイズと共に鬼の体が一つ、崩れる。

「何！？」

状況を把握出来ずに、振り返る少女。その視線の先に小柄な人影が在った。

「大丈夫！？ 瑞穂みずほ！？」

少女の名前を呼ぶ凜とした声が、鬼たちの唸る声を抜けて彼女に届く。声の主は一振りの刀を携えた、幼さの残る可憐な少女であった。彼女が鬼を斬り捨てたのだ。

「琴音！？」

それは瑞穂にとって、全く予想外の増援だった。その刀を手にする少女こそが、先の話題の少女だったのだ。

「なんで貴方がここにいるの！？」

瑞穂はその疑問をそのまま口にしていた。

「放課後に貴方たち二人が、そろって姿が見えなくなったら、それは疑問に思うわよ。それに――」

会話をしながらも、琴音は戦闘を繰り広げる。乱戦にありながら、危なげなく次々と彼女を襲う攻撃をかわし、刀を振るう。

その身のこなしと太刀行きは、つい最近まで普通の一女子高生だったにも関わらず、すでに達人の域にあった。それは世界の闇で『魔』を討つ者たち、滝口の中でも彼女並みの動きを見せうる者が、果たしてどれほど居ようという水準レベルである。

「学校に今日は嫌な気配がしていたでしょ？ 校舎内の空気が
澱んでいるみたいなの……」

琴音の感じていたその気配。滝口の少年も陰陽師の少女も、学園
を覆ったその異変を察して調査すべく、ここに現れたのだ。それは
この世ならざる何かの気配。瘴気だった。

「……鋭いのね」

ぼつりと瑞穂は呟く。

本来ならば、この少女をこちらの世界には引き込みたくはない。
それが陰陽師の少女の本心であった。そういう意味では、こつもこ
ういった通常に感じられない感覚が鋭いのは考え物である。

「だったら、何と無くだけでもこつこつということなのかな？ って、部活
の後も残ってたのよ！」

また一体、鬼を葬り琴音は言う。

そして、困ったことに、この少女剣士は行動力もある。

琴音は瑞穂の望みに反して、こちらの世界に介入する決心を固め
ているのだ。

それは彼女をここまでの剣客に、世界の裏の気配を察する感覚を
有する人間に育て上げた人物の凶行を止めるための決意であった。

「仕方ないわね……琴音！ 速攻で片付ける！ フォローして！」

ぼやきに続く指示。それは、そうすることで、彼女の介入を早々
と終わらせる決断でもある。この場限りの暫定的なものでしかない
のだが。

「何をすればいいの？」

鬼の群れを割り。瑞穂のすぐ傍にまで辿り着いた、滝口見習いと
でも言うべき少女は訊ねる。

「少し集中して詠唱するから、露払いをして！」

認めたくはないものの、それを安心して頼める実力があることは
知っている。

「任せて！」

即答する少女。その応答を待つまでもなく、瑞穂は空間に晴明桔せいめいこ

梗を描いていた。

「……こんな持ち場を任せた詩緒アンタが悪いんだからね……」

すでにこの場からは見えない相方に責任を転換して。瑞穂は森羅万象に強制的に影響を与える力ある言葉を言い放った。

第参話：使者

「居心地良さそうだな？」

昼間だというのに薄暗く、換気もままならず湿度の高いこの場所、夏本番を迎えようとしているこの時期に、居心地が良いなどと有り得るはずもない。

それは明らかに、そこに幽閉されている少年に対する野次た言葉であつた。

その台詞を言い放つた松明たいまつに照らされた少年の顔は、やはりそういう意図ニヒアンスが滲み出ている。

その目に映るのは、土牢にいる薄汚れた衣服に身を包む同じ年頃の少年。

彼が独断で行動を起こした罰として、ここに囚われて早一月が経過しているのだ。そういう身なりに陥るのは、至極、当然の状態であつた。

しかし、牢獄の中の少年の顔は生気を失つてなどいない。寧ろ、日に日に強まる自らにこのような仕打を科した元凶を憎む気持ちに駆られ、拗ねじくれた感情によるものとはいえど、精彩を放っていた。

少年は、その象徴たる血走つた目をギロリと動かし、声をかけた相手を見遣る。

「……何の用だよ？ 丑寅うしとら……わざわざ俺に馬鹿にされに来てくれたのか？」

そして、口元を歪めた。来訪者を、その捌け口の対象と認定する。「違つたろ？ 逆だろ？ 普通？ テメエが馬鹿にされる立場だつてーの、自称『八卦衆筆頭剣士』の辰巳たつみさんよ……頭、働いてるか？ 現状を把握しろよ？ この馬鹿」

牢と怒りに囚われた少年。狭い空間に拘束され、外部に被害を及ぼせないとしても、そこには他者を怖おそけつかせるに十分な迫力があつた。

しかし、そんな少年に物怖じ一つせず、彼が与えようとした役どころを拒否し、丑寅は嗤う。

この穴倉を利用し作られた、地下牢に囚われた少年の名前は辰巳当麻（ちんみ）という。現在の滝口の頭取、棟梁（とうりょう）の役職に就く平井万葉（ひらい まんよう）。彼女の編成した親衛隊とも言える部隊、八卦衆（はっけしゅう）の一員であった。

「良いことを教えに来てやったんだ。感謝しろよ？ …… お前が仕留めそこなった陰陽師だけだな。俺に棟梁から直々に命が下ったんだよ。始末しろ、ってな？」

自由を剥奪された同僚を見下し、丑寅は言う。彼もその一門に籍を置く者であった。

「何だと？」

その内容に、当麻は眉間に皺を寄せる。

「……棟梁からすれば、お前より俺のが上、ってことだろ？ お前に出来なかつたことを、俺に命じるんだからな。理解したか？ 自分が一番だなんて下らない妄想はとつと捨てて、ここから出られたときは俺に尻尾を振って従えよ？」

そう言い終えるなり、丑寅は大声で嗤った。野卑た笑声が、土壤が剥き出しの壁面に反響する。

「ふ……ふははははっ！ お前は本当に馬鹿だな！ お前は時間稼ぎの捨石にでもされたんだよ！ 滑稽だな！ そんな勘違いでいい気になって、俺にさも自慢気に語りに来たのか！？ オメデタイ奴だな！」

当麻はしかし、丑寅のその様を嘲け返す。

「お前と俺と！ どっちの戦闘能力（ちから）が上だと思ってるんだ！？ 中途半端な能力しか持たないお前が！ 俺より上だと！？ 笑わせる！ お前じゃせいぜい時間を稼いで、お終いだよ！ そんなことは棟梁には解ってるんだよ！ 知らぬは本人だけって、か！？ 無様だな！」

矢継ぎ早に繰られる暴言。だが、それを相手に叩き付けたところで、当麻の怒りは治まらない。丑寅（うら）ごときに馬鹿にされた状況に、

今の自分はある。その事実は曲げようもないことなのだから。

それ故に。当麻の言葉と共に狭い空間のなかの大気が唸りを上げ、震えていた。

感情の高ぶりは、それまで抑圧し、蓄積されてきていた己の感情統制の限界を超える。抑制の許容を超えた意志は暴走し、大気に影響を与えたのだ。それは辰巳当麻の持つ異能の力、八卦の力によるものである。

彼は八卦の一卦、風を司る剣士なのだ。

如何にも有り合わせで作られたこの牢獄。それに不釣合いな、そこだけ頑強に作られた、太い鉄製の枠が空圧に軋む。

「つを!？」

襲い来る大気。不可視の凶器。それは衝撃の波。

巨大な鈍器で打ち付けられたような、鈍い痛みが丑寅の全身を襲う。そのベクトルに吹き飛ばされそうになるも、ぎりぎりのところで自身の能力を開放し、彼は踏み止まった。

壁面が、天井が一部欠落する。

風はその猛威を奮いつづけるも、その能力により丑寅に対する干渉力を失っていた。吹き荒ぶ風の中、同僚であるはずの剣士を殺意のありありと取れる目で丑寅は睨み付ける。

「……お前……勘違いしてないか!? 確かに一対一タイムマンでお前と俺が殺し合えば、お前が上かも知れないがな! 俺には鬼眼ゴイヤンがあんだよ! 『戦力』としては俺が! お前よりも上なんだよ!」

吼えつつ、動かす視線。丑寅は当麻のすぐ横の空間を視る。そこには何も存在してはいない。

しかし、それは彼以外の視覚であれば、の話である。

彼には視えているのだ。そこに自身の攻撃札の一枚となるカードの存在が。

「先に力を使って危害を加えたのは、お前だからな! 恨むんじやねえぞ! お前の悪意が産んだ異形ものに殺やられるんだ! 本望だろ!」

丑寅の目に視えているのは、今にも具現化しそうな鬼の姿であっ

た。

それは辰巳当麻が、ここで放ち続けた恨み、怒りの幻像に他ならない。

「やめておけ。それ以上の対立は、見逃すことは出来んぞ？」野太い声が洞穴に響いた。それは対峙していた二人の身体を、瞬間、萎縮させる。

同時に二人の視線が、この地下牢の入り口へと向けられた。

その二人の視軸の交差した点に立つ、威風堂々とした巨漢。彼こそが、先の声の主であった。

浅黒い肌、隆々とした筋肉。えらの張った厳いかつ顔。そこにある太い眉の下にある大きく見開かれた目が、二人の剣士を映す。その巨漢の風貌は、本人にその気がなくとも、相手を威迫するのに十分なものだった。

だが、二人は並の神経の持ち主ではない。世界の裏。表にある常識では計り知れない、超常の中に生きる者である。見てくれで気後れするような神経の脆弱さはない。

彼らは知っているのだ。その巨漢の持つ力を。

「……大隈さん……」

怯えに似た面持ちで、丑寅は彼の名前を呟いていた。

大隈雄悟。四天王の一人であった。

月空の下、爆音が響いた。

それは二人の人物の立つ足元、コンクリートの地面を揺らす。

「……力技に出たか」

呟く、滝口。

「……加減つてモンを知らないのか!？」

フードに隠れた顔から声が漏れる。それは男のものだった。

「お前が言うことじゃない……少なくとも人的被害はない。お前と違つてな」

言い放ち、詩緒は刀をゆっくりと構えた。

「……そうかもな」

含み笑いが声に続く。確かに召還者は裏の世界とは無関係な人間の多く通うこの施設に、大掛かりで危険な罠を張つたのだ。他人をとやかく非難する立場ではない。それどころか召還するのに使つた餌は紛れもなく人であった。滝口と陰陽師の感じた瘴気に混ざり、臭つたものは被害者の血の臭いに他ならないのだから。

フェンスの向こうには、街の明かりが広がっていた。

それは絶景と呼ぶに値するものだ。

冬場。街がクリスマスのイルミネーションを着飾る時期に比べれば、やはり、見劣りはするものの、そこに広がるそれは、やはり煌びやかで美しいものだった。

それは人の営みが作り出す芸術の灯。

高台にあるこの学園の屋上は、それを見渡すに適した絶好の展望^{ビューイング}点^{ポイント}であった。

しかし、この場に居合わせた二人に、その光景は映ってはいない。

二人の目に映るのは、敵と認識される互い。

殺気の張り詰めた空気が辺りを支配する。

「……一応、聞いておく。お前は何者だ？ 何の目的でこんなふざけた真似をした？」

刀を携えた白い学生服に身を包んだ滝口は訊ねた。

「正体を明かすつもりがあるんなら、こんな格好しねえだろ？　言うと思うか？」

少年と対峙する者。それは含み笑いを漏らし、言葉を返す。男と思しき人物は、全身を外套で覆い、頭部にも深々とフードを下ろしているのだ。

「……よく笑う。だから、一応、と言ったはずだ」

詩緒は射抜く様な視線を、敵に向けていた。どのような答えが返ってこようとも、彼の意思は変わらないのだ。それは排除すべき対象でしかない。

「そうだったな……しかし……まともな武器がない状態に襲撃してやるうと学校に罾を張ったのにな……真剣を持って通学するか？　普通？」

フードに隠れた顔から、辟易とした声が起る。

「……生憎と普通じゃないらしいな……」

無表情に。至って真剣な顔で滝口は言う。

二人の間を風が流れた。

その風は、都会特有の湿気を含んだ纏わりつく様な嫌な風ではない。乾いた涼をもたらすものだ。

自然との融合。それをスローガンに掲げ、発展して来た都市としては歴史の浅いこの街。

だからこそ、他都市では問題になって久しいヒートアイランド現象など、文字通り、どこ吹く風である。

その夜風に靡いた外套がバタバタと大きく音を立てる。そして、対照的に。少年の左手首に在る小さな鈴は微かな音色を奏でていた。場面が場面であれば、その音は、暑苦しい宵に更なる涼を届けていたことだろう。

そんな粋は思考の元に、それを聴いたわけではない。しかし、鈴の持ち主と相對する男は、その音源に視線を送っていた。

「……鈴？　……お前が当麻の言っていた滝口か？」

「……わたなべ　しお　渡辺詩緒。お前を殺す人間の名だ」

その問いに名乗り、駆ける。

それは開戦の狼煙でもあった。

「……渡　っ!?」

一足にして間合いを詰め、弧の軌道を描き月光に閃く刀身。マントを大きく裂かれながら、鬼の召喚者とおぼしき人物は寸でのところで、それをどうにか回避していた。

渡辺、ね。不敵に嗤い、滝口の名を呟く。外套に身を包む者は自身の強さを、優位さを演出するかの如く、そう行なうつもりであった。

しかし、それを渡辺詩緒という剣士は許さなかったのだ。

マントの下に忍ばせていた小太刀を引き抜き、滝口の一ノ太刀を華麗に避け、その白刃で切り裂く。標的を始末するための障害の息の根を止める。

その算段も大きく狂っていた。

彼が得物を引き抜こうとする時には、相対する剣士はすでに返し刀、刀を走らせている。

返し手を捨て。その斬撃をかわす動作に専念する。否。そうすることだけが、その者にとって、命を取り繋ぐ唯一の行動であった。

彼は　丑寅は大きな誤算を認識する。

それは名もなき雑兵、つまりは賀茂瑞穂かもみずほという標的ターゲットに御付的に存在する滝口程度に、同じ滝口で棟梁直々に選ばれた八卦衆じっぱんが劣るはずがないという考えであった。

体裁などを考える余裕なくコンクリートの上を転がりながら、齒軋りする。

そして、命を繋ぐべく、視た。

その瞳孔に意志の力を、魔力を籠める。

召喚よぶことの出来る僕しこを探す。目まぐるしく焦点の合わない視界。それでもその中に、この危機を打破する鍵を必死に探るしか最早、勝つ術はないのだ。

見鬼。^{けんき}

まだこの世界に干渉できない、思念としてしか存在しない鬼。それを視る能力。

それが丑寅が持つ異能の力の一つである。

その目が捉えたモノに、丑寅は驚愕した。

しかし、自らの能力の発動は忘れない。

さらに目に魔力^{ちから}を籠める。

「ぐっ!？」

その眼力に詩緒の動きが止まる。

身を襲う、有り得ないほど強烈な痛み。

外傷などはない。しかし、体を支配した痛覚は尋常ではなかった。転がった勢いのまま、フェンスに衝突する丑寅。金網の軋む無機質な音が響く。体裁を捨てていた彼に、スマートに体制を整える余裕などはなかったのだ。

「……お前……爆弾を抱えて俺に挑もうなんて馬鹿の極みだなあ……」

それでも、立ち上がりの際は然^さも端^{はな}から常に自身がそうであったように、相手を見下す。

「……俺はお前の爆弾の起爆スイッチを持つてるんだぜ?」

フードに隠した歓喜。丑寅の持つ残りの能力。それは見鬼したものを具現化し、使役する能力である。召鬼^{しやくき}、使鬼^{しき}であった。

彼が視たのは、渡辺詩緒という少年に宿る闇であった。

その滝口は、心に鬼を住まわせていたのだ。

丑寅により送られた魔力により、その闇が活発化した状態。それが現状であった。

「……お前は……」

詩緒はそれでも戦意を失ってはいなかった。激痛に蝕まれながらも呟き、敵をその目に捉える。

滝口の少年の存在そのものを消滅させるべく、その身を侵す闇。

それに伴う痛覚。それは幾度の実践や、訓練によって、その感覚に異常なほどの耐性を持つ詩緒にも、行動を許さないほど強烈なものだった。

あと僅か。丑寅の魔力が流れ込めば、少年の中に潜む鬼は人間の肉体という殻を破り、この世界に存在するに至るだろう。

「……さて。俺にお前は到底敵わないって、身の程を知ったろ？」

完全に取り戻された自信。そして、確立された完璧なる優位性。

立ち続けることだけで懸命な滝口にゆっくりと近づきながら、丑寅は歓喜を押し殺し冷徹に口を開いた。

第四話：閑話

夏服準備期間。

学園に通う生徒たちの制服が、この一週間で境に薄手の夏服に一新される。

原因不明の爆破事故による数日間の休校を経て、今はその一週間の初日に当たるわけなのだが、ごく一部の生徒を除き、ほぼその役割は終了しているようであった。

気象庁の発表など些いさか信憑性に欠ける。

そういう見解を抱く人間もいるのであるが、少なくとも今年は猛暑であるという予想は、現状、強あながち外れてはいないようである。

例年のこの時期に比べ、体感的にそう感じている学生が多いことつまりは、準備期間に入るなり、早急に衣替えを済ませてしまう者が大多数だったことが、それを示していた。

この屋上に居る、未だに白を基調とした学生服に身を包む男子生徒。そういう意味で彼 渡辺詩緒は、少数派の学生ということになる。

この屋上に居るのは今のところ、彼一人であった。

昼休み。大半の学生たちが友人たちと和気藹々（わきあいあい）と昼食を取り、談笑して過ごす憩いの時間。

穏やかな気候の時期に置いては、人気の昼食場であるこの場所も、陽射しの厳しい時期に差し掛かった今では、閑古鳥が鳴いている様な状況だった。

詩緒は一人、それをここで済ませていた。

その名残。黄色い固形栄養食の空き箱が、竹刀袋を抱えて地べたに座る彼の横に転がる。

遠くに聞こえる歓声を他所に、詩緒は手にした本を黙々と読み耽っていた。

時間は違えど、詩緒の休み時間の過ごし方はいつもこうである。

本人は意識してはいないが、その容姿は人を集めるのに十分過ぎる原因を持っていた。

人のいない場所を探し、そこで一人、過ごすこと。

その行動は、その人の群れを避けるために彼が身につけた習慣だった。

そうしていれば、当然、何れ周囲の人間との係わり合いから隔離されるようになるのだ。

人としては愚かな選択。しかし、彼的には最良の選択であった。

誰も傷付けることなく同年代、同じ学び舎に在籍するという交わり易い他人から、拒絶されていくことが出来るのだから。

遊撃の滝口。

日本各地を転々としながら『魔』を狩る。その役目に就く少年は転校という出来事を、これまでも幾度か繰り返して来た。

その度に同じ愚行と言える行為を、自ら選択し、繰り返す。

それは憎しみの連鎖を断ち切るべく、その行動であった。

憎悪の矛先を憎い本人ではなく、その人間に近い者に向ける。

それは歪んだ感覚、思考に因由するものとは言え、対象に精神的苦痛を与えるには、最も効果的な復讐方法なのだ。

世界の裏では、表の世界よりも顕著にそれは行なわれる。表の世界の人間は『魔』に対して、圧倒的に無力で無知なのも御し易い。

自身には何の危険性も伴わないのだから。

滝口という役目は、正にそれを受け易い立場。

だからこそ、その存在は、世界の表を生きる者たちとは相容れぬ身。否。決して交わってはいけないと少年は決意している。

その左手に在る小さな銀色の鈴は、その象徴に他ならない。

「何、読んでるの？ 渡辺くん」

不意に少女の声があった。それは多くの異性に、それだけで愛らしいと思わせる様な声だった。

その声の方へと、手にした本から詩緒は視線を動かす。そこに在ったのは可憐な少女の笑顔だった。

「こんな場所にいたんだ……暑くな」

そう話しかけながら、少女　　琴音の表情は固まる。

「暑くないの？　なんて問いかけは、コイツに言っても無駄よ。どーせ『お前には関係ない』って返事が返って来るのが関の山だから……それから、こんな時でも竹刀袋かたなを持つてるだとか、手にしてる本の内容だとか、その程度で驚いていたら、コイツとは『まとも』に付き合えないわよ？」

固まった少女の背後から、別の少女の声が起こる。それは喧騒の中に在っても、よく通りそうな美声だった。

「で？　今日は『何の教科書』を読んでいるのかしら？　詩緒？」

琴音の肩越しに顔を見せる、その声の主。それは言わずもがな、少年の相手として退魔を行う、美しい少女の顔だった。

「へえ……。数学の教科書とはまたシブい選択ねチョイス」

当然、彼女は本心からそう言っているのではない。その声色が示すのは、呆れ、であった。その顔も、言葉の内容とは裏腹にそう語っている。

そもそも、少年が開いている頁ページには文字など殆ど無いのだ。数式や記号が羅列されている部分が大部分を占めている。

少年の手にある本は、確かに教科書であった。彼らが授業中に開く、正にそれである。

その教科書は相当に使い込まれたもののように、ボロボロになっていた。

「だ……誰かのお下がり？」

暫しの沈黙を経て、琴音がどちらともなく聞く。それは、その間で考えた会話の足掛かりだった。

「まさか。それは正真正銘、私と一緒に購入した本ものよ」

その問いに、瑞穂が答える。

「え？」

「……コイツは教科書ここれを開くくらいしか、娯楽がないのよ」

確かに開かれた頁は、まだ授業で行なわれている部分のかなり先であつた。

当然、復習の範囲ではないし、ましてや予習というには早すぎる。

「え？」

状況が把握できない。目の前に確たる証拠、現状が在るのに理解出来ない。そういう表情を琴音は浮かべていた。困惑。混乱。そういう色が強く出ている。

「詩緒。今度からメーカー……いや、アンタがそんな物もってるワケないわね……せめて、シャーペンくらい持って開いてなさい。そうすれば、琴音みたいな一般的な思考の人間でも『ああ……こんな
に先まで、もう勉強してるんだ。このガリ勉は……他にすることないのかしらね……』くらいに思われて終わるから。そうそう、適当に書き込みもしたくのよ？ 覗かれてもいいように」

そう。詩緒は瑞穂の証言通り、本当に時間潰つぶとして、それを読んでいるのだ。

購入して高々、一ヶ月程。しかし、ボロボロになるまで開かれて
いるのは、何もこの教科の物に限ったことではない。

休み時間毎に。自宅で暇を持て余したときに。様々な空いた時間を。例えば少しの間であつてもこの少年は適当に選んだ教科の教本テキストを持ち出し、開いているのだ。

「お前には関係ない」

詩緒は無表情に言い放つ。

ほらね。

表情でそう言うと、瑞穂は琴音に視線を遣つた。

しかし、視線の先の少女はそれには気づかない。

少年を見ているのだ。

「……渡辺くん……良かったら、何か小説でも貸そうか？ ……恋

愛物くらいしかないけど……」

憂い、琴音は言う。しかし、その言葉に反応したのは当人ではなかった。発言をした彼女の背後にいた瑞穂が、直後、吹き出したのだ。

「な、何！？ どうしたの！？ 瑞穂？」

琴音は振り返り、笑い崩れる幼馴染みを見る。

「……ごめん。あんまり可笑しくて。いいわね、それ。読んでみなさいよ、詩緒。きつと、教科書そんなものより何倍も面白いわよ」

そして、そう発言するなり、また笑う。

「……何がそんなに可笑しいの？」

きよとんとして訊ねる発案者。

「だって、この無愛想で、朴念仁で、感情の欠落してる様な、他人を全く無視してる男が、恋愛小説なんて読んでる姿、想像したら

」

お腹を抱えながら、涙目で瑞穂は理由を述べた。

「もう……渡辺くんに失礼でしょ？ それに渡辺くんはそんな人じゃないわよ……」

そんな彼女を窺たしなめ、詩緒を擁護する琴音。

渡辺詩緒という少年。

彼は不器用なのだ。

世界の裏に巻き込まずに人と接する術を、適度な距離を保つ方法を持たないのだ。

だから、敢えて人を遠ざけている。

琴音は少年のことを、そう認識していた。

自分のことを忘れろ、そう発言しておきながら、こつして目の前に再び現れたこと。

それはその世界に巻き込まれてしまった、自分を守る為なのは

ないのだろうか。

その行動こそが、彼の人を想う気持ち やさしさ。少年の本質
なのではないのだろうか。

それこそが、その裏付けなのではないだろうか。

何よりも、彼は彼女にとって窮地を救ってくれた『白馬の王子』
に他ならない。琴音には、どう考えても、彼を悪くなど見れないの
だ。

「あら？ えらく詩緒の肩を持つのか？ もしかして琴音ってば、
コイツが好きだったりして？」

からかうべくして作られた、疑わしい目つきで瑞穂は琴音を見て
いた。

「え、えっ！？ あ、う……」

その発言に頬を染め、慌てふためく可憐な乙女。

「冗談よ。琴音には、本命の彼氏がいるものね」
そう言って、瑞穂はまた笑った。

「も、もう……」

恋愛運。占いが得意と自称するこの少女に、琴音はそれを占って
もらったことがある。

彼女の言う、本命の彼氏というのは、その時の相手のことを指す
のである。

その時には、相手の情報を伏せて占ってもらったのだが、どうや
ら彼女の中では、琴音の意中の相手が目の前の少年であるとは思っ
てもみないことらしかった。

目の前で繰り広げられる、一般の女の子らしいやり取り。

それら一切の流れを無視して詩緒は言葉を発した。

「……それで何の用だ？」

そこにあるのは、いつもの無表情面。自分のことが話題だろうと
対岸の火事、である。

「そ、そうよ！ こんな話をしに来たんじゃないでしょ？ 瑞穂」

先の話題に関する少年の反応を見てみたい。自分の事をどう思っているのかを垣間見れるかも知れない。そう思いながらも、琴音はその会話の流れを変える発言に乗っていた。

「……そうね……」

その言葉に、溜息を一つ吐いて瑞穂は詩緒に向き直る。

その表情は一種、諦めを感じさせていた。

「……聞かせて、詩緒。あの時、何があったの？ 何か掴んだんじゃないの？ この間の馬鹿げた真似をしでかしてくれた相手の」

真っ直ぐに滝口を見据えて、陰陽師は問う。それはつい先程まで見せていた女子高生としての物ではなく、退魔術師としての顔だった。

「……俺もお前に確認しておきたいことがある」

そう口を開き詩緒は立ち上がる。

その動きに連動したかの様に、午後の授業の開始五分前を告げる予鈴チャイムが校内に鳴り響いた。

「あー」

その合図に琴音は声を漏らす。

しかし、彼女の眼前の二人の生徒は動こうとはしない。

張り詰めた空気が、二人の間にある。

「……私、先に授業に行くね」

琴音には、そうとしか言えなかった。

自分の通う学校。そこで起った異変。

その原因は、彼女がつい最近知った、兄の居る世界の悪しき存在に因るもの。

自分がそれを止める可能性を持っていることは知っている。

それを止めたいと思う。

そうすることで。それを繰り返して行くことで。何時か兄の前に立つことが、兄の暴拳を止める出来るのだろう。そして、何よりもその世界から伸びる魔の手から、かつての自分がそうだったように関係のない人々を守りたいと願っている。

しかし、その場の雰囲気は、自分を必要としていないことを感じ取っていた。そこに在るものは、もしかすると、まだ超えきれではない『表』と『裏』の境界線なのかも知れない。

自身はまだ、その世界についての知識は、経験は、皆無に等しいのだから。

それに短い付き合いでも、想いを寄せる少年の思考を理解しているつもりだった。

いつも見ていたから。

恐らくは、自分がいる限りは、その少年は話を進めはしないだろう。

頑かたくなに、自身がこの場に留まること。彼らに無駄な時間を消費させること。

そのことが、返って学校に通う友人を始めとする多くの人間に被害を及ぼすとも知れない。

琴音は振り向くことなく、階段の入り口の扉のノブに手を掛ける。

「……大丈夫よ、琴音。『今は』よ……」

決意を再確認する様に。自身に言い聞かせる様に。

少女は小さく呟くと、扉を開け、階段を降り始めた。

「……ごめんね。琴音……」

扉の閉じる音に掻き消された声。瑞穂は無言で見送った幼馴染にぼつりと謝罪して、改めて滝口の少年を見た。

「……で？ 何なのよ？ アンタが私に確認しておきたいことって、発言を先に譲った真意は、他でもない。

目の前の少年の唯我独尊ぶりを知っているからである。

こつこつの場合、こちらが先に発言したところで、この少年は、その発言を完璧に無視して自分の話をする性質たぐひなのだ。

「……今回の件。お前は手を引け。俺一人で動く」

詩緒は静かに口を開いた。

「はあ!？」

素っ頓狂な声で反応する。それはあの夜、彼の惨敗ぶりを見た陰陽師には信じられない発言だったのだ。

「アンタ、馬鹿!？ 相手はアンタにとって天敵でしょ!？ アンタが手を引くならいざ知らず、なんで私が!？」

瑞穂には解っていた。敵は詩緒の内に眠る鬼を操れる相手なのだと。

「大体、私が『撫物』^{なでもの}をしてなければ、アンタはまだ満足に動くことも出来なかったハズでしょ!？ どういうつもりよ!？」

少年に架せられた呪を解除したのは、他でもない彼女なのだから。撫物。それは陰陽道の秘術の一つ。

人ならざる存在や力による負傷、呪詛。^{しゅそ}それは『穢れ』^{けが}である。

その呪術は対象の穢れを人形^{ひとかた}に移し、被い去りることで、癒しをもたらすのだ。

言葉を荒らげた少女を無視し、詩緒は自分の話を続けた。

「ここからが本題だ。俺が確認しておきたかったこと」

風が流れた。

少女の長い髪が、ふわり、揺れる。

銀色の小さな鈴が、寂しく、儚げに、鳴く。

「賀茂瑞穂。お前がここに居る本当の目的は、俺の抹殺……そ
うだな？」

滝口の少年は風の中、淡々と言葉を紡いだ。

第五話：接点

強い陽射しが少年と少女を照らす。

二つの白い制服の足元。熱を帯びたコンクリートの床面に、焼き付いた様な黒い影が落ちていた。

光に包まれた最中。

ただ、沈黙が流れる。

つい数分前までこの場所に届いてた、生徒たちの活気ある歓声は聞かれない。

五現目の授業の開始を告げるチャイムは、すでに鳴り終えているのだ。

二人を取り巻く静寂は、この施設に在って、当然の状況だった。

詩緒の発言の後。

暫くの間。

瑞穂はその状況に身を任せていた。

渡辺詩緒という滝口の抹殺。

「…………ええ。そうね…………」

美しい少女は一つ、息を吐いて。そして、沈黙を破る。

彼女が呟いたのは肯定の言葉。

それは確に、その陰陽師の少女に課せられた任務の一つだった。

この国の各地に散り、『魔』を狩る滝口たち。

彼らはその役割によって、大きく二つに分類できる。

自身が生活する地域で発生した異変に対して動き、その土地を専

属的に『魔』の脅威から守護する者 『防人』^{さきもり}。

そして、『魔』による異変の発生した、或いは、発生すると予測された土地へと赴き、それを討伐する者 『遊撃』と、である。

予測された。

つまりは、まだ発生してはいない未来の事変^{こと}。それを。その『魔』の胎動を、予言する者たちが存在しているのだ。

賀茂瑞穂という陰陽師の属する組織、陰陽寮。そこで内勤を専門とする複数の陰陽道の占術者。陰陽博士、天文博士、暦博士の任に就く陰陽師たちである。

少女の目の前の少年を含め、遊撃の任に就く滝口は、彼らのもたらず言葉によつて始めて効率的に活動することが適う。

滝口はあくまで武人、『魔』を狩る武士でしかないのだから。

予言者の存在がなければ。彼等は手探りで、虱潰しに活動するよ
りないのだ。そして、それは全ての『魔』によつて起こされる惨劇
に対して、完全に後手に回ることにはならない。

賀茂瑞穂という陰陽師と、渡辺詩緒という滝口。

二人は単に幼少の頃に修行を共にした旧知の仲だから、という理由で行動を共にしているわけではないのだ。

それはむしろ、偶然に過ぎないこと。

ここにいる陰陽師の少女は、陰陽寮が天文、暦数を始めとした占術により予見した『魔』の兆候^{めいこう}を少年に伝え、その意向を告げる伝言者^{センジャー}なのだ。

陰陽寮。その総取締役を陰陽頭と言う。

その機関は、かつては明治初頭まで存在した正式な政府機関、中務省の一つであったが、土御門晴栄^{つちみかど せいゑい}を最後の陰陽頭とし、表向きは廃止され、歴史からは消えていた。

しかし、その役目に就任する者は、陰陽寮が影で現存しているのと同じく、現代に於いても存在している。

現在の陰陽頭の名を安倍晴歌あへはるかと言った。

彼女に滝口としての力量を認められ、信頼も厚い詩緒。彼の元に来る依頼、協力要請は難易度の高いものが多い。

また、現滝口の棟梁である平井万葉が不穏な動きを見せつつある今、彼女が頼れる滝口は彼を除いていない。そういう実情もあった。複数の滝口に援軍要請出来ず、その上、危険度の非常に高い任務だからこそ、共に行動し、協力することとなる陰陽寮から派遣される退魔術師にも、卓越した力が必要なのだ。

そこでその役目に任命された人物。それこそが若輩ながらも、稀代の、と謳われる陰陽師、賀茂瑞穂だったのである。

だが、それは滝口の少年に隠された任務を考慮して、という意味合いも強かった。

鬼という少年の心に宿った闇。紛う方かたない『魔』。

その闇の強大さは、かつてこの国に大きな混乱と災いを招いた、伝説にさえ名を残す鬼の王たち。産まれながらの鬼、純血種のそれに匹敵する。

陰陽寮の首脳陣の間では、それは共通の所見であった。

彼に陰陽寮からの依頼を継続させること。渡辺詩緒という滝口を、『魔』の脅威に常に晒し続けること。

それは、彼自身を闇に堕とし込むことと同義なのではないか。秘められた『魔』が覚醒する危険性を増長させるだけなのではないか。新たな脅威を創り出すだけなのではないか。

だからこそ、そう危惧する意見があるのは、さも自然な流れであった。

しかし、批判しながら、彼に頼らざるを得ない状況であることも、否定的な考えを持つ彼らにしても、真なのだ。

故に。

もしも、その『魔』が目覚めてしてしまった時に、即座に対応

宿り主の抹殺を行えるだけの術者が、その傍らには常に必要である。

その訴えが起こることも、当然の事態だった。

「……誰の入れ知恵なのかしら？」

辟易と瑞穂は呟く。

陰陽寮に属する少女には、幾つかの心当たりがあった。

いけ好かない。彼女がそう思う何人かの人物　この件に批判的な声を荒げる権力者、過去の陰陽寮の権威に確執する老害に、げんなりとして見せる。

「でも安心なさい。私は『そういう事態にならない様』に、アంతの傍にいてあげるんだから」

それは陰陽頭の意向、願いでもあった。

本心からの協力者。そういう意思を伝える言葉。少年に向けられた、その表情も。先ほどまでのものと違い、それを現している。

自身に送られた少女の意思、やさしい微笑み。

しかし、それにも詩緒は反応を見せない。いつもと変わらぬ無表情で、冷たくそれを迎えていた。

「……まったく。こういう時くらい、感情を顕わにして欲しいわね……何の反応もなかったら、私はどうすればいいんだか……」

瑞穂は両手をそれぞれの腰に当て、詩緒から視線を逸らすと、先ほどよりも深い溜息を吐き、そうぼやいた。

「……別に誰に聞いたことでもない。考えなくとも、理解できることだ。安倍の立場を考慮すれば、無策で俺に陰陽寮の要請を遂行させるとは考えられない」

漸く口を吐いた少年の言葉は、ただ冷静に自身を分析したものだ。つた。

一枚岩である組織は皆無と言えるほど少ない。むしろ、人が集まり作られたものが、一つの目的の元に完全に統一されることの方が異常と言えるだろう。

それは陰陽師であることが所属条件になるもの。つまりは、その特殊な才能が必要な故、現代に於いて、絶対的に構成員の少ない組織、陰陽寮にとっても同じことなのだ。

否。なまじ彼らには見えない物が見える分、そして、それが完全なる確定事項だと判断し難い分、見解の相違は大きく発生するのかも知れない。

彼らが見ることの出来る未来とは、あくまで『予測された未来』であり『確定された未来』ではないのだ。さらには読み手が変われば、読む場所が変化すれば、ズレや違いの生じる不安定なものなのだから。

渡辺詩緒という少年に関する齟齬そごは、その一例でしかない。

彼を使い続けるという、自身の意思。しかし、それに対する否定的な意見があるのならば、対処しておく必要性が集団の中心人物にはあるべきなのだ。組織というものを維持し、統括するためには。

そして、安倍晴歌という人物が、そういう対応の取れる優れた人物である。ただ、その事実を詩緒は知っているだけだ。

「へえ……じゃあ、アンタは知ってて、これまで黙ってた、と。そのくせ、今回は敢えて確認したワケね？ いざという時、自分を確実に抹殺させるために……何でわざわざ危ない橋を渡ろうとするの？ まあ、アンタの考えることくらい解ってるつもりだけど……」

問いを言い終え、閉じられた艶やかな唇が間髪入れず開いていた。「返事は『お前には関係ない』かしら？ 違うわね。『私に關係ある』からこそ、なんでしょ？」

そして、勝ち誇ったようにそれを綻ひらばせる。「……というワケで、アンタの意見は却下よ。私だけは特別扱いしないで。愚痴りはするかもしれないけどね」

言葉の直後、二人を撫でるように風が流れた。

それは、そよぎ風。

心地よい小さな鈴の音色が聞こえる。少女の亜麻色の髪がそれに合わせて踊った様に、ふわりと揺れていた。

「……どうあれ、アンタの考察とおり、一応、私にはアンタをいつでも殺せるようにしておく義務があるの。野放しに放置なんて、できないわ。それにどーせ、もしもの時は『躊躇することなく俺を殺せ』とか言うつもりだったんでしょ？ だったら、尚のことじゃない。私が傍にいた方が話が早いわよ？ その時、本当にどうしようもないなら……アンタの遺志を汲んで、私が殺してあげるから」

「……好きにしる」

目を瞑り、下に顔を向けると少年は少女に返す。
その刹那。一瞬だけ。そのいつもは変わらぬ仏頂面が、微かに微笑んだように瑞穂には見えた。

「詩緒……何なら今、遺言を預かっておこうか？」

笑顔で物騒な言葉を少女が何気なく聞くと、そこにはもう普段の少年がいる。日常に在りながら、滝口であり続ける少年の顔が。

「……お前の問いに答えておく。この間の召喚者は八卦衆の一人だった……狙いは、お前だ」

そして、さも当たり前のように、先の本気とも取れる冗談を無視して見せる。

「やっぱり、ね。そんなことだろうと思ったわ……望むトコロじゃない。返り討ちにしてやるわよ」

納得げに呟くと、自信に満ち溢れた表情を浮かべ瑞穂は答えた。

「忠告しておく。おそらく、相手はお前に特化した力を持っているはずだ」

「解ってるわよ、そんなこと。だから、単体で私たちの前に現れたんでしょ？ 関係ないわね。私を誰だと思ってるの？」

少年の警鐘。しかし、それでも少女の自信は揺るがない。

「……だったら、もう一つ。お前が動こうと、俺は単独で動く」
まだ対峙さえしていない敵に勝ち誇る陰陽師に、滝口はそう告げ

ると屋上の出口へと足を向け歩き出す。

「ちよっ！ 何、それ！？ アンタ、私を餌にするってこと！？」

その少年の活動方針の報告に、聡明な少女は全てを理解していた。だから横切った少年に非難の声を上げるも、しかし、少年は何の反応も見せない。

何事もないように、それを流して歩き続ける。

「それ男の子のすること！？」

続けた聞こえた、どこかで聞いた台詞。

「特別扱いするな……だつたな？」

ドアノブに手をかけていた詩緒は、振り返ると瑞穂を一瞥して返した。

それは確かに、戦術としては有効な策なのかも知れない。

全貌の明らかになっっていない敵に対して、おとりを泳がせ、それに食い付いた瞬間に奇襲をかける。結果、挟撃になるわけである。

知性的な部分で、陰陽師はそれを理解していた。

しかし、少女としての感情が、それを拒絶したのだろう。

如何に稀代の陰陽師と謳われようと、賀茂瑞穂という人物はあくまで一人の少女なのだ。

こういう時にはやはり違った反応が、あつて然るべきだと、その部分は訴えたかつたらしい。

例えば、俺が守つてやる、そんな対応。

「愚痴りはすると言った！」

多くの学生たちが、教師の言葉に静かに耳を傾け教えを請う。もしくは、そういう素振りを見せている時間。

つまりは、極めて静かであったこの校舎に。

詩緒によって開かれた鉄扉を抜けて、瑞穂の怒声が響いていた。

からん。そう乾いた音を立てて、ピンク色のシャーペンが卓上に転がる。

「み、瑞穂?.....」

手から落ちた筆記用具に手を伸ばさずに、それを額に当て俯くと廊下に面した座席に座る少女は小さく呟いた。

つい先ほど。廊下を抜けて行った声は、幼馴染のものに間違いな
いことは明らかだった。

「もう.....何をやってるのよ.....」

呆れ声で一人ごちる。

教室は突然の大音声に、ざわめいていた。その中で彼女の小声の愚痴が続く。

「せっかく、渡辺くんの事は上手く理由付けできたのに.....」

午後に入り、座席に座っていない詩緒せいとに気付いた教科担に、欠席の理由を伝えたのは琴音だった。当然、真実を伝えたわけではなく、病欠として報告したのだが。

頭を抱えた琴音。彼女の真後ろに座る少女には、ざわめきに掻き消されていく、その嘆きの声が聞こえていた。

「.....源さん.....賀茂さんの知り合いなんだ.....」

転校してきた、噂の美少女。社交的で、占いが得意なのだと言
は賀茂瑞穂について聞いていた。

このクラスに編入されたのが、変人だと噂され始めた、あの少年
でなく、彼女だったなら。

少女は常々、そう思っていたのだ。

思わぬ場所で見つけた、彼女との接点。ある決意を胸にすると、
少女は一人、頷いていた。

第五話：接点（後書き）

<用語解説>

おんみょうはかせ

陰陽博士：占い・呪術の実戦、および研究・教授を職掌とする役職。

てんもんはかせ

天文博士：天体を観察し、そこにある異変から、その意味・未来へ

の影響を判断。上級官庁に報告する役目を持つ役職。彼の安倍晴明

が就いたことで有名（？）でもある。

れきはかせ

暦博士：天の運行から暦を作成する役職。

第六話：理由

「何故、見逃したのだ？ 邪魔な駒を一枚、排除するには絶好の機会だったと思うのだが？」

雄吾は自身の前に控える少年に淡々と問いかけた。

脅す。そういう認識はないのだろうか、しかし、その低く腹の底に響くような野太い声と、厳つい顔は、本人にその意識が無くとも他者に重圧プレッシャーを与えることだろう。

滝口。その最高峰の武力を誇る者、四天王。伝承される宝具の使い手として任命された、退魔の切り札。

そこに至るまでに、数々の修羅場を潜り抜けて来たことよって身に纏った風格。

身体的な特長から与えられる重圧に加え、彼にはそれを感じることもが不幸にもできるのだ。

だから、その場に居合わせる少年は萎縮していた。大隈雄吾という男に完全に飲まれていた。

彼とて、滝口の中では選りすぐりの兵つわもの、八卦衆の一員でありながら。

「は、はい……しかし、あの滝口にはまだ、利用価値があると思いましたが……」

件の障害と成りうる人物、渡辺詩緒を見逃した鬼の召喚者は、巨漢の顔色を窺いながら答える。威厳をありありと漂わせるそれに、しかし、変化は見られない。

そこは丑寅の自宅であった。

とは言っても、現在ここで暮らしているのは彼一人である。つまりは、彼こそがこの場所の主であるのだ。

しかし、まるで自身がこの家の主であると言わんばかりの態度で、雄吾はリビングに配されている複数人掛けのソファー中央に陣取り、深々と腰を下ろすと悠々とくつろいでいた。

対する真の家主は、その前に直立不動で待べる。その顔は硬く強張り、ここが彼にとって一番の安息の場所であったことなど、微塵にも感じさせない。

丑寅が標的ターゲットの通う学園に、畏を張ってから数日後。

警察が行なった、爆破事故の原因究明と安全確認作業。それに因って生じた休校期間が明けた、その朝のこと。

彼の元に、その巨漢が来訪したのだ。

「吾あがは、万葉様より使わされた監視者。だが、仕損じる事が必要なければ、やり方は主の思うままで良い。そう考えておる。しかし、役目もある。解かるな？ 吾がには、万葉様に事の顛末を包み隠さず報告する義務があるのだ。故に、聞きたいのは、その真なる目的もくと。曖昧な言葉なぞは不要。何故なにゆえに、邪魔者を敢えて残したのか……その真意を聞かせろ」

どすの利いた重低音が、狭いリビングに反響していた。

そこは、ごくごくありふれた、都市部に居を構える中流一般家庭のそれと変わりはない。何の変哲も無い居間である。

この巨漢には些か、窮屈だろう。それを、その声もが主張しているかのようだった。

「……監視者、ですか？ ……そ、それは平井様が私を信用していない……そういうことなのでしょうが？」

ライバル視していた同輩、辰巳当麻の失脚。そして、巡ってきた好機チャンス。

それは風を司る、最も空位の四天王の座に近かった剣士に取って代わる機会だったのだ。

動揺が窺える丑寅の言動。

運命の刻ときが近い。

その刻を迎えるために活動してきた八卦衆。だから、当然、それを丑寅は知っている。

その節日に自身が八卦衆の筆頭と認められていること、もしくは四天王の座を襲名しているということ。それは、迎えた『新たな世界』の支配者に、より近い存在であることと同義。

よって平井万葉という人物からの信頼は、何事にも変えられぬことなのだ。

「フ……安心するがいい。主の力が、これからの吾が等に非常に有益である事は、万葉様でなくとも理解している。ここで主を失うわけにはいかぬ。吾がが此処に居る所以は、言わば平井様のそういうお心遣いの表れだ……何より、主の忠誠心は絶対不変の物。吾がは、そう確信している。だからこそ数日の間、主の前に姿を見せず、他の用件に動いていたのだが……それは思い違いであつたか？」

懐疑的な言葉を投げかけながら、しかし、雄吾はその雄々しい顔に薄笑いを浮かべる。

「いいえ。僕は例えどのような事になろうとも、平井様の忠実なる僕です」

卑屈。そういう言葉を丑寅は、さも当然の如く、そして、一片の躊躇なく男に対して即答して見せた。

その女性に逆らうこと。それは、絶対の死でしか有り得ない。

丑寅は確実な事実として、それを認識しているのだ。

服従は恥ではない。それは丑寅にとって摂理なのである。

だからこそ。この八卦衆の一員は、辰巳のような自身の感情に囚われた奔放な言動や、自身を売り込むようなスタンドプレーの一切を行わず、いらぬ反感を買わぬ様、ただひたすらにその命令だけを全うして来た。

辰巳のみならず、八卦衆の面々に格下だと思われようとも。

そのことで、どれだけの煮え湯を飲まされてきたとしても。

いつか、それが主、平井万葉に認められ、報われると一心に信じて。

少年の服従の意思に、満足げに大隈は頷くと分厚い唇を開いた。

「して……あの滝口を生かした真意は？」

「あの滝口は切り札です。そして、間違いなく、我々の優秀な尖兵となります」

「ほう……」

興味深げに大隈は嗤う。

「……やはり、主に賀茂瑞穂の抹殺は一任したままで良いようだな……丑寅よ。吾がは、主の援兵と心得ておけ。万葉様は主こそが、何れ八卦衆を束ねる者、そう考えておられる。その期待に見事、応えて見せるがいい」

「任せてください。後は仕上げにかかるだけです」

力強く丑寅は答えた。

滝口による陰陽寮に属する陰陽師の抹殺。

それはこれまでの長い歴史の中で、この国を『魔』から協力して守護して来た関係を破棄することとなる。

何よりも、彼らこそが『魔』となることと同義である。

しかし、その丑寅の顔に微塵の躊躇いなど見られず、唯、自信に溢れていた。

それは彼の真の主こそが、何れは絶対的な支配者になることを確信しているということ。そして、自身が陰陽師、魔術師カテコリーという範疇ジャンルに属する者に対して、絶対優位者ジョーカーなのだという自覚に因るものだった。

「八卦衆、その一卦。『山』を司る者よ……吾がも、お前に期待しておる」

大隈のその声は変わらず低く、室内に反響する。

だが、それに、丑寅が威圧感を感じることはもうなかった。

「……源さん？ 少しだけ……いいかな？」

一日の授業の全てが終わり、放課後に入った直後。少女は背後から自身に問いかける、小さなその声を聞いた。

「え？」

消え入りそうな声。錯覚なのかも知れない。そうとも思いながら、琴音は振り返る。

そこには真後ろの座席に座る少女の、申し訳なさそうな、酷くおどおどした顔があった。

「部活の開始まで、まだ余裕があるから大丈夫だよ？ どうかしたの？」

一瞬、驚きを浮かべたものの、琴音は満面の笑顔で彼女にそう返事をする。

瞬間、垣間見せた表情。

それは、彼女から先に話しかけられたことが、予想外の出来事だったからだ。

彼女の名前は姫川清美。

とても内気な少女。そして、そのために、クラスでもどちらかと言えば孤立しているような印象を琴音は受けていた。

一学期の終わりも近づいた、この時期。

しかし、琴音は清美がクラスメイトと親しげに話す姿を見たことがないのだ。

当然、彼女にはクラス内に親しい友達ができた様子もなく、まだこの学級に馴染んでいないようだった。

休み時間ともなると、清美はすぐに教室から姿を消す。どうやら、中学校のときの友人の元に向かっているらしい。

実際に、琴音は何度か廊下で友達と楽しそうに話している彼女の姿を目撃している。

その時の表情こそが彼女の本来の明るさであり、どこかの少年とは違い、人を避けているのではなく、単に酷く人見知りのするタイプの少女だという表れなのだと思っていた。

席替えが行われたのが、つい最近。件の夜の直前のこと。

いつか自分からきっかけを探して話しかけ、打ち解けようとは思っていたものの、まさか、彼女の方から話しかけられるとは思ってもしなかったのだ。

琴音の笑顔を受けて、清美は口を開いた。しかし、申し訳なさげな表情は崩れぬまま。口調も何処か、たどたどしいものだった。

「あ、あのね？ 源さんて、仲がいいのかな？ 転校生の」

転校生。その単語に、話しかけられた少女は過剰な反応を見せた。穏やかに微笑んでいた顔が、見る間に真っ赤に染まる。

それは琴音にとって、想いを寄せる少年と等号イコールなのだ。

「わ、わ、渡辺くんとか、私が！？ そ、そんなことないよ！？」

渡辺くんとは、そ、そう、何ていうか……あ、そうそう！ 渡辺くんがね、転校して来る前に、私が街で道を教わったことがあるの！

そ、それだけなのよ！？ うん！ そうなの！」

慌てふためき、清美の言葉を遮ると二人の関係を取り繕う。

琴音は恋愛沙汰に疎い人生を歩んで来た。可愛らしいと大半の異性にそう思わせる、可憐な容姿を持ちながら、彼女は異性と恋人として付き合ったことは、これまで一度とない。

気恥ずかしさ。恋愛経験の少ない人間のほとんどがそうであるように、琴音が人にそれを看破されるのが恥ずかしいと思わせる感情。昼休みの屋上で、今、ここで。彼女にそういう対応を取らせる原因はそれであった。

そういうことに慣れる機会。それがなかった訳でも、まして、彼女が同性愛志向者レズビアンな訳でもない。

恋愛に興味もあつたし、告白されたことも幾度かある。

しかし、彼女は自身の本心を捨て、恋に恋するようなことはしたくはなかった。それに理想の男性像に、告白してくれた少年たちは離れた存在だったのだ。

夢見がち。彼女の理想を知る友人の中には、そう評する者もいた。だが、不幸なことかも知れないが、その理想の男性が常に間近にいたのだから、彼女は決してそう思ったことはない。

だから、自分が夢見る少女だと自覚したこともなければ、彼女たちの声に流されることもなかった。

そして、後悔もしていない。

事実、その理想像あにに似た、人を思いやる優しさと、心の強さを持った少年が彼女の目の前に現れたのだから。

その真偽は定かではないが、少なくとも琴音は少年に対してそう思っている。

窮地を救われたから。それが原因で発作的に、その少年に好意を抱いたのかも知れない。

そう冷静に自分の感情を見つめ直した日もあった。

しかし、少年を知れば知るほど、その想いは募るだけだったのだ。

「み、源さん？　ち、違うの……賀茂さんのことなだけで……」
突然と取り乱した琴音に対して、清美は言い辛らそうに、ぼつりと呟いた。

「え？　え？　あ、ああ！　そうよね。渡辺くんじゃなくて、瑞穂、ね？」

胸を撫で下ろすと、安堵を浮かべ琴音は笑う。

「……うん。賀茂さん」

少女が少年に想いを寄せていること。

清美もそれに気づいていたが、敢えて、それを流した。

本人はそれに触れて欲しくないことも窺えたし、何よりも初めて会話する人間に相談することではないだろうと、清美は思っていた。それに勝手な言い分なのかも知れないが、お門アドバイス違いなのだ。

清美は、今の自分こそが、その話題について助言アドバイスを受ける立場な

のだと思っっているのだから。

恋愛上手な、恋愛経験豊かな人物。または、神頼みでも構わない。心の安定を。彼氏を信じさせて欲しいのだ。

源琴音という交流のない他人に、彼女が勇気を振り絞って話しかけたのは、その後者に伝手つてがあつたことに因よっているのに他ならぬいだから。

「……瑞穂と何かあつたの？ 何か失礼なことでも姫川さんにした？」

気を取り直すと、琴音は不安そうに訊ねていた。

「ううん。違うの。賀茂さんを紹介して欲しくて……」

「瑞穂を？」

不思議そうに少女の言葉に返す。

「賀茂さんって、占いがすごく得意なんだって聞いて……」

「ああ……なるほどね……」

琴音は、その言葉に納得した。確かに件の少女は占いが得意なのだろう。いつ何時であっても、それ関連のアイテムを持ち歩いていることも彼女は知っている。

占いに精通していて好きなことと、その信憑性が比例している訳ではないのだが。

「分かったわ。明日にでも一緒に、瑞穂のところに行きましょう？」

快く、その願いを琴音は引き受けて見せる。占い云々はどうかあれ、それが彼女と打ち解けるきっかけなのは、明白だったからだ。

「ありがとう。明日、ね？」

そこで初めて、清美は表情を変えた。

「うん。明日 今日が多分、部活が始まる時間まで、瑞穂は手が空いてないだろうから……」

心底、嬉しそうに微笑む清美に相反し、琴音は苦笑いを浮かべる。

今頃、生徒指導室で剣道部顧問、生徒指導、話題の少女の学級担任という三つの肩書きを持つ教諭に、五限目の授業抜け出しの件で、こっそりとお叱りの言葉を受けているであろう占い師を思い描いて。

第七話：転機

山の端で大きく構える白い入道雲。辺りに聞こえるのは蝉の声に混ざった、子どもたちの笑声。

部活に向かった琴音と別れた後。放課後といえども、まだ陽の高い空の下。住宅街の坂道を清美は独り歩いていた。

彼女の左右には、まだ築年数の浅い家々が建ち並ぶ。建築中の住宅やマンションも、所々に見られていた。

ここは数年前に山を切り開き、住宅地として整備された新興住宅地である。

都心とこの都市を結ぶ私鉄沿線が開通して、十数年ほど。この街は、それを契機に急激な発展を見せていた。そして、未だに人口は増加傾向にあり、都市開発が継続されているということ。その様が、この地区の様子からも窺い知れる。

この街で生まれ育ちながら。清美にとって、ここは縁ゆかりの薄い地区だった。幼い頃から人見知りが激しく、外で遊ぶことをほとんどしなかった彼女にとっては、つい最近までのこの場所は秘境とも言える土地だったである。

しかし、今の清美は、この土地に強い縁えにしを感じていた。

その手にあるのは大きく膨らんだビニール袋。大きな小麦色をしたバケツトパンと、程よく熟れた赤いトマトが、そこに入り切れずに露わになっている。たった今、この付近に在ったスーパーマーケットで購入した様々な食材が、そこには入っているのだ。

自宅に帰ることなく目的地へと向かう、学生服姿の少女。その曖昧な記憶を頼りに、緩やかな傾斜を上る。まだ数えられる程度しか歩いたことのない、この道を。

笑顔で彼氏が迎えてくれるであろうことを期待して。

その日、安藤慎太郎は学校を欠席していた。

それを清美が知ったのは、昼休みのことである。

「どしたの？ 清美？」

その時間。その教室を訪れたとき、彼女を出迎えたのはいつもと同じ親友の顔だった。しかし、その表情は、その言葉は、いつもの友人のものとは異なっている。

「え？」

その対応に、清美はきよとした表情を浮かべた。

普段の奈津美ならば、清美の顔を見るなり慎太郎を呼んで来てくれるのだ。

慎太郎と清美。二人の恋のキューピッドとなった彼女は、今現在も、その橋渡し役を務めていた。

想いを告白し、彼氏と彼女という夢にまで見た関係になることが叶った清美。しかし、学級という仕切りは、二人を引き離していたのだ。

昼食を共にするために彼氏の元に行く。そういう理由があったにしても、清美には他所の教室に入るだけの勇氣はなく、卒業前と同じく慎太郎とクラスメイトになれたという幸運。それは、そう清美が思うだけのことなのである。に恵まれた彼女の助力を、今が必要としていたのである。

だが、先の態度は二人の仲介役の拒否とも清美には取れてしまっていた。

その脳裏に、驚きと同時に湧き起こったものは疑念。

白を切っている。慎太郎と私を合わせたくない。

この親友と思っていた人間でさえも、私の恋の障害になってしまったのだろうか。慎太郎に惹かれてしまったのだろうか。

そういう、歪こまじで濁にごった感情。

しかし、それを清美はすぐさま振り払う。彼女は今尚、協力して

くれる大事な友人なのだから。

彼女に限ってそれはないのだ、彼女を信用しなくて誰を信用するのだ、と。

「え……つと、慎太郎は？」

しかし、状況は理解できないでいた。いつもの用件を改めて伝えるべく、少女は口を開く。

「し 知らないの？ 安藤のヤツから、何も聞いてない？」

慌てたような、驚いたような。あやふやな表情を浮かべて、奈津美は疑問に疑問で返した。

「え？ 何のこと？」

「携帯見てみなよ？ メールとか入ってない？」

「う、うん」

奈津美に言われるがままに、清美は彼氏と自分、二人分のお弁当の入った可愛らしい手さげ袋に手を伸ばす。そして、そこからパステルピンクの二つ折りの携帯を取り出すと、それを開いてみた。

しかし、メインディスプレイには、メール着信を告げるアイコンは表示されてなどいない。

「……入ってないみたい……」

小さな液晶画面に視線を落としたまま、少女は呟く。一応、念のために新着メール問い合わせの操作を行ってみるが、やはり言葉通りにそれは無かった。

「信じられない！ 毎日、清美がお弁当作って持って来てくれること、知ってるくせに！」

「え？ 何？ どうしたの？」

突如と憤慨して見せた友人に、要領を得ない清美は再び訊ねる。

「安藤のヤツは今日、欠席してるのよ！」

「え？ どこが悪いの？」

奈津美の告げた言葉に、少女の顔には不安が浮かぶ。

「もっ……」

そんな友人の態度に、奈津美は毒気を抜かれ、溜息を吐いていた。

「清美……アンタ、なんで怒らないの？ アイツはアンタに一言も断りなく、休んだんだよ？ 毎日、お弁当作るのだから大変でしょ！？ アイツはそんなアンタを無視したんだよ？ 普通、そーいう時、連絡の一つや二つ入れるモンでしょ？」

「……でも、連絡できないくらい、体調が悪いかも知れないじゃない？ 私のコトなんてどうでもいいよ……慎太郎、大丈夫なのかな……」

その顔にさらに不安が色濃くなる。

そこに在る、今にも泣き出しそうな表情。すでに、ここに心あらず。彼女の想いは、彼氏へのみ送られているのが、奈津美でなくとも見て取れた。

「病気とかじゃないのよ！ 今もウチのクラスの男子連中と、携帯で話してるの！ ホラ！」

再び起こった憤懣ふんまんの感情を表現するような声と共に、奈津美が室内を指す。その先には、男子生徒が群れて馬鹿騒ぎをしていた。

「ルーナルト突入には、二十二日の夜の公園で殺戮狩人ハウンドフレッシュヤーと戦闘するんだよ！ ……え？ 試した？ ……強すぎて、勝てない！？

当たり前だろ！？ 勝てるわけねえーよ、素手で戦闘したって！ 相手を誰だと思ってるんだよ！？ 殺戮狩人だぞ！？ アキラだぞ！？ 関智せきともだぞ！？ ハンドガンだよ！ 何のために銃を持つてるんだよ！？ それ、ぶっ放すんだよ！ 威嚇射撃しろ！ そしたら、過去回想イベントが始まって、戦闘が強制終了すつから！」

その中心にいる、時代錯誤のリーゼント頭の少年が回りを気にする素振りもなく、携帯の通話口に大声で話しかける。

その取り巻きが、その声に合いの手を入れるなり、関連の話題 清美には全く理解できないのだが、キャラクターの名前だの、その声を担当している声優の名前だの、原作者の他作品の名前だのを 出しては、またも盛り上がりを見せていた。

室内に聞かれる騒音の大半は、そこから聞こえるものである。

「……何の話？」

奈津美に視線を戻すと、根本的な疑問を清美は口にする。

「ゲームよ、ゲーム！ 何でも昨日、宮増みやますが貸したソレを徹夜でやって、休んだみたいよ？ 本当にバカよね！ バカ！」

真つ先に視界に飛び込んだリーゼントの少年こそが、その宮増という生徒であることを清美は知っていた。慎太郎の親しい友人の一人だったからである。

呆れ顔で友人の彼氏である人物を非難しながら、清美の疑問に返答を終えると、神妙な顔を作り、彼女は続ける。

「……ねえ。本気で考えるべきだって……安藤のヤツは、清美のコトを彼女として、まともに扱ってないよ？ 前から言ってるように、別れるべきだって……」

この恋のキューピッドでさえ、今や清美に別れを促す友人の一人だった。いや。現状、二人の交際を応援してくれる人物など、清美には存在しないのだ。

清美の誕生日という記念すべき日。恋愛関係にある二人にとっては、クリスマスと並ぶ一大イベントであろう、その日。しかし、慎太郎はその日のデートの約束をすっぱかしたのだ。

以来、誰も彼を擁護しようとはしなかった。元々、その少年は清美という彼女を蔑ないがしろにする一面が見受けられていたので、その出来事は致命的な印象を友人たちに与えてしまったのである。

その気持ちは清美にも解る。だが、当の本人はまだ、彼のことが好きで好きで仕方ないのだ。その日、あれだけ悲しい想いをした張本人にも関わらず、別れようなどと思えもしないのだ。

それは誰に否定も非難もされることではないはずである。しかし、清美は孤立してしまっていた。

最早、誰にも彼氏との関係を相談できない状況だった。愚痴ですら同じである。誰に何を話しても、返ってくる答えは破局を促すものでしかないのだから。

「何！？ 昨日はツツミルート攻略やってた！？ 彼氏コイタどうしたんだよ！？ お前、正規ルナルートのフラグ立ネットてられないで、何で攻略板

でも攻略未確認のキャラのフラグ立てられんの!?　　ってか、頼むから突入条件、教えやがれ!」

意味不明の大きな響き（おびき）が起こっているその場所で。今まさに、友人と携帯越しに談笑しているであろう彼氏。

そこは数歩、歩けば届く距離なのに。受話器の向こうに聞こえるであろう、愛しいその声は、清美には少しも届きはしない。

「……………うん……………」

彼女には、そう返すしか術はなかった。例え、否定的な台詞を告げたとしても、それは火に油を注ぐだけの効果しか持ち得ないのだから。

「本当に!?　　アンタ、本当に分かったの?」

嬉しそうな表情で奈津美は念を押す。

「考えとく……………」

お茶を濁す答えを呟くと、清美は間髪入れずに友人に小さく手を振った。

「ゴメン。奈津美。もう行くね?」

そして、彼氏の友人たちの声にも背を向ける。

奈津美という自身の友人も。慎太郎の友人である彼らも。

これ以上ここに居ても、それらに心を苦しくさせられるだけなのが解ったから。

「清美!」

自身を呼び止めるような叫びを振り切って、小走りで清美はその場を後にした。

だから。少女が聞いた、その直後の授業時間での彼女の（こぶね）呟きは、とても大きな救いに聞こえた。啓示だとさえ思えた。

だから。勇気を出せた。面識のほとんどない人間に、初めて自身から声がかけられた。

そして、希望は見えたのだ。まだ、慎太郎を好きでいられる自分が、他の誰かに認められる気がしたのだ。許される気がしたのだ。

何より、自分の殻を破れたこと。

それは間違いなく、最愛の人が与えてくれた力。彼を想う心が、可能にしてくれたこと。

少女は少し、強くなれた気がしていた。彼を想う限り、自分の力で前に進めるのだ。

自分から、また動こう。想いをまた、あの人に伝えよう。届け続けよう。そう思えた。

春。自分を受け入れてくれた彼は、それできっと、もっと自分を好きになってくれる。そう信じて。

彼の家に向かうということ。

彼に告げず、彼の了解を得ず、突然に彼に会いに行くということ。

恋愛関係にあるのなら、一度や二度、そういうことがあっても、何ら不思議ではないことなのかも知れない。

しかし、清美は初めてそれを自分の意思で行っていた。自分の意思だけで、彼の元に向かっていた。会いに行く。ただ、それだけのことでさえ、清美は慎太郎の了解がなければ決して行なわなかったのだから。

今までの彼女であれば、邪険にされること、怒られることが前に出てしまい、決して行えなかった行動なのだ。

しかし、今。彼女を突き動かしているのは、その反対。

一人で暮らしていて寂しい思いを慎太郎はしているかもしれない。だから、自分が来てくれたことを、きつと喜んでくれるだろう。お弁当を残さず食べてくれるように、手作りの晩ご飯を美味しそうに食べてくれるはず。

そついう希望。

一度大きな通りに出ると、そこを右折する。そこから二つ先の横断歩道を渡ると、彼の自宅はもう目と鼻の先だ。

清美の足取りは、自然と軽やかになっていた。

何よりも、彼女自身が彼に会いたくて仕方ないのだから。

それは嘘偽りのない心。胸の奥からの想い。

もしかすると、今までの自分がしていた行為 慎太郎を気遣うだけで、自分の想いを押し殺していたことが、二人に溝を作っていたのかも知れない。自分に自信が持てなかった要因だったのかも知れない。

晴れやかな気持ちに、思考もポジティブに変わっていた。

これから、何もかもが上手くいく気がしていた。

本当に変わった気がしていた。

清美は自然と微笑む。それは穏やかな表情。

今、この瞬間の彼女は、とてもとても美しかった。

微笑む少女の真横を、大きな体躯の男が過ぎる。

接触しそつになり、慌てて清美は道を譲った。

「ごめんなさ」

男の方に向き直り、お詫び言葉を告げようとしていた、清美の口が不意に止まる。

その顔。それまで湛えていた微笑も、冷たく凍り付く。

手にしていた袋がするりと指をすり抜けて、舗装された地面に落ちた。

「……………どうして……………？」

清美には世界の全てが静止したように感じられていた。

聞こえていた蝉の声も、子どもたちの笑い声も、彼方の出来事の

ように。その一切が届かなくなっていた。

酷く無音な世界に、少女は一人立ち尽くす。

その世界に動くと感じられるものは二人。

清美の視線の先、睦まじく並んで歩く少年と少女。

そこには慎太郎と奈津美の姿が在った。

第七話：転機（後書き）

<人名解説>

せきとも 関智：話題のゲーム中で殺戮狩人を演じる声優名。関智一（代表作：
スネ夫・ドモン・イザーク等）では絶対にありませんよ。ええ（笑）

第八話：洗礼

琴音たち部員一同がランニングから武道場に戻ってくると、一人の男子部員が竹刀を片手に、その中央に立っていた。しかし、その少年は面、籠手などの防具の類は一切身につけてはいない。学生服の上着だけを脱いだ、黒いシャツとスラックス姿である。

剣道部員の練習姿としては異常ではあるが、この学校に彼の剣道具は置かれていないのだから、それは当然といえば当然といえる格好でもあった。突き詰めれば、手にした竹刀でさえも、彼の物ではないのだ。剣道部という部活動に参加していながら、それら剣道用の用具を彼自身が本当に所持しているのかさえも、甚だ疑問であった。

その少年はいわゆる幽霊部員なのである。

転校初日に入部届けを提出しに来て以来、少年は一度として練習に参加したことがないのだ。

では何故に剣道部というクラブに所属することを、彼は望んだのか。

その答えを知る者は、本人を除けば学園に二人。そこにいる源琴音と、少年と同じ日に転校してきた賀茂瑞穂。彼が滝口であることを知る、少女たちであった。

少年は竹刀袋を校内で持ち歩くための免罪符を入手せんがために、この部活に入部届けを提出したのである。

その日の授業が全て終わり、陽が傾き始めた時刻とはいえ、気温は今だ高い。ただ、立っているだけでも汗ばむほどである。

しかし、涼しげな表情で、詩緒は呼吸一つ乱さずに佇んでいた。自身とは対照的に、苦しそくに肩で息をする眼前の人物を見据えながら。

上半身を前屈させた姿勢で息を整えている、その男。面の前当ての隙間から大粒の汗がぼたりぼたりと板張りの床に落ちては、彼の

足元に溜りを作っていた。

その男の剣道具けんどうぐは、部員の誰もが見飽きたと思っっている一品である。

それは何も、彼等の身に着けている物と同じ工場制手工業マニファクチュアによる、安価な量産品だからではない。それはその業界では名の通った匠の拵こしらえた、一品物の超の付く最高級の剣道具なのだ。

彼らがそう感じる原因の全ては、その男にあった。

その防具一式に身を包んだ本人が、購入直後、毎日のように鼻にかけ、ひけらかしていたためだ。今でも事あるごとに、それを自慢しようとしている。見れば見るだけ、魅入られるような見事な一品でありながら、悲しいかな普段のその男の印象イメージも相まって、嫌でも彼らにはそう思えてしまうのだ。

その業物の剣道具の持ち主こそが、男子、そして琴音ら女子剣道部の顧問教諭、荒川あらかわという男だった。

「…………ご指導、ありがとうございます」

果たして本心から述べているのか。それは些か怪しいことだが、詩緒は確かに感謝を告げると、荒川に一礼して見せ、琴音たち部員の方へと向き直る。

「…………お、応…………」

力なく返答する濁声。行われていたであろうその指導が、荒川の意図する形で終わったのか。それは定かではないが、両者は短いやり取りでその終了を認めた。

直後、その教員は一心不乱に防具を外しにかかる。暑いこの時節、面を被り続けるだけでも熱と汗、そして、そこに籠った臭いで滅入る。疲弊するのだ。

どうやら男は意図したことなどは別として、とりあえず、一息つくことを優先したようだった。そうでなければ外聞や体裁をむやみに気にするこの男が、一番に威厳を保ちたがる彼らの前で、そのような醜態とも言える姿を晒すわけがないのだから。

面を取るとその下から中年男の顔が露わになる。それはその男の

持つ鼻を衝くような体臭が、部員たちの控えていた入り口付近にまで漂いそうな、むさ苦しい表情だった。

指導という名を借りた、虐め。

その師範が直接相手を担う乱取稽古は、男子部員の間ではそう擲掬されていた。

この男は、生徒に気に食わない言動があると、それを以て報復行為を行うのだ。剣道とは全く関係のない日頃の憂さを晴らすために白羽の矢を立てた相手に、難癖を付けた上で、それを行なうこともある。その稽古という名を借りた行為は、男の気が晴れるまで永遠と行われるのだ。動けなくなった相手を無理やりに引き起こすし、情け容赦なく打ち込んで来るのである。相手をさせられる者は、たまったものではない。

女子部員には矢鱈と優しいくせに、男子生徒には只管ひたすら厳しい。

剣の腕では確かに国体に代表として参加するほどの実力者でありながら、そういった側面が祟り、部員たちの人望は薄い指導者だった。

だから、生徒たちは沸いていた。取り分け普段、その犠牲者たる男子部員たちは。ゆっくりと歩み寄る少年に、男の手前、歓声は送れないものの、歓喜のありありと見える笑顔を見せる。

おそらくは、その少年が例の虐めを受けながら、その師範を打ち負かしたのであるうことを推し量って。

「渡辺くん！ 君、強かつたんだね！」

男子主将が声を弾ませる。それが、来るべき秋季大会に向け、即戦力を獲得出来た喜びか、前出の理由に因るものであるのかは理解できないが。

しかし、その声を完全に無視し、詩緒は琴音の前に立っていた。

「な、何かな？ 渡辺くん……」

少し動悸がちに、琴音は自身の目の前に立った少年に訊ねた。それは持久走を行なってきた直後だったから。そういう理由だけではない。

「源琴音。お前に用があつて来た」

「え？」

琴音は耳を疑う。この少年を知っていればこそ、その言葉が信じられなかった。

彼は転校してきて以来、彼女に話しかけることなどなかった。いや。琴音の知る限り、非日常の世界で行動を共にする少女を除けば、誰にも自ら話しかけたことなどないのだ。それが、初めて話しかけてくれたところか、個人限定の用事まであるとは。

琴音は顔を染め、妄想とも言えるような展開を想い描いていた。

「俺と立ち会え」

そんな少女に構わず、詩緒は続ける。それは彼女の脳裏を過ぎった絵空事とは、当然、遠く掛け離れた言葉。しかし、一瞬、驚きを浮かべたものの、少女は少年を真っ直ぐと見詰め、力強く頷いてみせた。

「私も。私も一度、渡辺さんと勝負してみたかった」

つい今、彼女の少年に抱いた感情に由来した妄想などなかったように、至って真剣な表情で答える。

自分の力が滝口として通用するのか。それを知りたかったのが一つ。

そして、何よりも。少女はこの少年に認めて欲しかったのだ。

それは願ってもみないチャンスだった。

「……防具なし、の方がいいのかな？」

しかし、緊張している様子は隠せない。少しだけ、ほんの僅か、うわずってしまった声がそれを教える。それに気づいた者がいたのかは別として。

「好きにしる」

短く返答をしながら、詩緒は再び自身がいた場所へと足を向ける。

「うん」

言うが早いか、少女は手馴れた手つきで胴を固定する紐を解きにかかると。

「や、止めておけよ！ 渡辺くん！」

そのやり取りに周囲の者が慌てふためいていた。その少女が規格外の強さを誇っていることを知っているからだ。

彼女は先の高校総体の県予選で公式戦に初参加しておきながら、圧倒的な強さで優勝をしてみせた剣士なのである。そして、その大会の水準は決して低かったわけではない。その少女は前年度の総体覇者をも、寄せ付けることなく打ち破っているのだ。

「……大丈夫よ。手加減するつもりでしょ？ 琴音のことだから、せつかく部活に出た、あの子のやる気を削がないようにしたい、っていう感じなんですよ。防具をつけないのも、同じ土俵で勝負してあげる、やさしさなんですよ……安心して見てなさいな」

騒動の中、一人静かに状況を見守っていた少女が、詩緒を止めた男子主将を落ち着かせるように言う。

「あ、ああ……。そうかな？ そうだよな？」

返した言葉は、自身に言い聞かせるような口調だった。しかし、詩緒を止めようとしていた少年は、どうにか一応の落ち着きを取り戻す。

「……しっかし、甘いわね……。どうせあの子も、琴音の追っかけの類かなんかなんでしょ？ ……そういう種類の入部希望者が一時期多かったじゃない。『昔、剣道やってたから俺のが強いぜ！』みたいな、力関係で恋愛が成り立つなんて、ガキ同然のアプローチ方法と思考回路しか持たない馬鹿な男の群れが。正直、そういう輩は、面倒だし、ウザイのよね。何なら本気で打ち込んで、追っ払えば早いのに……」

だが、彼女は続けて愚痴って見せる。

「おっ、おいつ！？ け、剣道部、じよ、女子主将たる君が！？
な、なんてこと言うんだよオ！？ け、怪我でもさして、事件にでもなったらどーすんの！？ 大会出られないよ！？」

ひっくり返る声。その愚痴に、少年の偽りの平常心は跡形もなく吹き飛んでいた。

彼女の言った、そういう浮ついた気持ち。それで入部を希望してきた生徒は、確かに多かった。一時は、名前は知られているものの競技人口は少ないこの部活にも、創立以来、最大の部員数を誇った時期があったほどである。

しかし、現状はほぼ例年通りの人数に減少していた。男女共に、団体戦にぎりぎり参加可能な程度の頭数しか残ってはいない。

特に琴音目当てで入部して来た男子生徒は壊滅していた。

彼女の気を惹くには、彼女と常に行動を共にする必要があるわけであるが、異常ともいえる琴音の練習メニューのハードさに、誰一人とついてはいけなかったのだ。そして、彼女に勝利した者もいなかった。

つまりは剣道部に所属する利点メリットを無くした彼らは、非常に僅かな期間で退部していったのである。

そういう連中に付き合うことは、やはり、彼女らにとって苦痛で不愉快でしかない。

さらには、浮ついた彼らを前に荒川の機嫌は悪くなる一方なのである。

おかげで、いわゆる虐めの時間が増加し、練習の雰囲気は険悪なものになるは、それ以外の通常のトレーニングメニューでさえもシゴキ的な側面だけ強化されるは、と真摯な気持ちで剣道に取り組む部員にとつては弊害でしかなかった。

「渡辺くん　本気でお願い。私も、本気だから」

少女のその声を鵜呑みにしたわけでは決してない。しかし、袴姿になると、琴音はこれから相対する少年の背中にそう告げた。

「そうそう。おもいつきり、打　ええっ!？」

ぼやいた少女は返事を遣さなかった少年に代わるかのように、その声に頷いて見せ、今度は驚く。

「ちよっ!　ちよっ!　ちよっ!　琴音!　本気で貴女が立ち会ったら、あの子、怪我するわよ!」

気がつけば、一人冷静を保っていた彼女も慌てふためいていた。

「せ、先生！」

しょうがなく助け舟を指導員に求める。競技場を挟んで対面。顔と体を拭いた、湿りきった手ぬぐいを肩に、男は丁度、立ち上がったところだった。

そして、どよめいている教え子たちを見ると、大きく口を開く。

「黙れ！」

一喝。蛮声。

直後、武道場は静けさに在った。

「……お前ら。本気で剣道が好きなら黙って見てろ」

何時になく真面目な声で荒川が呟く。静寂に在った道場に、その声はよく通っていた。

男の視線は開始線に立つ二人へと向けられる。続いて部員たちの視線も少年と少女に注がれていた。

この男がそう言うのなら、今から行なわれる二人の立会いは価値のあることなのだ。と部員たちは理解したのだ。

荒川という男は、確かに人気のある指導者ではない。しかし、剣道に対する情熱は本物であることを、部員の誰もが認めているのだ。良い意味で取れば、賞与ボーナスを、貯金を叩たたいてまで高価な剣道具を購入したのは、その一例である。だから、そんな彼の元にあつても練習に参加できるのである。嫌な思いをしても、事、剣道に関する指示には従えるのである。

正式な剣道の試合であれば、互いに蹲踞そんきょの姿勢を取り、開始を待つ。

剣道は礼節を重んじる競技。本来ならば、この部活動に於いても、そういう決まり事は徹底して行なわれる。

しかし、蹲踞の姿勢に入った琴音に対して、詩緒は直立のままであつた。

だが、荒川はそんな少年に、似合わないニヒルな笑いを送る。そして、徐おもむに声を発する。

「始めえ！」

その声は武道場に大きく反響し、二人の剣士の初動を呼んだ。

渡辺詩緒という生徒は、剣道を知らないのだ。

それは竹刀を交えた上での結論であった。

古流剣術。近代剣術、いわゆる剣道の源流となったもの。渡辺詩緒という生徒は、その使い手であると荒川は踏んでいた。

剣道という競技の規律ルルを全く知らなかったこの少年の剣の腕前は、しかし、彼の知りうる限り、古今東西、無双のものだったからだ。

「今、一番強い剣士は誰だと思う？」

もし今。そういう旨の質問を荒川が受けたのだとしたら。

「剣道選手としては源琴音……そして、剣道という範疇でなく、剣士と言うのであれば。自分の知る限りで言えば、この少年である」
迷わずに、そう即答するだろう。

彼は今、心躍っていた。

剣道界の至宝ともなる原石を見つけたのだ。否。原石ではないだろう。少年はすでに完成された輝きを放つ宝石なのである。

自分でなくとも、少年は誰の指導も最早、必要とはしないだろう。自分を始めとする指導者という立場の人間が、彼に教えられること
と言えば、剣道のルールだけなのだろうから。

源琴音と渡辺詩緒。

二人が磨き合えば、どのような光を見せるのか。

現状の答えは、少年のように純粋な目を見せる中年教師の眼前で
繰り返し広げられていた。

第九話：承認

「似ているな……」

何にと、何がとも言わない。ただそうとだけ、ぽつりと詩緒は呟いた。

受け流す少女の太刀行き、残心の取り方、その身の捌き方。その言葉は、それ対して少年が抱いた正直な感想が口に出たものだった。独り言のような声を漏らしながらも、小手を狙った少女の一撃を鰐元で受ける。ただ冷静に。詩緒は、二度、剣を交えた原型を複写するような、少女の動きを読んでいた。

幾重にも、幾重にも。牽制動作を織り交ぜ、晦まし手を置き、読まれまいとした琴音の一手。詩緒の鰐元に弾かれた剣士の小手打ちは、その本命の一手であった。だが、それを防がれようと、少女は動じない。その体は攻勢を維持するべく躍動する。琴音の竹刀は、その次の瞬間には、少年の頭上に閃いていた。流れるように転じた上段からの急襲。端からそれが狙いであったように。落雷の如く鋭い一撃を琴音は走らせる。

下方より腕を抜き付け、そのまま上段より二の太刀を振り下ろす。偶然にも、しかし、狙いを持って放たれた、現状最良の手と思われ、る琴音の流れによる攻撃は、居合いの型の一つでもあった。流派によつて『月影』や『勢中刀』などと呼ばれる技である。

それは完成された実戦的な型の一つ。初太刀と二の太刀。その連携に滝口の少年は動かない。その場から微動だにしない。しかし、相対する少女剣士の神速の連携に反応できていないわけでは決まらなかった。詩緒はその動作として読みきっていたのだ。彼は避ける必要性を感じてないだけだった。

その一撃が、頭部を捕らえた。外野の誰もが、そう思った刹那。真剣によるものとは異なる軽い、しかし鋭い刃音が、先の打撃音と重なるように館内には響いていた。攻手の太刀筋は大きく狂う。少

年の真横。板間を打つかのように、床擦れ擦れの場所にその切っ先は在る。詩緒は、その手に在る他人の竹刀で、直下する少女の同じ武器の中ほどを打ち弾いたのだ。

「似ているのかな？」

反撃を許さぬように後方へと足を運ぶと、相對する者を見据えながら琴音は訊ねた。

「ああ」

短く詩緒は返答する。

「ありがとう」

耳を撃くような音と共に、強制的に変えられてしまった軌道。その太刀筋。その戦闘姿勢バトルスタイル。それこそが少年の口にした『似ているもの』であると、少女には理解できていた。

気が付けば口にしていた感謝の言葉。それは例え『魔』に墮ちたと知ってしまった、今現在であつても、彼女の兄であり、劍の師である源蒼司みなもと そうつしに対する敬愛の現れである。

だからこそ、自らの手で蒼司を止めるべく、救うべく、少年の生きる世界に介入する決意を少女はしたのだ。

その最たる表現。少年の感想に浮かべた微笑。

その微笑んだ表情のまま、琴音は駆け出す。

それとは裏腹の凶悪と言える斬撃を、疾風の如き身のこなしを再び少女劍士は見せる。

防具のない彼らには、竹製の刀とて、当たれば無傷では済まないのだ。事、彼女の繰り出す一撃は、どれもが驚異的に速く、重く、そして、的確に少年の急所を捉える。

立会いを始めた当初、聞かれていた観戦者の悲鳴にも似た声。それは琴音の放つ劍撃のどれもが、非常に危険なものだったためだ。しかし、その声は徐々に収まりつつあった。

今はただ、固唾を飲んで成り行きを見守る観客達オーディエンス。

観客は静観し、刮目かつもくする。

猛攻を見せる少女と、その全てを往なす少年の動きを見逃さぬよ

うに。

そこで繰り広げられる少年と少女の打ち合いは、数多くの剣道の試合を見てきた彼らにとっても、未見のハイレベルなものだった。

板間を蹴る足音。鋭く空を切る竹刀の音。激しく響く刃音。

戦いを奏でる音の応酬。

しかし、生身の体を打つ打撃音のみが存在しない。

竹刀の弾け合う音が、幾度も幾度も聞こえる最中。しかし、有効打どころか、互い、体に竹刀が擦りともしないのだ。まるで端から打ち合わせを済ませ、決められていた演舞を行なっているかのよう

に。
しかし、違う。そこに観客を沸かせるための、各々の流派の特徴を知らしめるための見せ技など存在しない。

将棋。囲碁。チェス。その盤上の遊戯ゲームを名手たちが繰り広げるように。

何手も何十手先も見据え、読み合うような攻防戦を、少年と少女は続けているだけなのだ。

何もかもが、自分たちのやっているモノとは違う次元の競技に映る。

しかし、何れ。

自力の差が開き始める。少女の動きが鈍り始める。

それは実戦経験の差から来るもの。擬似的なものとはいえ、実戦に限りなく近い、極度の緊張化に於いて、その経験は圧倒的に少年が少女を凌駕しているのだ。詩緒は常に、命の危険にその身を晒し続けながら、その技量を磨いていたのだから。

否。ともすれば、少年はまだ本気ですらないのかも知れない。

幾手も幾手も打ち込む少女に対して、少年は僅かな返し手を放つに留まっていた。

当初。それは琴音の猛攻が、詩緒に反撃を許さない所為だと、彼らは思っていた。

だが、ここまで完璧に少女の攻撃を防ぎきって見せた事実は。少

女だけが一方的に疲弊してしまった現状は。だから、まだ。新顔の剣士は余力を残しているのかも知れないと、二人の力量を量りきれない彼らにさえ、勸繰らせずにはいられない。

「やっぱり凄いね。渡辺くんは」

顔に浮かんだ幾つもの汗を気にする素振りもなく、琴音は再び微笑んだ。

少女は悟っていた。今の自分では目の前の相手に太刀打ちできないであろうことを。

しかし、気分は悪くない。ここまで本気を出したことは、いつ以来だろうか。

「アドバンテージが在っただけだ。俺はお前の動きを知っていた」
対峙する者の動きに対して予備知識があつたこと。それは詩緒にとつては大きな意味を持つ。彼は後の先を取る戦い方を得意とする剣士だからだ。少女の動きは、滝口を打ち負かした童子切安綱どっしきりやすつなの使い手に非常に似ていた。ただ、その魔剣妖刀の類を振るう剣士に比べると、今は全てが劣る。その男との死闘を基に現状を読んでしまえば。極端な言い方をすると、少年は少女に対し、常に後出しでジャンケンをしていたに過ぎない。

最も、そう比喻するだけは至極、簡単である。しかし、それは渡辺詩緒という滝口の持つ、高度な技量、卓越した状況把握、常識を逸するような反射運動能力が在つてのことなのだ。

「……十分、凄いよ。例えば、私に相手の太刀筋がある程度解つていたところで、渡辺くんの真似は出来ないもの」

間合いを取り、呼吸を整えながら琴音は返す。

「……お前は本当に足を踏み入れるつもりなのか？」

回復の暇いとを与えぬように踏み込む。そういう動きを見せず、変わりに詩緒は訊ねた。

「うん」

間髪入れずに即答する少女。そこに迷いや戸惑いは感じられない。曇りなく、唯、真っ直ぐと少年を見詰め、そして、竹刀を正眼に構

え直す。

力みの無い、理想的な姿勢。

「お前らしい答え……なのかも知れないな」

その少女の姿に、少年は呟く。返された言葉よりも、それこそが自分に向けられた答えなのだ。詩緒には感じられた。そして、覚悟もそこにある。源琴音という少女は、手心を加えられるような間を嫌ったのだ。だから、構えを直し、戦闘の続行を煽ってみせた。

実戦。命のやり取り。滝口として戦闘。それを見据えて。

凜として美しく、正面に竹刀を構えた少女剣士に対し、滝口は重心を低く構え、竹刀を寝かせ右後方に置く。

相手から見れば刀は最も遠方に在る。それはノーガードで誘うボクサーのような構えであった。

挑発的とも取れる姿勢を作りながら、詩緒は琴音を射抜くように見る。

それは少女が初めて、相対する少年の本気の眼差し。少年と初めて出会った夜に、彼女の命を奪おうとした襲撃者に対して見せていたもの。

「やっと本気になってくれたね」

「……来い」

今までとは違う。凍て付く様な張り詰めた空気が、二人の間を支配していた。

「先生？ あの構えは？ あんな構え、あるんですか？」

不要だった。結果的には二人の戦いに見惚れ、意志を発言できなかった。とは言え、線審を買って出るつもりで荒川の横に辿り就いたその場で、動きを止めていた部員が口を開く。

しかし、返事はない。

部員は恐る恐ると、荒川を窺う。そこには空けた口をそのままにした中年男がいた。

「せ、先生……？」

引き攣った声で、生徒は再び教師に呼びかける。

「あ？ あ、ああ？」

荒川は、我に返ると視線は二人から動かさずに反応して見せた。

「あの構えって何なんです？」

「ありやあ……確か、『右車』とかって呼ばれる構えだ」

面倒臭げに、指導者は教える。

部員が解らぬのも道理である。剣道には、その構えは存在しないのだから。

そして、荒川の予想は確信に変わっていた。右車と呼ばれる構えは古流剣術に見られるものだからだ。

右車の他にも、鳥居だの、垂針だの、背負だの、現代剣道に於いて見られない構えが古流剣術には多数在ることを、その師範役は知識としては知っていた。

「その右車って」

「五月蠅い！ 黙ってる！」

質問を続けようとした生徒を一喝し、荒川は言葉を遮る。

静けさに在った武道館内に不意に響いた人の声。それに対面の部員たちの視線が、瞬間、この二人に注がれる。

「……源の奴、勝とうが負けようが、次で仕舞いにするつもりだ。黙って見てろ。剣道の話なら、その後、幾らでも付き合っつてやる」

対峙する二人に気を使っつてか、改めて、かなりの小声で返答してみせる荒川。

しかし、当事者たちはその周りの変化を気にする素振りも見せず、相手の動きを待っていた。

「いきます」

律儀に呟くと、琴音は板間を蹴る。

それは僅かばかりとはいえ、回復の時間を与えた相手に対する返礼だったのかも知れない。

終盤。しかし、打ち合い始めて最速の動き。少女は一陣の風の如く、距離を詰める。後手を捨てた一撃を放つべく。自らの持てる全て、想いを籠め、切っ先を突き出す。

その想いを形にしたように。少年に向け、真っ直ぐに。誰もが決まった。それはそう思える神速の一手。

しかし、迫る切っ先を皮一枚の処で、詩緒は回避していた。鋭い突きが首筋を過ぎる。後ろ髪が数本、切り離されて宙を舞う。

それでも。少年には、焦りも驚きもなかった。ただ冷静に。相手の動きに反応した結果が、そこに在っただけなのだ。

同時に。少年の竹刀は空間を走っていた。鐔元。少女の細いウエストの辺りにそれを留める。

そこで全ては終わっていた。

「やっぱり、勝てなかった」

少女の微笑。

「お前は強い。立ち向かえるほど。任せられるほど」
少年は呟く。

「 滝口としてのお前に頼みがある」

竹刀を納刀しながら、詩緒は言葉を続けた。

「え？」

「お前なら瑞穂も気兼ねなく動けるだろう。もしもの時は、アイツを頼む」

「え？」

少年の真意を理解できず、琴音は呆然とする。

確かに。違和感は在ったのだ。

自分に用件があると少年は言った。

その言葉に、二人の距離が縮まったようで、琴音は浮かれていただけなのかも知れない。

渡辺詩緒という少年が、人と関わるといふ不可解な行動のを起こす真相を、少女には考えることができなかったのだ。

もしもの時。それは先日、彼が交戦した『魔』に因るものなのだろう。その相手が相性の極めて悪い相手であることを、陰陽師に聞いていた。敵に敗れるかも知れないということ。つまりは、少年は死を覚悟しているということ。

寧ろ、そういう不可解な行動さえ起こしたのだから、彼はその結果を、事実として享受してさえいるのかも知れない。

「瑞穂は渡辺くんにとって何なの？」

そして、何よりも、この言葉を琴音は訊ねたかった。少年は確かに、その少女に気を使って見せたのだ。自分が亡き後、その少女の力になって欲しいと、依頼に来たのだ。

しかし、立ち去る背中にも何も言えず、少女は立ち尽くし、少年を見送る。力量を認められて嬉しいはずなのに、全てを素直に喜べず。

一人の部員に、勝手に借りていた竹刀を心無いような礼と共に返却して。引き止める荒川を無視すると、その滝口は琴音の視界から消えてしまった。

第拾話：密会

「……どうしてなの？」

「どうしてもこうしても……分らないかな？ 私たち二人がそういう関係になるコトをアイツが望んだからよ。アイツが本当に好きなのはアンタじゃない。私なのよ。これで、はっきりと分かったでしょ？ だから、傷つく前に別れるように言い続けてたんじゃん……」

「違う！ 貴女が誘惑してきたって言ったもの！」

「ちよ、ちよっと！ 人を泥棒みたいに言わないでよ！ それにアイツの方から私を口説いてきたんだよ！」

「嘘を言わないで！」

「アンタ……友達の言うことが信じられないっていうの？」

「友達？ ……ええ。そうね。友達だわ。だから、ダメだったんじゃない。私の友達だから貴女を無視出来なかった。悪く接することが出来なかったって……そう言ってた……奈津美は、そんな彼の優しさに付け込んだのよね？」

「はあ！？ ……もういいわ。アンタと話したところで、時間のムダになりそうだもの。でも、諦めなさい。私の方が絶対に彼にはお似合いなのよ。それに、アンタなんか私に私に負けるわけがないでしょ？ 私がいないと何も出来ないクセして！」

「……そんなことないよ？ だって、私は変わったもの。自分から声がかけられたもの……」

「はあ！？ 何それ？ 何、ワケ分かんないこと言ってるの？ アンタ？」

「ほら。今もこうやって変わっていつてるよ？」

「！ な、何！？ ソレ……ちよ、ちよっと！ アンタ、本気なの！？」

「私はね。これからも変わり続けるの……」

「や、やめなさい、清美！　そ、それ、捨ててよ！　ご、ごめん！
謝るから！　ねえ！」
「慎太郎を想い続ける限り、私は変われるの。強くなれるの」
「や、やだ！　こ、来ないですよ！」
「　ね？　私、強くなれたよね？　強く意志を持てるんだもの。
こうして、自分のしたいことが出来るんだもの」
「ねえ！　清美！　頭、冷やしなよ！　や、やめ　！」

僅か、ごく微弱な。しかし、確かな『魔』の存在を感知し、黒衣の滝口は一瞬、そちらに気を殺がれてしまった。

滝口が感知した『魔』の波動は瞬間的なもの。恐らくは『堕ちる』に、まだ完全に至ってはいない人間によるものである。何者かが、何かの拍子に『魔』に堕ちる直前にまで陥ってしまったのだろう。

完全に『魔』に変じてしまえば。感情のままに、人間という姿を捨てたのだとしたら。

その存在を滝口の少年は感知し続けているはずなのだ。

ならば、目の前にある弊害こそ、最優先の対処事項であることを滝口は認識する。

黒衣の滝口、渡辺詩緒は眼前にある二つの人影に、意識を集中させた。

夏を迎え、花が疎らに存在する植え込みに囲まれた場所。

一人と二人組。三人の世界の裏に生きる者は、そこで相對していた。

その場で咲く華は、人類が古来より愛でてきた觀葉種である。春から秋。長い期間に渡り、その氣品と風格を漂わせた華を咲かせ、見る者を樂しませる。

その華の持つ風格。人の手によって剪定せんていされ、鉄柵に誘引されながらも。その棘により、氣安くは触れさせはしないことが、それを際立たせているのかも知れない。

薔薇という植物に囲まれた中庭。

そこはその場にいる三人の内、二人の少年の通う学園の敷地の一角である。

深夜。日付の変わりの数時間後。所謂、丑三つ時。

滝口の少年は、その場にいる、もう一人の滝口の少年の呼び出しに応じていた。

「今日は変装じみた格好をしていないんだな。八卦衆……安藤慎太郎……だったか？」

風体に似合わず、そこに咲いた一輪の薔薇を愛でる巨漢の男。その大男の横に立つ、自身とほぼ同じ背丈の少年に詩緒はそう訊ねた。「へえ……俺の名前を知ってたんだ。俺って目立つ存在だからな」詩緒を呼びつけた少年は肯定してみせると、にやけ面を見せる。

「……校舎に大掛かりな術式を展開することを、最も容易に可能にするのは、そこに通う人間だ。生徒、教員の顔と名前は判るように調べておいただけだ」

淡々と事実を告げながら、詩緒は巨軀の足元に刺し立てられた、その得物を一瞥した。それは華を慈しむ直前に、大男自らが振るい、突き立てた大斧である。

「なんだ？ 主となる俺の正体をそんなに知りたかったのか？ 協力するんなら、その程度、すぐに判ることだろうに。無駄なことに労力を割くんだな……」

見下したように慎太郎は言う。いや、そこにいるのは高校生活を

送る一男子生徒、安藤慎太郎ではない。

自らが持つ特異な力に因って。独り、この場に現れた滝口の少年に対して、あの夜、圧倒的な優位性を誇示して見せた八卦衆の一人、丑寅と呼ばれる人物のものだ。

「……無駄じゃない。お前を始末すれば、例の一件の片が付く。それが解った」

しかし、詩緒はいつもと何一つ態度を変えはしない。

例え、そこに劣勢な力関係があったところで、目の前の剣士を排除すべき『魔』であると判断した以上、彼が行なうべき行動は一つしかない。

「へえ。折角、あの日にこれ以上ない条件を提示してやったのに……どうやら、交渉には応じないみたいだな、お前」

丑寅はその能力で詩緒の動きを封じた後、ただ単に、彼を見逃した訳ではなかった。

自身の切り札の一つとなるべき存在。丑寅は、渡辺詩緒という心に深い闇を、強大な『魔』を飼った少年に、自分たちの陣営につくように誘い入れたのだ。

返事をこの日、この場所で聞くことを告げて。

「一人で現れたから、てつきり協力してくれるもんだとばかり思ってたんだけど……お前、よっぽど頭ワリなんだな」

協力。如何にも仲間欲しているような言葉を使いながらも、口調はそれを表現してはいない。

山を司る八卦衆の剣士は、道具としてしか彼を認識していないのだから、それは当然なのかも知れない。

あの夜、少年を完全な鬼に墮とすことを行わなかったのは、いざというその時まで、人の形なりで運用した方が都合が良いと判断したからに過ぎないのだから。

加えれば。この滝口が最後まで反抗を行なうようならば、最悪、その能力で動きを封じ、拘束して、必要な時に捨て駒として利用すればいい。そう丑寅は考えているのだ。

『成り』。『打ち込み』。

将棋の固有の手駒の利用方法を指し示す用語。その言葉通り、八卦衆の剣士にとって、その遊戯の駒と、その滝口は正に変わらないのだ。

「……で？　じゃあ、何でお前は一人でノコノコと現れたんだ？」
棋士は優位性を誇示するように悠々と訊ねる。その態度は、奥底から湧き上がる感情を押し殺す儀式だったのかも知れない。

しかし、それは確かに腑に落ちないことであった。

丑寅が詩緒に突きつけた条件の一つ。彼の標的ターゲットである陰陽師、賀茂瑞穂を孤立させること。

交渉を破棄する意思があるのならば、わざわざそれを、こうして実行して見せる必要性はないはずなのである。

寧ろ、八卦衆との敵対関係を継続する以上は、この場は最も雌雄を決するには適した場であったはずなのだ。

だとすれば、持ちうる戦力をこの戦いに投入するのは、常識で考えれば当たり前のことである。しかも、その滝口は、敵の戦力の全貌を知り得ないのだ。判明している能力的な不利性、そして、不確定要素に対応するためにも、つまりは賀茂瑞穂という陰陽師はここに居て然るべき存在だったのである。

しかし、この場にその少女はいない。

渡辺詩緒という滝口が、敵対の意志を有した場合。この場に、その少女が現れること。

それは丑寅の狙いの一つでもあったのだ。

滝口がこちらの誘いに乗らない場合は、間違いなく二人で現れるだろうと彼は踏んでいた。

その際は、その場で渡辺詩緒を手駒に変えて、早々と事を済ませてしまえる。

例え、陰陽師がそれを阻止しようとしたところで、それは叶わぬことなのだ。彼の持つ八卦の能力がそれを許さないのだから。

その状況は、歓迎すべき状況であったはずなのだ。

今現在有している切り札である手札を温存さえできる、合理的なプランを遂行できたのだから。

しかし、それは水泡と帰っていた。

「お前たちを殺す程度、俺一人で十分だからだ」

詩緒は丑寅を射抜くように見ながら返す。だが、それは本音ではない。少年は自身が不利な立場にあることを明確に理解している。そして、それは質問者の望んだ答えでもない。計画を破綻させた要因を全く孕んでいない発言なのだ。

少年の意図は、少年の内にだけ秘められる。

「……俺に絶対服従を誓え。あの夜、そう言ったよな？」

それが詩緒に課した、もう一つの条件。

冷たい表情を見せる詩緒に対し、丑寅は感情を剥き出しにする。

その顔に浮かぶのは、怒り。

能力を知らしめ、そこに絶対覆すことのできない力関係を突きつけたはずなのに。思い通りに動かない少年に、丑寅は憤りを覚える。

絶対的な力を前にして。

彼自身はその前に平伏せるしか術を持たなかったのに。しかし、目の前の自分にも敵わない滝口は、それを受け入れ、あまつさえ、自身の意思で足掻こうとしているのだ。

「オイ。俺がお前を有効に使ってやる。そう言ったよな？ これから俺たち滝口が支配する世の中が生まれるつつたよな？ そんなときに、俺直属の部下になってるってことは、お前のためでもあるんだぜ？」

腰に指した小太刀の柄に手を沿え、丑寅は唸る。

「……くだらない」

ぼつりと零すと、詩緒はその手に在る愛刀へと空いた手を伸ばした。

「滝口は唯、闇に生きればいい。人に知られる必要は無い。それは無駄な混乱を招くだけだ……」

それは本来ならば、彼ら滝口の最高峰にあると認められた武人の担う刀である。

「やはり、八卦衆おまえたちと平井万葉は『魔』だ」
その最たる担い手の選定者、滝口棟梁を最終の敵と見据え、詩緒はその愛刀の古雅な刀身を月下に晒した。

詩緒とその刀の直接的な関わりは浅い。しかし、強い絆がそこには在った。

その退魔の名刀の名は『鬼切おにぎり』。

滝口たちの伝承する宝具の一つ。かつて一条堀川の戻り橋にて、渡辺綱わたなべのつなが出会った鬼、茨木童子いばらぎていじの片腕を斬り落とした名刀。

その姓が示す通り。源頼光みなもとのつぐひらの四天王の筆頭として名を馳せる武人、綱は少年の祖。

そして、先代。その宝刀の正式な担い手として任命されていたのは実兄、渡辺証希わたなべ まさきなのである。

それは遺刀でもあるのだ。
その刀に残された兄の想い。彼の親友を凶行を止めること。

「平井万葉という女は、滝口という組織を私物化しようとしている」

奇しくも、その男が詩緒に告げた言葉は、現実として鈴の剣士の前に存在した。

それも最悪の現実として。

「滝口という組織が『魔』だと言うのなら」
下段正眼に構え、黒衣の滝口は呟く。

「俺はその滝口という組織を排除するだけだ」

言い放ち、駆ける。

唯、自身の信念を貫き、在るべき姿の滝口として生きる。

その言葉は彼の決意であり、この場だけでなく、これからの少年の戦いの狼煙でもあった。

一足にして八卦衆との距離を詰め、詩緒は鬼切を閃かせる。

その挙動は、丑寅に如何なる受動行動も取らせはしない。瞬きすら許さぬ、刹那の時間に行なわれた強襲であった。その剣閃に一切の反応が出来ず、後は斬られるのみだった丑寅。

その目には、上空を舞う、一輪の薔薇が映し出されていた。その耳に、鋭い金属同士のぶつかる音が飛び込む。

それは刃音。

詩緒の鬼切の刃。それを突如として現れた巨漢の大斧が、丑寅の肩先の直前で受け止めていたのだ。

男が愛でていた薔薇の華。宙を舞った華。それが互いの武器を交える二人の足元、その丁度、中程へと落ちていた。

「薔薇の下で　　主は泰西たいせいに在る、その言葉の意味を知っておるか？」

ぎよる目で少年を見下ろし、大斧の使い手は少年に問いかける。

「秘密を共有すること。その秘密を固く守ること　　か」

詩緒は言い放ち、男の鳩尾を蹴り抜くと、後方へと跳んだ。

「……如何にも。そして我等が棟梁の名は、その薔薇一種の名から付けられたものらしい……」

詩緒の鋭い蹴りを、人中の急所の一つに受けながら。口端を歪めさえて、巨漢は平然と語る。

「この場にいることから、お前を敵だとは推測していたが……実際にはそうだと、少々、手を焼きそうだな……」

言いながら、詩緒は鬼切をゆっくりと横八層に構え直す。

「薔薇の下、万葉様と秘密を共有する者に　　理想を共にする同士に。それに主は為れぬか……為らば、ここで消し去るのみ。そして、その刀。鬼切。それを吾が等の元に返して貰おうぞ」

大斧を、男は黒衣の滝口に突きつけるように向ける。それは構えではあるが、型にあるものではない。

その巨軀を活かした力技を、そこから振るうだけなのだろう。

「……大隈雄吾。四天王でありながら『魔』に堕ちるか」

その構えをそう悟り、詩緒は彼の名を、完全なる敵対者と判明し

た男の名を、口にした。

その巨漢は最早、傍観者ではないのだ。ならば、この滝口の最高峰に位置する男に告げる言葉とて、いつもと変わりはない。

「渡辺詩緒　大隈雄吾。お前を殺す人間の名だ」

その宣告。それもまた、少年の道の在り方を示すものだった。

第拾壹話：飛翔

「あんの馬鹿ッ！」

柳眉を吊り上げた少女は、自身が住んでいるマンションの屋上へ飛び出すと同時に怒号する。

彼女の手により勢い良く開かれた鉄扉。その扉は反動した力でさえも、その重みで殺しきれずにいた。開かれたままのような余勢で鉄枠に衝突すると、彼女の背後で悲鳴のような大きな音を上げる。

今回の異変の中心に在りながら。しかし、馬鹿と罵った滝口に、蚊帳の外へと追いやられていたことを陰陽師は悟ったのだ。

瑞穂は感情に任せるままに、ずんずんとフェンスに向かう。そこに文句をぶつける相手がいるかのように歩く。

昼間。少年と交わした言葉が虚しく、少女の脳裏を過ぎっていた。今後の指針となるはずだった最後のやり取りでさえ、虚言であったのだろうか。

そう考えると、彼女を支配している感情は、益々、強くなる。

いつもの少女であれば。少年を幼い頃から知る彼女であれば。

少年の性格を熟知しているからこそ、半ば諦めに似た感情が働き、ここまでの憤怒は覚えなかったはずである。

しかし、違うのだ。

今、少女がそれを自身に決して許さないのは、あの時に垣間見えた少年の笑顔を錯覚だとは認めたくないからだだった。

それは渡辺詩緒という少年が、賀茂瑞穂という少女に初めて見せた、温かい人間味の溢れた表情だったからだ。あの時、常に滝口であり続ける人物は、唯一人の少年として、少女に接したはずなのである。

それでも一人、行動する。絶対的に不利な状況だと知りながら、戦場に赴く。微笑んだ上で、少年がそういう行動を選択したのだとしたら。

確かにそれは、標的とされた少女を守ろうとする優しさなのかも知れない。

だが、彼女の求める優しさの質は、それとは全く異なるものなのだ。だから、その場合であっても瑞穂の怒りが失せることはない。自分を特別扱いするな。間違いなく少年に、そう宣告したのだから。

少女には戦う力がある。大事なものを、自らの手で守る力があるのだ。

かつて、陰陽師の少女が好意を抱いていた相手。詩緒の兄、渡辺 柁希という滝口。彼の死に直面し、世界の裏から目を背けた瑞穂。その彼女を立ち直らせたのは、本来の彼女に戻したのは、陰陽師として再起させたのは。何より、その自分に『できること』を気付かせてくれたのは、その少年なのだ。

だからこそ。その種の優しさに甘えるつもりは、瑞穂には毛頭無いのである。

「……上等だわ。私が誰なのか、アンタにも教えてあげる必要があるよね」

フェンス際で呟くと、寝静まった街に在る、小高い丘の方へと視線を注ぐ。

そこに建つのは瑞穂たちが通う学校。そして、陰陽師の少女が見つけた異変のある場所^{ポイント}であった。

だが、その場所に『魔』の存在する気配も、魔術行使による魔力 陰陽師である彼女にとっては陰陽五行の氣の変化 も感じられはしない。

しかし、自身が導き出した現状^{こたえ}、そこで繰り広げられているであろう滝口の戦いを、瑞穂は確信していた。

それは何も、彼女が得意だと豪語する占いを言い、その結果を信じているからではない。

占いを行なおうとしたから知りえた事実。それを基にして、冷静に推理した結果である。

瑞穂がその現実を看破した要因。

それは琴音から送信されたメールが発端であった。

明日、友人を連れていくので、その友人に占いをしてあげて欲しい。そのメールには、そういう内容の文面が書かれていた。

そのメールを受けた時の少女は、嬉々とした。賀茂瑞穂という少女の趣味は、専門書や道具の収集を含めた、占い全般。正にその腕を、苦勞して集めた道具の数々を、久々に披露する機会が訪れたのである。

この来訪者に備え、ウォーミングアップ暖気運転にふうすい風水を行なおうとして、彼女は知ったのだ。

大地に在るちゅうみやく龍脈の僅かな変化を、である。

この時、明日に備えた準備運動とばかりに、何の家具もない渡辺詩緒という件の少年の部屋を、如何にいか運氣を高められる部屋に改造するか、などという他人の趣味や生活を全く無視した想念を抱かなければ。それを実際に行動に移し、この土地に流れる龍脈を読もうとしなければ。その事実には気付きはしなかつただろう。この街の高低図を開いた彼女が感じた違和感は、それほど些細なことだったのだから。

龍脈。

陰陽道では地理の分野に含まれる、風水という思想。龍脈とは、

その思想体系で言われる、大地に存在する氣の流れのことである。

たいそざん太祖山から始まり、山脈を伝い、じゅうけつ龍穴に至る氣の流れ。その龍脈の流れを利用し、福を招く。それが広く世間一般的に知られる風水の目的である。

瑞穂が見つけたのは、その流れに在る不可解な支流であった。

氣の流れである龍脈も、水の流れである河川と基本は変わりはない。だが、少女の感じたこの街の『現状』の龍脈には、その不思議な分岐が存在したのだ。

その変化に対し、直感的にある推論を思い付くと、瑞穂は大氣に在る陰陽五行の陰の氣を読んでいた。

生は陽。陰は死。陰陽師が探ったのは、大気に存在する死者の残留思念。それは所謂、いわゆる霊能者の曰く、浮遊霊と呼称される類のもの動きである。

そして、その龍脈の問題の分岐点に、それが集約するように流動していることを感知したのだ。

龍脈。死者の残留思念。

一種、全くの関連性のない二つの事柄。

だが、少女には心当たりが存在する。

その二つの異なる言葉を結ぶ鍵は『山』。

山上他界。死した靈魂は山へと向かい、そこから冥府へと至る。

日本三大霊場、日本三大霊地、日本三大霊山。例えば心靈などという分野に興味がなくとも、この国に住む人間ならば、一度はその名前を耳にしたことがあるであろう山、恐山。その山こそがこの思想をもつとも如実に体现している場所である。

然して、龍脈は山脈に沿って流れるもの。

つまりはその分岐点には、不可視の『山』が確かに存在しているということなのだ。

今尚、その集約して行く陰の氣を感じながら。

「 召鬼法。制鬼、刻鬼、召鬼、使鬼に合わせて、八卦の力で寄鬼とでも言うべき能力も持つてるわけね……道理で高が一つの高校校舎にあった思念で呼んだにしては、鬼の頭数がやけに多かったわけね」

瑞穂は独り、妙に納得して、滝口が戦闘を行なっているであろう八卦衆の能力を分析する。

卦名は艮。対応方位は東北。そして、司る自然界の力は、山。

不可視の山の正体。それは八卦衆の山を司る剣士。その結論に陰陽師は至っていた。

では、滝口が動いているという憶測の裏づけは果たして。

それも琴音からのメールに因るものなのだ。

そこに八卦衆、山の剣士がいるとして、何の目的があるのか。そ

う彼女が推測を立てようとした、その時。

瑞穂の携帯がメールの着信を再び告げたのだ。

そこには夕刻の少年の行動が書かれていた。

「……私を信用したのなら……こういう事態にこそ、私が必要なコトくらい理解してるでしょうが！」

小声で愚痴りながらも、その集中は途絶えない。

瑞穂は空間に印を切る。

それは晴明桔梗^{せいめいききょう}。

セーマン。そう呼ばれることもある、陰陽道の代表的な呪術記号。陰陽五行の理を宿した図形、五芒星^{ごぼうせい}である。

稀代の。そう呼ばれる彼女にとって、その図形を描く行為は、体内に周囲の五行の氣を取り込み、自身の氣に変換する魔力増幅儀式なのだ。

続けて空に放った呪符に、瑞穂は念を籠める。増幅した魔力を宿す。

「舞え！ 鳳^{ほう}よー！」

命令と共に、紙片には仮初の命が吹き込まれる。それは五彩の色を持つ美しい鳥へと変じていた。

まだ間に合うはずである。鬼の放つ禍々しい邪氣は、まだ感じられないのだから。

少女には、そう信じることしかできない。

瑞穂は詩緒を知るからこそ、彼の狙いが理解できているのだ。

滝口の少年は、敢えて敵の術中に陥るつもりなのであるうことを。

言葉の文でなく。少年は山の剣士の持つ、召鬼法をわざと受けるつもりなのである。

「失敗したら殺せて！？ 冗談は態度だけにしなさいな！」

だからこそ、最悪の事態も考慮して、自分の後釜を準備しようとしたのだ。しかし、そんなことは瑞穂にとっては、有り難迷惑な、余計なお世話でしかない。

少女を背に乗せた大鳥は、力強く羽ばたくと、月空へと飛翔する。

そして、一目散に彼女の通う学校へと舞った。

「主の親族は息災であったな」

軽々と豪腕を以って、巨大な斧を振るいながら大隈は意味深に笑った。

「それがどうした？」

こういう場面に於いて。その台詞が持つ意味は、身内に危害を加えた、もしくは、危害を加える準備がある。そういう意志表示であり、精神的な揺さぶりをかける常套手段である。

だが、詩緒はそれを気にも留める素振りもなく、唸りを上げる戦斧に意識を集中していた。

触れれば、いや、掠った部分でさえ根こそぎ奪うような凶悪な一撃を、少年は恐れることなく極めて最小限度の間合いで避ける。

「ほう。肝が据わっているのか、冷酷なのか」

薄く笑みを浮かべた顔で、回避された斧を手首の力だけで反転させると、そこから袈裟斬りの要領で大隈は振り降ろす。

「気にはならんのかっ!？」

渾身の一撃。気合いの変わりに続けて吼えた言葉。

地をそのまま二つに割るような衝撃が、中庭に拡がっていく。

立つことを許さないような揺れ。あたかも地震さながらの大地の震え。

大隈の重撃は常識を逸する力を見せていた。
だが、その攻撃に晒されながらも、黒衣の滝口は普段と変わらぬ動きを見せる。

その一撃の後の隙とて、逃がしはしない。

震える大地を蹴ると、まだ斧を振り下ろした直後の大隈の脇を駆け抜ける。抜き際に聖刀を閃かせる。

「……家族など捨てている。それでも、もし、何かあったのなら、滝口としてお前を排除するだけだ」

振り向き様に血振りをし、冷たい視線を背中を見せる巨漢に詩緒は向けた。

鬼切。その刀身を濡らしたのは、その大男の血である。

「くくくつ……主は吾が、それで潰えたとも思ったか？」

むくりと巨軀を立てる大隈。その脇腹には深々と刀傷が生まれ、臓物が零れていた。

それを手の平で体内に押し戻しながら、四天王である滝口は、一介の遊撃の滝口を見下ろす。

「吾がは不死身よ。だが、この痛みは返さねば……。両手、両足をもいで達磨にでもしてやろうぞ……」

敵つい顔を醜く歪める。それだけに深手を負いながら、その顔には一抹の苦痛も現れはしない。

「……達磨か。その男の駒になるよりは幾分かマシだな」

大隈に戦慄し、ただ成り行きを見守っていた慎太郎を一瞥し、詩緒は無表情に返した。

「戯言を」

「達磨ならまだ、お前たちを噛み殺すくらいはできる」

「試してみるか？ 小僧？」

にたり。鬼の形相を浮かべ、大隈は嗤う。

「……なるほど。お前たちが鬼切これを欲しがるわけだ……」

その笑みに、瞬間、感じた異形の気配を、詩緒は見逃さなかった。
「……その程度じゃ、死ねないか……だが、鬼切ならば、お前たち

を容易く斬ることができるのは実証できた」

ゆつくりとその刀を大隈という人の姿を借りた鬼へと向け、詩緒は呟く。

「生きて帰れたのなら、平井万葉に伝える。 渡辺詩緒。お前を

殺す人間の名だ、と」

「その刀が在るからとて、もう勝ち誇るか！ 浅はかなり！ 小僧！」

大隈は咆哮を上げる。相応しくない、その手の退魔の宝具を振り上げる。

その斧の名は『雷鳴』。源頼光四天王の一人、坂田公時の振るつた、雷神の力を宿したとされる鉞。

「……兄の、蒼司の友人の遺品だ……厄介なモノが到達する前に、それだけは返してもらおう」

身を低くし、襲い来る巨漢との距離を自ら詰めた黒衣の滝口は感知していた。上空にある強力な破邪の力の存在を。

高速で落下する大斧を使う腕。狙い通りにその腕を斬り飛ばすと、直後、跳躍する。

「な!？」

痛みではない声を発する大隈。利き腕を斬り落とされたことよりも、その瞬間に知った力ある存在の飛来に驚いていたのだ。

甲高い声で鳴く、炎塊。つい先の瞬間まで詩緒のいた場所に、その塊は急降下して飛び去る。大隈の体を勢い良く跳ね飛ばし、炎上させる。

夜空を裂いて飛来したものの。

それは炎を纏った大鳥であった。

第拾壹話：飛翔（後書き）

<武器解説>

雷鳴らいめい：坂田公時は幼名『金太郎』が有名です。その生い立ちの逸話には、雷神が深く関与しています。…実は金太郎の持つ鉞に名前などありません。いや、僕の調査不足なのかも知れませんが…というワケで、この武器の名前は世木の完全なる創作によるものです。ご了承くださいませ。

第拾弐話：形勢

朱雀。^{すざく}

天の四方の方位、その南方に位置し守護する聖獸。火を司る靈鳥。黄龍、青龍、玄武、白虎と共に、五獸の一つ。暫し、その存在は鳳凰と同一視される。

その中庭に立ち込めていた死者の残留思念さえも、纏った炎により一瞬にして浄化させた靈鳥。

陰陽師の使役した式神は、しかし、その聖獸と全く同一の存在ではない。賀茂瑞穂という術者がそれに酷似したものを、式神として創りあげたに過ぎないのである。つまりは彼女の使役した靈鳥は、それらと同じ符合、火の属性を持った『使い魔』、その聖獸と単に酷似した存在でしかない。

そもそも式神という秘術は、術者よりも靈格の低い存在を強制的に束縛し、それを使役するものである。如何に優れた陰陽師とて、何らかの因子 例えば協力を要請するような契約を結ぶ、その存在を崇め奉る儀式を起居の事として執り行う等 かなければ、自身よりも神格の高い存在を式として扱うなど、人間が可能とする所業ではないだ。

ならば、賀茂瑞穂という陰陽師の使役した式神の靈格は、一介の術者に使役できる程度の存在だったのか。

しかし、その答えは、否、である。

その力は基本^{ベース}となった靈格の高い聖獸と、ほぼ遜色はなかった。大隈という人間の姿を、偽りの名を持った鬼の王の側近を。彼の鬼の王の軍勢に在って、英雄たちに畏怖された力を持った純血種を。それだけの力を有していなければ、ただの一撃を以って、その『魔』に致命傷に程近い損傷^{ダメージ}を与えるには至らなかつたはずなのである。

跳ね飛ばされ、叩きつけられた校舎の外壁。大隈は自身の巨軀が作り出した、その瓦礫の下、爛れ、襤褸屑^{ぼろくず}となった体を再生、復元

していた。

折れた枝を隠すのならば森の中。その過程に生じる禍々しい邪気は、一部、浄化されたとて、山という要因に集められた膨大な死臭を感じさせる陰の気に覆い隠され、陰陽師と滝口に悟られることはなかった。

焼け焦げた臭いが辺りに立ち込めていた。巨大な炎の塊が過ぎ去った跡が、焦土となって判別できる。

「……薔薇の花まで燃えちゃったか……ちょっと悪いことをしたわね……」

瞬間的に一角が焼け野原と化した中庭。その中央に、美しい少女は天女の如く舞い降りると、儚げに呟いた。

「……限度を考える。自分のしたことを棚に上げて、感傷に浸るな」
自身も下手を打てば、弾き飛ばされ、大隈同様に火達磨になったであろうこと。それを気にする様子もなく、詩緒は冷静に、突如、現れた陰陽師の言葉に見解を發した。

「うるさい！ 黙れ！ アンタも後で覚えときなさい！」

「何をだ？」

「一遍、死ななきゃ解らないようね！」

怒鳴る瑞穂に無表情に訊ねた詩緒。その一言が、怒れる少女の神経を逆撫でする。

口を開くと同時に陰陽師は呪符を放つと、躊躇することなく起動言語を發していた。

「爆！」

その命令に忠実に従い、内包された五行秘術を發動させる靈符。小規模な爆発が生じ、その爆炎に紙片は灰となり、霧散して消える。

「ちい！」

その符術に舌打ちをしたのは、少女の攻撃対象となった少年では

なかった。

爆発に生じた光に、視界を奪われた八卦の剣士である。

「でも、とりあえず、コイツを始末してからにしてあげるわ。首を洗って待ってなさい」

黒衣の滝口から、陰陽師はゆっくりと自身の命を狙う刺客へと、その鋭い眼差しを向ける。少々、強引な対処方法といえ、瑞穂の起こした行動は詩緒にかけられようとした呪を防いでいたのだ。

「……余計な真似を」

後方へと跳び、爆発を回避していた詩緒。その滝口も無表情に呟くと、『魔』と認識する同胞であるはずの少年へと体を向ける。

「……賀茂瑞穂……なるほど。平井様が危険視する陰陽師であるワケだ……」

含み笑いをその言葉に続け、慎太郎は二人の退魔師を前に余裕を見せた。

「ずいぶんと余裕をかましていられるわね。状況を把握出来ているのかしら？」

滑稽ね。そう続けんばかりの口調で少女は敵に微笑みかける。

二対一。数的にも純粹な戦力対比にしても、優劣は明確である。

「……その言葉、そっくり返すぜ。状況を把握出来てるか？」

しかし、丑寅の態度は変わらない。

「戦力は補強すればいいだけなんだぜ？」

にやけ面にある丑寅の双眸が妖しい光を宿していた。

その光に誘われたように、空間に無数の霧が現れ、輪郭を象つていく。それは大型の類人猿に似た外形を持つ異形。その相違は頭部に突き出した角。

「ふうん。どうやら完全に独自の能力みたいね……。仙術に見られる方術の一種でも使うのかと思つてただけど……」

丑寅の召鬼法を興味深げに見守ると、陰陽師は呟いた。

道教。その思想の生み出した超人ともいえる、神の領域に達した人類。仙人。

彼らの使ったとされる異能の力、魔術。瑞穂が主に行使している五行秘術もその一つである。

そして、同じくその中の一つに、鬼を操り、使役する方術が存在する。

この場所に降り立つ直前、屋上で彼女の語った制鬼、刻鬼、召鬼、使鬼とは、その方術を行なう上での手順のことなのだ。

鬼を招き、その正体を看破し、その力を制し、その上で使役する。実際の仙術に於ける召鬼法では、鬼の正体を看破するのに、その正体を写し出す鏡として水を用い、呪符、呪言を使って鬼を制し、剣を以って指示を出す。

日本では陰陽師よりも役行者えんのぎょうじやが使用している呪法である。

だが、丑寅の召鬼法には、そのような手順プロセスは存在していない。

「……違うわね。アンタのその目……自前のモノじゃないわね？」

しかし、八卦の剣士の目を霊的に視た陰陽師は、前言を否定した。

「よく解るな」

完全なる実体を得た鬼たちに囲まれた慎太郎は、勝ち誇ったように嗤いながら、瑞穂の言葉を素直に肯定してみせる。

「……召鬼法の方術の術式が組まれているのよ。アンタの目で……」
正確にその術式を構成、行使する眼球。恐らくは、術者に見えざる鬼さえ視覚感知させる眼睛。

それに瑞穂は不自然な氣の流れを感じたのだ。

呪符を構え、臨戦態勢を取りながら、少女は驚きを隠さずにいた。何よりも。その瞳で行なわれている魔術論理の組み方を、彼女は知っているのだ。

その一切の無駄を省いた、美しさすら感じる論法ロジックを。

「カラクリは教えないぜ？ 知る必要もないだろ？」

取り巻きの異形は身構える。獲物を狙う血走まなこった眼が、それぞれ少女を映す。

「どうせ、ここでお前は死ぬんだからな！」

「ええ！ アンタの口から聞く必要もないわ！ そんな芸当が出来

るのは、『あの女』しかいないでしょうから！」

双方が叫び動く。鬼を伴い駆け出す丑寅。呪符を投げ、発令を命じると共に印を切る瑞穂。

陰陽師の手から離れた呪符は、地に触れると巨大な岩槍をその場所から突出させる。その鋭利な穂先は、一体の鬼の体を下腹部から刺し貫き、分断させると二つの肉塊を作り出す。

「一匹を足止めをしたところで！」

嘲る丑寅。だが、瑞穂は微笑んでいた。

「こつちには、そんな雑魚なんて相手にもならない、優秀な前衛がいるんだけど？」

陰陽師の前に黒い影が躍り出る。丑寅とその配下の鬼の前に立ち塞がる。

月影に刃を反射する冷たい光が閃くと、鬼の首が一つ、二つと刎ねられていた。

黒衣の滝口の左手の鈴が、鎮魂歌を奏できるように鳴く。

直後、爆音がまた一つ。

それは八卦の剣士の視線から滝口を遮る、炎のカーテンであった。

「アンタの異能眼を理解した以上、そつちに勝ち目はないわよ！」

続けて放った呪符を発動させた直後、五芒星を切り終えると、瑞穂は魔力を籠め森羅万象に働きかけた。

「火行を以って敵を撃ち滅ぼさん！ 爆！」

符術によって発動されたものとは、桁違いの威力を誇った爆発が生じる。

その爆心は八卦の剣士。その炎は渦を巻き、炎柱となって成層圏にまでに到達するように高くそびえ、夜を照らす。

爆風に煽られ、飛ばされた体を空中で反転させると、詩緒は着地した。

「……限度を考えると……」

一瞬、上空を仰ぎ見る。そして、そう呟きながら、滝口は鬼切を再び構えていた。

彼の予想が正しいのならば、丑寅という八卦の剣士はまだ生きて
いるはずなのである。

敵は未だ切り札を 対陰陽師たる能力を見せてはいないのだから。

炎に巻かれた異形は跡形もなく燃え尽きている。しかし、詩緒は
敵の気配をまだ感じていた。

辺りに漂う死の気配。それが霧散してはいないことが、何よりも
その証明であるはずである。

「ぐっ!？」

不意に、詩緒の体を激痛が支配する。

それはあの夜と同じ痛み。

「えっ!？」

背後に感じた邪気。それは突如として発生した鬼の気配。瑞穂は
慌てて、振り返る。

そこには苦痛に呻きながらも、倒れることを拒み続けている黒衣
の滝口と、その様を見詰める山を司る剣士の姿が在った。

「がんばり過ぎだよ。自分で俺を見失うようなマネしてどうすんだ
よ? バーカ」

少女を小馬鹿にする少年の身には火傷の痕の一つもない。

「……山っていつから、何となく予想はついてたけど……私の本気
の魔力でさえ『龍脈に流しきる』ワケね……」

丑寅の周囲には再び鬼の群れが現れていた。その中央で、八卦の
剣士はほくそ笑む。

「ご明察。俺の八卦の力は受けた魔力をそのまま龍脈に流す力……
対魔術の無効化。限界なんざないんだよ……この星を一撃で壊せる
だけの魔術だつてなら、解んねえーけど……予測がついてるんなら、
もうちつと頭使えよ?」

こめかみを人差し指でこつ、こつと叩き、そう言い放つ。そして、
悠々とズボンの後ろポケットから慎太郎は携帯を取り出した。

「邪魔」

続け、アドレス帳を操作しながら、目の前で呪に抵抗するだけの滝口を蹴り飛ばす。

「詩緒！ …!?」

その単なる蹴りさえ避ける余力もなく、ただ攻撃に晒された少年。その少年の名を叫び、そして、瑞穂は絶句した。

彼を救出すべく、陰陽五行に働きかけ、秘術を行使しようとした口の動きが止まる。

その異常に気がついたのである。

五行秘術を行使しようにも、それは叶わぬことなのだ。大気に存在する全ての気が、地面に、否、龍脈に吸い取られているのだから。……俺の言うことを素直に聞かない生意気な雑魚は、無様にのたうち回ってる」

蹴られた勢いそのまま、地面に突っ伏した詩緒。見下すその滝口にもう一撃、蹴りを見舞うと、徐に丑寅は電話をかける。そこに居る陰陽師など、眼中にないように振舞う。

「……勘違いするなよ？ 俺の力が、単に自分自身にだけ有効だとも思ってたか？ こちら一帯はもう俺の領域なんだよ」

一瞥し、無力化させた陰陽師を蔑む。そこに浮かぶのは、覆されることの無い勝利を確信した表情だった。

妖しい光を宿した双眸は、益々、その光を強くする。

「詩緒！」

駆けつけようとする少女の進路を、新たに召喚された鬼たちが妨げる。

今の瑞穂は単に場慣れした人間でしかない。戦う武器はなく、身を守る術は逃げるしかないのだ。

群がり来る異形の攻撃を必死に避ける少女。それでも少年に僅かでも近づこうとする。

「詩緒！ もうちょい頑張りなさい！ なんとかするから！」

しかし、それは虚しい言葉。

少年を覆う邪気は、徐々に徐々に強まっているのだ。猶予が残さ

れていないことを、陰陽師である彼女は悟っていた。

そして、現状を打開する術を、自身が持たないのことも痛感している。

「……清美？ 俺。話をついた？ ……悪いな……なんか、結局、二人に迷惑かけたみたいでさ……ああ。サンキュ」

繰り返し広げられる一方的な虐待を満足げに見ながら、慎太郎は場にそぐわない声で通話していた。

「今？ 学校にいるんだ……え？ 近くにいる？ ……そうか、さっきまで奈津美と話してたんだ」

次々と繰り返し出される打撃を捌ききれず、ついにその拳が華奢な少女の体を捉える。

その体は軽々と弾け飛ぶ。地面に叩きつけられ、二転、三転する。しかし、瑞穂は悲鳴を上げはしなかった。

それはこの状況に興じている男に対する、ささやかな抵抗だったのかも知れない。

「そうだ。これからのコトとか話したいからさ、清美も来いよ……ああ。待つてる」

そう告げると、慎太郎は電話を切った。

それは短い通話時間だったのかも知れない。しかし、すでに辺りは鎮まり返っていた。

そこには術者の命令を待ち、立ち並ぶ異形たちと、倒れた少年と少女の姿が在る。

「……さて。クライマックスだ……相方に殺されるのなら本望だろ？」

答える声はない。

「……そして、お前だ。渡辺詩緒。賀茂瑞穂を殺したとき、お前の間はもつと深くなるんだろうな……」

不敵に嗤うと、その目に魔力を籠める。

丑寅の、安藤慎太郎の作り上げたシナリオは終幕を迎えようとしていた。

第拾参話：神氣

世界は酷く曖昧なもの。

この世界を構成している摂理という不変と思われる法則でさえも、脆弱であり、決して絶対的な定理ではない。

歴史を紐解いて見ても、世界は平坦なものから球体へと変わり、数多の天体が中心たるこの世界を廻っていたのではなく、この世界こそが天体の中で廻る矮小な一つとなり、別格の様に絶対視されていた時間の流れでさえも、全てに等しく経過しているものではなくなるのである。

とりわけ、魔術という超常の領域に於いては、それは顕著なもの。ある論理を基にした魔術体系では成り立たないはずの定理が、異なる論理を基に構築された魔術体系では発生し得る事象となるだけから。しかし、そのどちらもが、実際に行使術者を介して世界に影響を与え、確に確立されている法則なのである。

この中庭で意識を失い、横たわる少女。彼女が行使する陰陽五行説という思想を基にした技術体系であり魔術体系でもある、陰陽道。その真なる目的は、森羅万象、全ての事象をその思想により解析し、世界の意味と働きを解読すること。つまりは学問、科学に非常に酷似したものである。

その観念の一角に過ぎない、魔術的要素。

それにも関わらず、陰陽道のその分野は、数々の秘儀、秘術、呪術を有している。

この体系に存在する魔術だけに限定したのだとして。しかし、その全てを極め、行使できる者がいるのだとすれば、不可能という語彙を消滅させるほど、その分野は深く、多岐に渡っているのだ。それでもそれらは、陰陽五行による真理の解析過程により得られた服産物に過ぎない。それらは変異や怪奇、奇跡と呼ばれる現象、事象を、その思想で解読した結果、陰陽道の魔術としての再現論理を確

立させたものでしかないのだ。

逆説的に言ってしまうえば、陰陽道という思想は、それだけの世界の真理を、すでに紐解いているという証明でもある。

その世界的に見ても秀でた陰陽道という魔術体系を持つ日本という国。

しかし、その辺境の島国、小規模な土地だけに限定したところで、その思想に対する二律背反アンビバレントは存在する。

その思想に内包されている、呪術的思想の一つ、言霊ことだま。

物、事を指し示すその名称こそが、物、事を縛りつける最小の呪まじであり、祝詞いわひことばであるという思想。

この思想に則したがれば、石という物質の存在は『石』という言葉に因よって始めて、石として認識され、存在し得るのである。

そして、それに反するのは。

賀茂瑞穂という陰陽師の目の前で、正にそれは発現しようとしていた。

丑寅は眼下に転がる少年を満ち足りた顔で目視していた。

そして、少年を映したその眼に、また少し強化させて魔力を籠める。

真綿で首を絞める。それはその比喩を地で行く行為だった。

彼の持つ異能。空間に漂う思念だけの鬼を召喚し、現し世に実体を与える術式を宿した眼。

その力を完全に発動させたのだとすれば、その身に鬼を宿している少年を、直ちに鬼へと墮とすことなど造作無いことなのだ。

その^{なぶ}駢る行為。それは儀式なのである。

渡辺詩緒という滝口の存在は、丑寅にとって在ってはならない存在だったからだ。

絶対的な力関係に際して、己を持ち続けた者と服従を選択した者と。

平井万葉という絶対者を前に、後者であった丑寅。

丑寅という天敵を前にしても、前者であり続けた詩緒。

つまりは丑寅にとって、その滝口は恥辱を与える存在でしかないのだ。

だから、思い知らせる。屈服させる。自分の選択こそが正解なのだと知らしめる。

苦痛を以って、少年のその身にそれを刻み付ける。

八卦衆、山を司る剣士。彼のその行動は、自己を正当化するのに、心を雪ぐ^{こそ}ために、必要な行為だったのである。

戦闘能力に関しては、丑寅よりも明らかに優れていた黒衣の滝口だが、その滝口は地に這い^は蹲り^{つく}、辛苦の中、その眼で構築され発動している呪法に抵抗するのみだった。

しかし、それでもそれは、無駄な足掻きでしかない。

それでも抵抗を続ける、その無様な少年の姿こそが、丑寅を癒す。採択した回答が正しかったことを証明する。憂さを晴らす。

自らの力、絶対的な力関係の前に、少年は無力であり、最早、屈服するしかないことを彼は確信していた。

少年の心^に在る闇が、彼の体をどす黒く侵食していく様を、その

眼を介して窺い知るのだから。

闇は少年に激痛を与えながら、その身をじわりじわりと蝕んでいく。彼にしか見えない闇と同色の黒、その色に少年の体を染め広げていく。

それは人間という生物を、鬼という異形へと変えて行く行程。そして、自身の生き方を否定した人間の末路なのだ。

歡喜の色を浮かべた眼に、八卦の剣士はまたも、僅かばかり強化した魔力を籠めた。

その少年の自我が闇に腐食され、崩壊するには、束の間の猶予しかないと知りながら。少しでも長い時間、責め苦を与えるために。

孤独と罪の意識で構成された闇は、しかし、直、少年を食い殺すだろう。

その時こそ、彼の切り札となる手駒の産声が、この広場で聞かれ、召喚者は心からの高笑いを上げるはずである。

ただ魔術を無効化するだけの力しか持てなかった自分。その力とて、友軍をも影響下に置くために半端者だと蔑んだ同胞。だが、そんな彼らさえも従える立場へと、その瞬間に、君臨することを信じて疑わずに。

瑞穂は自分がすでに死んでいるものだと思っていた。

意識が遠のいた時点での戦況は、一人の少女の生存を決して認容できるものではない。何処か、そう他人事のように冷静に判断していたからである。

目覚めた朦朧とする意識の中、少女は辺りを窺う。そうは言っても、体は満足に動かなかつた。瞳孔と顔を僅かに動かしたに過ぎない。

自身の横たわる黒く焦土と化した大地。その大地に立つ鬼たちの姿。朧げな視覚でそれが判断できる。

血の臭いを感じし始めた嗅覚と相まって、それは予想通り、一部

の人間の抱く死後の世界の印象と合致していた。

その風景は地獄そのものである。

しかし、その少女には合点がいかない。

「……オカシイわね……私が天国に行けないはずが、な　っ！」

その不平を口にするも、しかし、腹部に感じた激痛に瑞穂の言葉は途切れた。

咽て、吐血さえする。

それは強烈に殴打された際の、内臓の損傷に因る症状。少女の意識を飛ばした一撃が与えた被害だった。

だが、その痛みはデメリットだけを少女にもたらすものではない。血の巡りに合わせ、その体を襲う脈打つ様な痛覚が、意識を徐々に明確に変えて行くのだ。

「何よ……まだ……生きて　！？」

弱々しく呟きながら、陰陽師が次に認識したのは、恐怖を覚えるほどの禍々しい邪気だった。

山という符号に集められた死者の思念である陰の氣。生娘という極上の餌を目の前に、お預けを食らっている異形たち。

その邪気を発する多数の存在の中に在って、抜きこんでた邪気が一帯を支配する様に立ち込めていたのだ。

否。その気配こそが、ここを死後の世界だと少女に錯覚させた要因なのかも知れない。その恐怖こそが、現状、この世界の大気を構成するように辺りを覆っていたのだ。

その恐怖の正体を瑞穂は知っていた。

それこそが、陰陽寮の一部の重鎮たちが畏怖する凶事なのだ。

少年が兄を抹殺したときに。影を操る魔人を排除したときに。陰陽師が幾度か遭遇したことのある、渡辺詩緒という滝口に宿った闇なのだ。

その滝口の墮落の時が直前に迫っていることが、瑞穂には察知できていた。

その体が震えているからだ。

それは決して体が異常を訴える痙攣の類ではない。恐怖という感情がもたらしたものだ。

「詩緒！」

瑞穂は力の限り叫ぶ。しかし、それは叫んだと彼女が思うだけで、余りに弱々しい少年の耳には決して届きそうもない声でしかなかった。

「……しくじったら、あの世で殺すわよ……詩緒」

だが、少女は落ち込みなどしない。だったら、少年を信じるだけなのだ。

標的である陰陽師が意識を取り戻したことなど、気付くはずもない。

「あ……あははっ　いいぞ！　いいぞ、お前！　予想以上だ！」

転がる少年が放つ邪気の強大さに、丑寅は興奮し、知らず歓声を上げていたのだから。

ビクン、ビクンと痙攣を起こし始めた少年の体。

丑寅の待ち望んだその時が、寸前に控えているのだ。

「仕上げだ！　後押しをくれてやるぜ！」

発狂したように叫び、八卦の剣士はありったけの魔力をその眼に籠める。

感じていた劣等感など既にそこにはない。

この鬼を完全に調伏することが叶えば、平井万葉という存在さえも絶対者ではなくなるかも知れない。

そういう期待が丑寅を駆り立てる。

それほどに、その少年が纏った邪気は強大で圧倒的だったのだ。

八卦の剣士の造られた双眸が、おぞましく輝く。

瞬間、世界を支配している恐怖は、少年という一点に凝縮された。

年ごとに 咲くや吉野の山桜 木を割りてみよ花の在処は

在る剣術家はこの歌を、真理だと唱えた。

彼は剣術という人殺しの業を、しかし、人を活かす業だと指導する。

それは一般的に考察すれば、欺瞞ぎまんでしかないのかも知れない。

刀は人を斬ることを目的として、改良に改良を重ね、世界的に見ても、その一点に於いては頂点にまで達した武器である。あくまで、人殺しの道具でしかないのだ。

そして、人がその刀を使い、如何に効率的に、確実に人を殺めるのかを突き詰めてきた技術。それこそが剣術なのだから。

しかし、彼の剣術家の言葉とて真実なのだ。

人を活かす剣術とは、人を活かすために刀を振るうという意志を強く有すること。それこそが極意なのだ、彼は伝える。

その歌を以って、その意志が如何に重要かを説く。

桜が美しく咲くのは、美しく咲き誇ろうという桜の意志の成せる業である。故に、木を割って見ても意志であるが為に、決してそれは見えない。しかし、また。桜は春になれば美しく咲き誇るのだ。

見えない意志の力が如何に重要であるか。

この桜のように。意志の力こそが物を、事を成すのである。

つまりは、刀に人を活かすという強い意志があれば、その刀は人を殺す術ではなく、人を活かすための術『活人剣』になるのであると。

彼の剣士の説く、その歌が示す意志の力。

それは、神氣^{しんき}。
万物が万物たるうとするのは、この神氣の働きによるものだとい
う思想。

支配する沈黙の中。詩緒はゆらりと立ち上がった。

不気味なほどに静まり返った辺りに、その動作に合わせ、儂げに
鈴の音は響く。

「……人の姿に良く似た鬼……なのか……？」

丑寅は、自分の召鬼法が完全に行使されたことを前提に、目の前
の少年の姿に対する感想を述べた。

召鬼法は確かに発動されたのだ。彼の行使した魔術理論を基に考
察すれば、その滝口が鬼でないはずはない。人の姿をしていても、
それが人であるはずはないのだ。

だが、その滝口は確かに人間であった。邪気さえ発していない。
むしろ、その体を包む大気は、清らかに澄んでいて、神々しくさ
えある。

異常。あるはずのない現象に、現状を把握する感覚が、今の丑寅
には欠落しているのだ。

だが、それは立ち上がった黒衣の滝口も同じだった。

詩緒は目の前に討つべき敵がいることを認識できてはいなかった。
それどころか、薄笑いさえ浮かべて、ぽつりと呟く。

「『笑顔のカタチ』か……なるほど。何度、堕ちかけても、人
として留まれたわけだ……」

それは兄の形見。少年の左手首に在る、小さな銀色の鈴。滝口と
して、自身の生きる世界に巻き込まぬよう、人を拒絶する戒めの象
徴。

そして、同時に少年と人を結ぶ結晶でもある。兄は、この鈴を弟

に贈ったときに言ったのだ。

この鈴は、いままで君が守ってきた笑顔でもある、と。

その小さな何の変哲もない銀色の鈴は、しかし、滝口として少年が護ってきた、人々の笑顔が具現化した崇高な宝物でもあるのだ。

つまりは、その鈴に凝縮されているのは、渡辺詩緒という少年の全てだった。

孤独も、安らぎも。戦いの記録も、一人の少年としての人生も。

その全てがそこに凝縮されているのだ。

詩緒は、鬼として自身を書き換えようとする呪詛の中で、確かにこの鈴の音を聞いていた。

渡辺詩緒は渡辺詩緒なのだ、鈴は伝え続けていたのだ。

だからこそ、詩緒は自分が自分であると常に認識できていた。意識を貪る闇にあつて、自分は鬼ではなく、渡辺詩緒なのだ。

彼が彼であつた所以。あり続けられた理由。

それこそが、神氣に因るもの。

この少年をこの世界に存在たらしめる少年の意志の力。少年が強く自身で在ること望んだ意志の成した力。

渡辺詩緒という言葉霊に縛られる存在ではなく、渡辺詩緒たろうとする意志の成せる力。

少年は鬼ではない。鬼という闇を抱えていても、渡辺詩緒という神氣が在る限り。その少年が渡辺詩緒という神氣を発する限り。

「な、何だ、この化け物!？」

少なくとも、自分の欲した切り札たる駒ではない。

そう判断を下した丑寅は、慄き叫ぶと後ずさる。その悲鳴に似た声に、辺りに控えていた鬼たちは一斉に動く。

立ち上がった少年を目掛け、その異形の群が躍りかかる。

周囲に迫る『魔』の気配。それを察した滝口は、しかし、焦りな
どしない。

詩緒は左手の鈴を一瞥し、苦しみながらも手放しはしなかった、
右手の愛刀の柄を握り直す。

かつての兄の愛刀でもあるその刀を、力むことなく握る少年の手。一体となる鬼切と滝口。

「まだ、終われないな……にいさん 枉希」

その言葉が終わった時、辺りに朱の華が散っていた。

夜の闇に散り往くは異形の血。閃いたのは退魔の名刀。

その赤い飛沫の中心で鬼切を走らせ、鈴の剣士は舞う。

唯、渡辺詩緒で在り続けるために。

第拾参話：神氣（後書き）

< 捕捉解説 >

剣術家と活人剣：剣術家とは彼の柳生十兵衛の父、柳生宗矩のこと。当然、その流派、活人剣を謳うのは柳生新陰流やぎゅうしんかげりゅうです。その思想、神氣については、宮本武蔵の『五輪書』と並ぶ近世武道書、彼の著書である『兵法家伝書』に見られます。本作の神氣は個人的な解釈を基に設定されていますので、相違点は見逃してください（汗）

第拾四話：合流

「くそおおおっ！」

何故。どうして。何が。何で。原因は。要因は。理由は。そして、敗因は。

様々な仮説と推論とが入り乱れ、錯綜し困惑する思考。それを一喝することで沈静化させるように丑寅は吼えた。

いや。それはこの案件に対する思考の放棄の決定を、彼が宣言したに過ぎなかったのかも知れない。

発動した呪術が、発動しなかった。

言葉として表現してみても理解不能な事態が発生したのだ。勝利どころか、輝かしい未来までも、その先に思い描いていた少年に、その不測の事態に際して混乱パニックに陥るなど言っても、それは酷な話である。

しかし、結論を導き出す事実の一つなのだ。

あの滝口には、鬼を操る異能の力は効きはしなかったということである。

それをこうして短時間で悟り、その混乱にありながらも、自らが成すべき最善の行動を実行に移していた丑寅は、自負する選良意識エリートに劣らぬ決断力と行動力を確かに持ち合わせていたのかも知れない。空間に在る思念を鬼という魔物へと実体化させながら、八卦の剣士は戦略的撤退を試みていた。

最強の切り札となるべき駒は、最強の刺客へと化したのだ。

初見の夜に剣を交えた際、完全に後手に回った事実。剩あまつへ、その滝口は、大隈という四天王を相手にしながら、互角以上に干戈かんかを交えて見せたのだ。

正面から純粹に戦闘を仕掛けたところで、玉砕するだけであることとを、彼は冷静に判断していた。

「あの女アメと合流しさえすれば、アイツなんざ雑魚なんだ！ 速

攻で始末してやる！」

愚痴り、この逃走があくまで勝つための行為なのだと、作戦なのだと言寅は自身に言い聞かせる。そうでもして感情を吐かないことには、その敵に抱く劣情に狂いそうだった。

その眼に常に召鬼法の術式を展開させながら、八卦の剣士は校舎の脇を抜ける。この学園の正門への最短ルートを駆ける。

次々と具現化していく異形。その中にはまだ、完全な鬼としての姿を形成しきれていない、アメーバのような肉塊に過ぎない異形さえいた。それは世界に実体として存在するや、直ちに霧散して消えていく。

それが丑寅の異能の力の限界だった。

彼の召喚術は、決して鬼の力を増強、増幅させて行使される類の術式ではないのだ。すでに思念として形成済みの鬼を、そのまま具現化させるだけの能力でしかないのである。

つまりは、まだ不完全であり、明確な意識体として存在していない思念は、実体として具現化できないのである。

標的自体を鬼として墮とす。その方法が最も単純で、かつ確実に、効率的に標的を排除する方法であろう。

確かに人には闇の部分がある。

妬み、嫉み、怒り、悲しみ。そして。

人を闇へと傾かせる感情は幾らでも存在するのだ。人を『魔』へと墮とす要因は誰にでも、確かに存在するのだ。

だが、丑寅がそれを行なわなかった理由は、行なえなかった理由は、その能力の限界のためであった。

人を『魔』へと墮とす負の感情を、魔術で増幅し、鬼として構築させる術を丑寅は持たないのだ。そして、その人間の中に鬼という存在が構築済みでなければ、彼には召喚しようがないのである。

だから、賀茂瑞穂という標的を直接、鬼に墮とすことは行なえなかった。無理やりに行なおうとしたところで、対象を鬼へと変える前に、人を鬼へと変えるその闇は、消え失せたアメーバのように消

滅してしまうのだから。

そして、それ故に、丑寅は現状を打開できないでいた。

彼には追跡して来るであろう滝口からすれば、雑兵という程度の鬼を召喚し続けるより術はなかったのである。

自身を『山』と符号化して呼び集めた思念を利用するしか、時間の稼ぎようがなかったのである。

しかし、丑寅はただ闇雲に逃走しているわけではない。

彼には切り札が存在していた。

その戦況を一転させる手札が今、この施設へと向かっていることを彼は確認しているのだ。

「ははは！ いいぞ！ お前はいつも、俺の期待を裏切らねえな！」

だから、丑寅は不利な状況に在りながら嗤う。

黒衣の滝口が、彼らと切り結ぶ前に感じた『魔』の気配を、彼も遂に察知していたのだ。

丑寅が合流を待ち侘びるその少女は、間もなく校門を潜るだろう。目視できなくとも、まだ、人であるはずのその少女は、しかし鬼の邪気を放ち、想いを寄せるこの少年に、その現在地を教えているのだ。

微弱でしかない鬼の気配。しかし、人間がそれを放っているのである。少女が宿した闇は、人という殻ではすでに包みきれず、外界へと溢れ出していたのである。

それは特異な現象だった。通常、物質が邪気を発したときには、既に『魔』に堕ち、異形へと変じているからである。

少年と出会ってしまったその少女は、偶然にも依代よりしろとしての素質を持っていたのだ。

依代とは、聖人や巫女に代表される、通常の間人では内包しきれない神聖なる存在、もしくは邪悪なる存在を受け入れるだけの器を持った存在のことである。

不幸にも、少女はそれを少年に見出されてしまっていた。

その少女の闇は魔術などではなく、丑寅が、安藤慎太郎という少年が、何れ利用すべく、彼女がその少年に抱いた清らかで美しく、崇高で尊い感情　愛情を利用して、その手で育て上げた闇だったのである。

少女の想いに応えるかのように慎太郎は接しながら、その実、その想いを穢し、汚し、弄び、裏切り、蹂躪し、凌辱し続けて来たのだ。そして、彼女の親友さえも道具にとして利用して、終には純白だった少女の想いを、どす黒く染め上げたのである。

それが今夜。丑寅の駒として利用されようとする時を、いよいよ迎えようとしていた。

「まったく……危ない橋は渡りたくなかったのに、結局はアンタの思惑通りにコトが運んだわけね」

溜息混じりに、辟易とした口調で瑞穂は溢すと、その指にあった人形を夜闇に放った。

続け、大気に存在する火行へと、言葉を介して働きかける。

その言葉は遵守すべき命令として、世界を構成する氣の一つに忠実に遂行されると、闇に舞っていた紙片は瞬間、紅く燃え上がり、灰と消えた。

丑寅の消えたこの場所は、既にその男の支配下からは解放されていたのである。

「……で？　失敗したら、どうするつもりだったの？」

そう聞いた少女の顔。そこには、つい先程まで浮かんでいた苦痛の表情は存在していなかった。

「お前には関係ない。それより、状況を考えた言動をしる」

訊ねられた少年は、動けなかった少女を襲撃しようとしていた最後の鬼を斬り伏せると、彼女を一瞥することもなく、そう残し駆け出していた。

「……はいはい。その時は死ぬただだ、ってコトね」

お前には関係ない。口癖のように事あるごとに、少年の口を吐くその言葉。それを今回は、そう翻訳すると呆れ顔で瑞穂は立ち上がる。

なでもの撫物で損傷を治癒させたとはいえ、若干の痛みが彼女の腹部には残っていた。短時間で行ったその儀式は、あくまで応急処置でしかなかったのだから、それは仕方がない。そして、それを四の五の言える状況でないことを、少女も理解している。

「見せてもらおうかしら？ 敢えて召鬼法を受けた、渡辺君の成果とやらを」

そう芝居がかった台詞をおどけて眩くと、その陰陽師は躊躇うとこなく、滝口の背中を追った。

二人の退魔師の姿が消えた中庭。

そこは無人になったかのように見えた。

後に残されたのは、霊鳥の焼いた薔薇と大地。

しかし、その真相は異なる。

学園を覆った死の香りと、あまた数多存在する鬼という異形の発する邪気。滝口と陰陽師は、それに紛れた二つの妙を見落としていた。

だが、それを看破することは誰であれ、容易にできることではないのだ。その難易度を例えるのだとすれば、今、この上空で輝く星々の中から、人の手で造られた衛星を一目で見抜けと言う様なものなのだから。

その一つは一人の人間である少女が、数ある邪気の一つを発しているという事実。

そして、もう一つ。

中庭の隅。コンクリートの瓦礫の山。それはそこに存在していた。その山は、霊鳥に弾かれた男が校舎の外壁に衝突し、作り出したものだ。

不意に、その瓦礫が崩れる。その中から、大きな異形の影が、むくり、と現れる。

異常に発達したその両腕が、生物としては不均整な輪郭を形成し

ていた。胴に腕が付いているのではなく、腕に胴が付いている。そう言わしめんばかりの形である。

それは大隈だったモノ。頭部に存在する二本の角が、その異形の呼称を判別させる。

それも鬼である、と。

焼かれた衣類は剥がれ落ち、表面に露わになるのは、その異形の地肌。赤みを帯びた肌が、はち切れんばかりに全身隆起した筋肉を、無理やりに拘束しているかのようだった。

「……渡辺、か……その血を絶やさねば、吾がらの参謀様に祟りそうだな……」

人の言葉を呟くと、その異形は、鍛えられた成人男性の腰周りを優に超えるような太腕を袈裟に振るう。

その腕に触れた礫片は塵と化し、生じた風に破片さえも砂埃のように飛び散る。

ただの一撃にして、そこにあつた大男を覆い隠していた大量の瓦礫は消え失せていた。

「……本来の姿に戻るのには、果たして何時以来であろうか？」

平坦な顔にあるのは、大きく開かれたぎよろりとした目、潰れた鼻、顎の付け根辺りまで大きく裂けた口。

その口の両端に上下の大きな牙を覗かせ、その異形は、にたりと笑う。

「久方振りに闘いに興じようぞ、綱の子よ」

大隈という仮初の姿を捨てた異形は、のしり、と、その巨軀を決戦の場へと進めた。

校庭には二組の男女の姿があつた。

追われていた者と追っていた者。静まり返り、平時よりも広く感じられるグラウンド上で、その図式は既に崩れていた。

雌雄を決するために対峙する。

共にそこを、今回の変事の終焉の場所としているのだ。

「……誰？ あの娘？」

滝口の横に並ぶと、陰陽師が口を開く。

その少女こそが、八卦衆の剣士の切り札なのであるが、二人の退魔師がそれを知るはずもない。

「……安藤慎太郎。その女を放せ」

訊ねた瑞穂の言葉を完全に無視し、詩緒は八卦衆に勧告した。

人質。確かにそう判断するのが普通の状況である。

「馬鹿か、お前？ それで『ハイ、そうですか』って、手放すヤツがどこにいるんだよ？ なんだ？ それとも従えば、俺を無罪放免見逃すとも言つつもりか？」

しかし、当然の如く、それを否定すると丑寅は黒衣の滝口を嘲笑う。

「応じれば、苦しませずに瞬殺してやるだけだ」

「交渉になってないわよ、アンタ……」

至って真面目に返す相方に、小声で瑞穂が返していた。

二人の退魔師を挑発するように、慎太郎は少女の肩を抱くと、引き寄せる。

「あっ」

吐息のような声を漏らし、頬を染め。少女は抵抗することなく慎太郎に抱き寄せられる。

「少なくとも、犯人と人質って関係じゃなさそうね……」

その少女の反応に、瑞穂は呟く。少女に対しても警戒を強める。

「この女は俺の全てだ……渡辺詩緒、お前には絶対に渡さない」

少女を胸に慎太郎は詩緒に告白する。状況を理解してはいない少女の顔に、しかし、満面の歡喜が浮かんでいた。

その台詞は、少女の解釈した意図とは全く異なるもの。しかし、そう錯覚させるべく丑寅は事実を語ったのだ。

この駒は現状を打破する俺の力の全てであり、敵に渡すわけがない、と。

しかし、少女の頭の中では少なくとも、自分と慎太郎の仲を裂こうとする転校生、そういう設定ができあがったはずである。

「……渡辺くん、賀茂さん。貴方たちが何者だか知らないけど、何があつたのかも分からないけど……どんなことだろうと、慎太郎を傷付ける人は私が許さない……私たち二人の邪魔をする人を、私は絶対に許さない」

丑寅の目論見通りといったところだろうか。淡々と静かな口調にも関わらず、二人の転校生に向けられた少女の言葉には、確かな殺意が在った。一介の少女が発するようなものではない、威圧感が在った。それは、人ではない気配を伴なつて放たれている。

「……いつから三角関係なんて高度な恋愛ができる様に　　って、言いたいトコだけど……詩緒。気付いたわね？」

その事に気付いた陰陽師は滝口に確認する。

「ああ」

滝口は肯定し、そして、動かない。

邪気を放った少女。

相対する少年と少女は悟っていた。

彼女は渡辺詩緒と同じく、その八卦の剣士に鬼として使役されようとする駒なのだ。

確かに、彼女は単なる人質ではないのかも知れない。しかし、彼女が利用されようとする被害者であることは、二人の退魔師にとつては事実なのだ。

下手に動けば、その身を途端に危険に晒す恐れもある。

だから、詩緒と瑞穂は動かなかつた。

今はまだ。その時ではないと判断して。

張り付いたように、その場を動きはしない二人の敵。その様を見下し、勝ち誇るように顔を歪めると慎太郎は少女の顎へと指を添える。

視線を交わすべく、少女の顔を動かす。

「姫川清美！ 抵抗しろ！ お前はお前だ！」

瞬間、詩緒が叫んだ。

「目だ！ 琴音！」

続け、もう一人の前方の少女に声を張ると、黒衣の滝口は駆け出す。

その声と同時に。不意に丑寅の目に光が飛び込んでいた。

それは剣閃。

少女が邪気を放った、その時。その少女を抱く、八卦の剣士の背後に。

その心強い援軍は現れていたのだ。

「な！？」

驚きを叫び終える間もなく、その一撃に、丑寅の視界は赤く塞がれていた。

第拾伍話：消失

「……ある種の才能なんだろうけど……琴音のタイミングの良さって、ホント、すんごくズッコイって思えるわね……」

不満を宿した瞳に件の少女を映し、ぽつりと愚痴りながら瑞穂は成り行きを見守っていた。

またも。或いは、当然の如く。今現在、その陰陽師は丑寅の山という因子に、戦力としては、ほぼ無力化されていた。そのため、目の前で躍動する少年と少女、二人の剣士の足を引っ張らないように立ち振る舞うよりは、他になかったのである。

あの夜と同じように。絶好の時機タイミングで現れた、その剣士。

彼女は開眼して間もない第六感かんかくで異変を感じると、自らの意志で凶事の発生した、この場所がくえんへと駆け付けたのだ。

そして、その行動が今宵も再び、戦況を好転させる起点となったのである。

源琴音。

その少女の登場に、丑寅は完全に虚を突かれてしまったのだから。何がその身に起ったのか。彼女から攻撃を受けたという、その事実を把握するよりも、赤一色に塞がれた視界と、その部分から感じる痛みという感覚に八卦衆の一員は動転する。

「ぐああアッ！」

苦痛を叫び、顔面に開いた傷口を片手で押さえ、抱き寄せた清美を払い飛ばす。悶える。

慢心の招いた痛恨のミスに、架せられた罰則ペナルティーは、切り札を産み出すはずであった部位の損傷。

突き出された少女の白刃は真一文字の傷口を丑寅の顔に刻み込み、その両目を赤を零す一線で結んでいた。

「姫川さん！ 大丈夫!？」

残心もそこそこに、斬り込んだ琴音は、八卦衆と共にいた少女に

呼びかける。

「慎太　！」

しかし、清美にその声は聞こえてはいない。それは少年を想う心故か、それとも。そして、痛みを訴えた少年に寄り添おうとした動きも、唇の動きも、不意に止まっていた。発条ぜんまいの切れたカラクリ人形のように。突然に全ての動きを清美は止める。

刹那。その少女は再び邪気をその身から発していた。先ほどよりも明らかに濃密な瘴気を辺りに漂わせる。

「詩緒！」

「ちっ！」

少女の身体に異変をもたらしたモノの正体を、二人の歴戦の退魔師は看破していた。

それは丑寅の呪術が、姫川清美の身に行使されているということ。少女を鬼へと変える論理が、少女の内部で実行されているということだ。

召喚者。今回の元凶たるその『魔』に、止めを刺すべく駆け出していた黒衣の滝口は、直感的に、行動を転換していた。

「ちっクシヨウがあアッ！」

片手で上半分を覆われた八卦の剣士の顔。しかし、それで十分に止血ができるはずもなく、その隙間から血は漏れ、流れ落ちる。その痛みを訴えるとも、憤怒とも取れる咆哮を丑寅は上げた。

空いた片手で背後から小太刀を引き抜くと、無闇矢鱈とそれを振り乱す。八つ当たりの如く、刃を振り回す。

「ブツ殺す！　ブツ殺す！　誰だア！　俺を斬ったのは！？　死ねよー！」

その太刀筋と同じく、狂ったように八卦の剣士は悪罵あくはする。しかし、それは当然の行動でもあった。無様に見えようが視界を奪われた彼には、虚勢を張りながら、そうするより防衛手段はなかったのである。

その少年に駆け寄ろうとして、不意に言葉を失い、立ち尽くした

少女。自身にとって切り札であるはずの、その少女にも盲目の剣士の凶刃は流れる。その存在に配慮する余裕すら、丑寅は失っていた。「姫川さん！ 逃げて！」

彼女を護るべく、自身が負傷させた慎太郎と清美の間に琴音は立つと小太刀を受け止める。

響いた刃音に消されないように、清美の意識を呼び戻すように琴音は叫ぶ。

しかし、次の瞬間には、逃げると叫んだ琴音自身が、横から駆けつけた滝口に抱えられ、その場から逃がされていた。

「え！？」

詩緒に抱きかかえられた琴音が見たのは、人のものではない殺気を放つ鬼女の姿。

その異形は、寸分変わらず、琴音のいた位置へと鋭く尖った爪を振り下ろしていた。

「ああああああああああああああああっつつつつ！」

背後から獲物を襲ったはずの一撃を空に振るい終えると、ソレは絶叫し、身を不気味に、異常に痙攣させる。

絶叫は、やがて意味不明の言語へと変わっていた。

その呻きと共に、口からは唾液とも胃液とも判別できない液体を辺りに吐き散らしながら、ソレは奇怪に身を^{よじ}擦る。

そこには、日常の世界で琴音の一つ後ろの座席に座る、内気な少女の姿はない。

「浅かったか」

距離を取ると、琴音を降ろし、詩緒は背後を振り返った。

「何？」

少女の異変に琴音は困惑する。彼女に解っていることは、その日常の世界に生きていくだけのはずの少女が、此の世ならざるモノに変わろうとしていることだけだ。

かつて純真なものでなかったにしても、この少女に想いを寄せた、あの少年のように。

「アイツは目で鬼を召喚するのよ。あの清美って娘は、心に鬼を宿してたみたいね。利用されたのよ……」

二人の傍に駆けつけた陰陽師は教える。

「え？」

呆然と、その言葉を琴音は受け止めていた。

「だったら、改めて元凶を排除するまでだ」

横にいる二人の少女を他所に、独り呟くと、詩緒は鬼切を構え直し、強襲をかける。言葉通りに一目散に丑寅を目掛け、黒衣の滝口は距離を詰めていた。

「……眼球の完全なる破壊ができなかったから、不完全とはいえ、呪術の発動を許したみたいね……」

敵との距離を一足に詰めた滝口の背中を追いながら、瑞穂は独り言のように呟く。

その言葉通り。琴音の刃は丑寅の目を斬り壊したのではなく、その表面を斬り裂いたに過ぎなかった。

詩緒の目の前。丑寅との間に、その影はふらりと現れる。知性というものの欠片も見せない異形は、ただ本能のままに、滝口の前に立ち塞がる。

まだ、少女の姿をした鬼は、大事な者を守るべく、恐ろしい形相で敵を睨みつけた。

「それじゃ、私のせいで……？」

琴音は自分の行動が招いたと感じた現状に、恐る恐る口を開く。

それは例え人を守るためとはいえ、他人を真剣で斬り殺すという行為に対する、躊躇というよりは、拒絶が無意識に働いてしまった結果だったのかも知れない。

少女剣士はそう自分の行動を省みる。

「……あの時に琴音が滝口として『魔』を排除することが出来たの

だとしたら。アイツの息の根を止めることが、できてたつて言うのなら。いいえ。その目を完全に斬り壊すことだけでも、できたつて言うのなら。そうかもね……」

滝口の少年から、滝口見習いというべき少女へと。陰陽師の少女は視線を動かす。

シヨックと後悔が見て取れる、その少女の顔。しかし、瑞穂は敢えて冷たく幼馴染みの少女を突き放した。

だから。

心優しい彼女には、非情な選択を無理矢理に強制させる、この世界は不向きなのだと言陽師は思うのだ。

兄の凶行を止めたい。琴音のその気持ちに共感できるも、彼女を知るからこそ、この世界は過酷な現実を彼女に突き付けるに決まっていると瑞穂は認識する。

ここで、彼女を拒絶することが、最善の対処法なのだ。もし、この世界に彼女が居続けると言うのなら。それは、誰かのように、拒絶と、孤独と、闇を少女が育むということと同義なのだ。

そう瑞穂は思うのだから。

「あんなバカは一人で十分なのよ」

フォローはしない。痛いのはお互い様なのだから。

瑞穂は泣き出しそうな顔をした少女から、目を逸らすと、戦う少年を眺めた。

「ちっ！」

ソレは予想以上に手強い。

細い少女の形なりのままに在りながら、速く、鋭い。

元凶を討つべく刃を振るおうとする詩緒に、襲かい来る清美。

鬼切の動きは鈍る。丑寅のこの生ける盾は、何よりもまだ、少年には『魔』ではないのだ。

「姫川清美！ 意識しろ！ お前はお前だ！」

滝口の声はしかし、無常に響くのみだった。

その声は、愛おしいと想う何かを守護し、詩緒と交戦するソレには届かない。

だが、別の何者かを、彼の声は刺激していた。

「ったくよオ！ うげえよオ！ 渡辺エ！ 無駄なんだよオ！」

何かを悟ったように丑寅は吼える。目を覆っていた片手を外す。

手の軌道に沿って、朱の飛沫が散る。その液体の源泉は赤い直線で繋がれた両目。

赤に染まり、一部損壊した眼球が二つ、露わになる。

不気味に何かの記号を眼前の空間に浮かべたそれは、明らかに義眼であると、今は教える。

しかし、その目に宿る力が生きていることを、同時にそれは教える。

「アヒイヤアハツハアアツ！」

奇声のような笑声を上げながら、丑寅は感知していた瘴気を構わず実体化させるべく、ありったけの魔力をその装置に籠めた。

「腸^{ハラワタ}掬^{ハラワタ}じ切れるくらい可笑しいぜ！ 渡辺エツ！ 綺麗事並べ

てんじゃねエ！ 人間全部お前みたいのだったら、それこそ異常なんだよ！ 人はなア！ 溺れ！ 善がり！ 弱く！ 醜いのが本質なんだよツ！」

暴走。八卦の剣士の感情の昂ぶりは辺りに地獄を産み落そうとしていた。

それは丑寅になかった異能を彼に与えていたのだ。闇を強化する力。まだ鬼ではない思念を、強制的に鬼に変える力を、である。

それは極、限られた一空間にのみに関与したものに過ぎなかった。しかし、その僅かな空間に、それぞれがそれぞれを圧迫し、押しつぶし、臓物を撒き散らし、肉塊に変えるほど^{ひしめ}轟く無数の異形を産み出す。それでも留まることなく新しい異形は召喚され、また新たな圧死体を造り出す。

人ではない存在の織り成すものとは言え、互いの身で互いを圧死させる阿鼻叫喚の惨劇を展開させながら。そして、それは徐々に徐

々に、その範囲を拡大していく。

この世界の全てを、その地獄絵図へと塗り替えていこうとするように。肉塊と異形とが、みっちり詰まった空間は大きく大きくなっていく。

「うっ」

「何よ、あれ!？」

その光景に、少女は嘔吐を抑え。

その光景に、少女は啞然とする。

詩緒はその暴走した召喚者の魔力に当てられ、心の闇を活性化させられていた。

それを神気で押さえ、黒衣の滝口は抗う。

飛びそうになる詩緒。それを必死に繋ぎ止める。

その中に在って。

「姫川清美! お前はお前だ! 他の何者でもない!」

しかし、彼女は彼女であると。少年の鈴がそうであったように、詩緒は清美に伝えていた。

その小さな銀色の鈴を付けた腕を伸ばしながら。

その少女を少女として救うために。

僅かな距離に在る、クラスメイトの少年と少女。

そこには遮る物など何も無いはずなのに。

だが、見えない壁は存在していた。

「私は …… そう …… 姫川、清美 ……」

その壁の向こう。詩緒の伸ばした手が、決して届きはしない彼方で。その少女は微笑った。

「優しいのね、渡辺君は」

その背後には丑寅の産み出した、地獄が広がる。しかし、一瞬。清美を取り巻く空間は、神々しく澄んで見えた。その微笑みに後光が差したようだった。

清美は応えたのだ。

闇に染まった自身を呼ぶ、少年の声に。

取り戻したのだ。姫川清美という自分を。人を愛するという清い、
純粋な心を持った少女を。

「ありがとう。だから」
「
靈妙な表情の中。」

清美の脳裏に浮かんだのは、愛しい少年を誘惑した双眸を剝り抜
いた、愛しい彼の香りを吸った鼻の削がれた、愛しい男と愛を交わ
した唇を糸で縫い塞いだ、エンゼル・メイク死化粧を彼女自身が施した親友の死顔。デス・マスク

「だから、姫川清美は染まらなきゃ　ごめんね」
「
謝罪を最後に。清美の神氣は失せる。」

清美は受け入れた。それこそが自分の終わりなのだ。闇に染ま
った自分が、在るべき姿なのだ。

その少女の華奢な体を破裂させるように、強大な邪氣がそこから
膨れる。

「俺の勝ちだなア！　これで！」

その邪氣に丑寅は嗤う。朱に染まった顔を歪める。

邪氣は巨大な何かを形成していた。姫川清美であった異形は、此
の世に産み落とされていた。

「アハツハアアア！　喰らえよ！　清美イ！」

慎太郎は命令を下す。

視界を奪われた丑寅にも解る。その清美であった何かは、圧倒的
な力を持つ異形であると。

「喰い散らか」

高笑いの余韻を残し。

そして、そこでその声は、その命は途切れた。

丑寅の下半身だけが、校庭には残る。上半身はこの世から消失し
ていた。

その足元、姫川清美という少女の形をした皮膚が風に舞う。それ
は人間が脱皮したのだとしたら、そういう正に抜け殻の生皮だった。
その皮から産まれた丑寅の切り札は、安藤慎太郎という少年の上
半身を一飲み喰らった鎌首をもたげる。

それは見上げるほどの巨大な白蛇。

獲物を映す双眸の間に、姫川清美に酷似した少女の上半身を生やした大蛇。

それもまた、鬼の一つ。姫川清美という少女の愛憎が産んだ『魔』に他ならなかった。

その『魔』は、召喚者を失い、ようやく終わりを告げた地獄絵図から抜け出した鬼たちを従えるように、この世界に君臨していた。

第拾六話：連携

そこは此の世ではなかったのかも知れない。

校庭という日常の空間で在りながら。しかし、異常が跳梁する空間。少女を頭部に生やした巨大な白蛇と、数多あまたの同胞の死を糧に産まれて来た鬼たちの存在する場所。

その広場の中心で。

清美へと差し出していた左手を引き戻すと、詩緒はゆっくりとその掌を握り閉めて零した。

「それがお前の出した答えか……」

そして、射貫くように冷たく鋭い眼差しを上方へと送る。

黒衣の滝口よりも、優に数倍の大きさを持つ巨大な蛇。その頭しんにある少女の形をした部位を見上げる。

たおやかに揺れる少女の身体。その顔に当たる場所に在るのは、微笑んだ顔に似た表情。幸福を思わせる、偽りの仮面。

「 姫川清美。だったら、俺はお前を殺すだけだ」

鬼切を構えながら、淡々と黒衣の滝口は静かに言葉を吐き捨てる。クラスメイトだった少女と瓜二つの、その存在を否定する。

殺気の籠められた聖刀の柄に添えられた左手。少年のその手首にある鈴が儚く鳴いていた。

少年が発した殺気に感付いたのか、先の二つに割れた、その生物独特の舌をちらつかせ、彼女は那双眸を眼下の滝口に向ける。

瞼のない鱗に覆われたその眼球に映る、月光つきひかりに照らされた黒一色の服装に身を包む美貌の少年。

その眼まなこに捕食を求めるものとは別の輝きを浮かべると、彼女は辺りの空気を全て吸い尽くすように勢い良く大気を吸引した。

星と月を背後に。巨大な白い鎌首を夜に泳がせる。

一瞬、溜めを作り、口腔くわくにその空気を押し止めると、そして、紅を引いたように不自然に赤く色づいた口唇を彼女は大きく開く。

轟。

大気を割ったような激しい響こよみが生じる。

獲物を丸呑みにする、大きく裂けた口から吐き出されたのは、赤々と燃える劫じゅうか火。

夜闇にあり、全てを照らし焦がすかのような、いびつな光源。

その迫り来る炎流を詩緒は後方に跳躍し、避ける。動きを止めていた滝口に群がろうとしていた鬼が数体、その炎に巻かれ、瞬間、燃え滓に変わり、塵と消えていた。

「まったく！ とんでもない置き土産ね！」

悪態については見ても、状況は好転しはしない。

瑞穂のその言葉が指したものは、何も大火を吐き出した白い大蛇だけではなかった。

彼女らを襲撃する鬼とて同様だったのである。

同胞を淘汰しながら産まれ落ちたその異形たちは、通常に産まれ得る鬼と比較し、優れた力を持ち得たようだった。いや。優れていたからこそ、あの地獄に在って生き残れたというべきだろう。

人の感情の産み堕とした鬼としては、規格外の能力を有する鬼。

それが一体、二体という数ではなく、数十という単位で、ここに存在するのだ。

その異形に形成された囲みの中央に追い遣られた、二人の乙女。

瑞穂と琴音。その二人は、さぞ美味しそうな御馳走に異形たちには映っていることだろう。

我先に。そう言わんばかりに襲撃体勢を維持しながら、鬼たちは少女たちを窺っていた。

ほんの僅かでも隙を見せれば、彼らは一斉に捕食を行なうべく、雪崩れ来るだろうことは推して知れる。事実、陰陽師はその猛攻を数度、耐え凌いだのだ。

呪符を構えた凜々しい少女と、彼女の足元に力なくへたり込む儂

げな少女。

彼女たちを喰らおうと襲い来る鬼たちを相手に、陰陽師は一人、奮闘して来た。滝口見習いといふべき少女は、姫川清美という少女が『魔』に堕ちたことを、自らの咎として消沈しているのである。しかし、瑞穂には琴音を奮い立たせようなどという心気はなかった。

これが彼女を、この世界から遠ざける基点となるのであれば。陰陽師は望んで、この危機を一人で対処するつもりなのである。それで琴音を日常の世界へと戻すことが叶うのならば、これは安い苦労だと瑞穂は思ふのだ。

「……ちよいとヤバいわね……」

だが、概況はそうは容易なものではない。

山という八卦の八卦に封じられていた五行を意のままに行使する力は、その要因の死亡と共に回復していた。しかし、僅かな時間で発動できる符術や小技の類では、その群れを構成する一体という最小単位とて、葬ることが困難なのである。

かといって多勢に無勢の戦況は、一体一体を一撃で確実に葬り去る呪術の詠唱、行使を許す、ゆとりを与えはしないのだ。

ましてや、その集団を一瞬に壊滅させるほどの魔術行使は至難も至難である。

手元に残された呪符は数えられるほど。

だから瑞穂は、心底から、そう呟いていた。

執拗に。彼女はその黒衣の滝口を追っていた。

辺りに存在する鬼たちを眼中には入れず、巨大な体で弾き、潰し、ただ少年の動きを追っていた。

白蛇の口からは、炎が次々と勢い良く放射される。何かを伝えようとする言葉のように。詩緒に避けられようと、彼女はそれを繰り返して吐き出す。

幾度も。幾度も。躍動する少年に、しかし、その炎は届きはしない。
それでも。その自らの攻撃を避ける少年の様を見る事こそが本懐かのように、彼女はただ、滝口だけを追う。

異常なほどの固執。それは彼女の叶わなかった欲求のもたらした行動だったのかも知れない。

大蛇に背を見せ、回避行動に専念していたかのように見えた詩緒は、唐突にその身を翻すと、その炎を掻い潜り、白蛇へと斬り込んだ。

曲線を描く太い胴の一部を切り裂き、赤い飛沫が散る。

「ちっ！」

しかし、滝口は舌打ちする。その一太刀は致命傷には程遠いのだ。その巨体の活動を可能にする発達した筋肉のついた胴回りは、千年杉を思わせるように太く遅く、更に表面は頑強な鱗に覆われており、容易には斬り断つことを許しはしないのである。

その斬撃が与えた損傷ダメージなど高が知れていた。この敵を討つには、それ相応の危険性リスクが必要であると、詩緒は悟る。

直後、黒衣の剣士は冷静に、無謀とも思える行為を実行に移す。

怪獣映画さながらに迫る白蛇を前に、敢えて足を止めると、近代兵器ではない古風な武器を構える。

常識的な観点からすれば、その異形の体格サイズから判断すれば、凡そ対等に争うことを可能とするとは思えない規格の愛刀を頼りに。滝口は彼女の次の動きを待った。

襲い来る鬼たちの猛攻を防ぎながら、瑞穂は意を決していた。

塞ぎこんだ幼馴染を護衛しながらの戦闘。

その現状は既にジリ貧に陥っているのである。その実情を打破するためにも、手遅れにならない様、早急に行動に移す必要性があったのだ。

牽制として呪符が使用できるだけの残数があるうちに、自身に余力がある状態で。

しかし、それは一つの賭けでもあった。

敵陣を壊滅させるだけの呪術の行使を試みるということ。

その詠唱を行なう間は、限りなく無防備に等しい状態になることを意味するのである。

「……封印を解除するワケにもいかないわよね。晴歌の許可もなしに」

小声で呟くも、最悪、躊躇するつもりは、その陰陽師には更々ない。

彼女は、ここにいる二人を見す見す見殺しにするつもりはないし、当然、自分が殉職するということは断固拒否する選択なのだから。

だが、その奥の手を実行に移すのは、打てるだけの行動を全て行なった上でのことであると判断もする。

そうでない、陰陽頭であるその少女に顔向けが出来ないのだ。瑞穂のために限られた時間と力を割いて、この封印を施してくれたのは、他でもない彼女なのだから。

「舞え！ 隼よ！」

振るわれた豪腕を屈み、避けると、起き上がり際に呪符を一枚放つ。

陰陽師の令に仮初の命を吹き込まれた紙片は、その鳥類に酷似した霊鳥へと姿を変える。

式神。瑞穂の忠実なる兵士であるその猛禽は、力強く夜空に羽ばたく。そして、その身よりも遙かに大きな体を持つ鬼たちに、恐れることなく上空から挑みかかった。

「式神の行使が苦手じゃなかったらって、こつこつ事態ばかりは嘆くわねっ！」

愚痴りながらも、少女は行動を開始する。

その陰陽師は式神の行使を、実は得意とはしていない。

彼の偉大なる陰陽師、安倍晴明などは十二神将じふにじんしょうなどと多くの強力

な式を使役し、身の回りの雑務などもそれらに行なわせたと伝えられる。

しかし、彼女はそれほど複雑な命令を実行できる式を召喚できないし、一度に使役できる式も一体のみなのだ。

現状、多くの護り手が存在した方が、断然有利であることは考えずとも瑞穂は理解している。

だが、それがその陰陽師の行なえる、最善の行動だった。

あとはその一体の式神と、手元に構えた呪符を頼りに、戦力差を覆す呪術の詠唱を行なうのみである。

左腕を前方に伸ばすと、その先端に細く白い指を二つ突き出す。

意識を集中し、虚空に清明桔梗を描き始める。

抑制された魔力の解放。それは現状の賀茂瑞穂に於ける魔力の増幅^{スト}儀式。

舞うように、鬼の攻撃をかわしながら、詠唱と凶形の構築を継続する。

しかし、それは安易に完了させられるものではなく、やはりなかった。それまで各個個別に、欲望の赴くままに攻撃をかけていた異形の群れに、その変化は現れたのだ。

「っ！？ ちよっ！？」

晦まし、威嚇することを目的として放たれ、内包されていた五行秘術を解放した呪符。その直撃を受けた鬼の背後から、その巨軀を死角として利用した数体の鬼が躍り出る。

吼えつつ、少女目掛け渾身の一撃を振るう鬼。その攻撃を瑞穂は後方に避けるも、それに続いて別の鬼が、その背後から新たに現れる。

それは跳躍しながら猛り、両手を組む。勢い良く、その組まれた両手を振り下ろす。瑞穂はそこで完成を目指していた呪術の詠唱を放棄した。

否。その連携攻撃を前に、その行為を継続することは自殺行為に過ぎなかったのだ。

先の攻撃を受けた鬼は、敢えて自分がその攻撃に晒された節さえ窺えた。

それは自己犠牲の精神。少女を喰らうためでなく、殲滅するためと目的を修正し、尚且つ、その目的のために己を殺す。玉砕さえも手段としたのだ。

「まさか！」

瑞穂は自らの思考に自らで否定をすると、両腕を振り下ろした眼前の鬼を踏み台に跳躍する。抗議の声のように。足蹴にされた、その鬼は上空に向かい吠えた。

吠えた鬼の背後から、更に奇襲をかけようとしていた、三体目の鬼よりも高く。少女は宙に舞う。空中で舞いながら、素早く五行秘術を詠唱、行使する。威嚇だったはずの符術を利用し、奇襲を行なった三体の鬼を地面から突出させた巨大な岩槍で刺し貫き、陰陽師は絶命させた。

「どいつかが、烏合の衆を統制し始めたとしてもいっついの!？」

式神ハヤブサに着地際をフオーさせ、瑞穂は大地に立つや警戒を強め、辺りに注意を巡らせる。

否定しつつも。しかし、その可能性を払拭できはしない。もしも、そういう存在が本当に現れたというのなら、それから潰さないわけにはいかないのだ。その存在を黙認することは、自分たちを窮地に追い込むことに他ならないのだから。

「しまっ!？」

そこで少女は気が付いた。その統制を持った戦闘行為は、彼女に認識される以前に、既に開始されていたのだ。

瑞穂の傍にいたはずの琴音の姿がないのである。距離を作らされていたのだ。瑞穂が攻撃を回避していたのではなく、瑞穂は攻撃を回避させられていたのだ。それに因って、陰陽師は誘導されていたのである。二人が互いに孤立するように。

少女を動揺が襲う。

その隙を見逃さず、鬼たちは動く。

「ウザイ！ズルイ！」

非難を上げ、瑞穂は身構えるも、その反応は明らかに遅れていた。その、今は、僅かでない反応の遅れ。しかし、それは群がり来る異形たちを前に、一手一手毎に、致命的な失敗へと変化していくのである。

その瞬間が終には訪れる。体制を崩した陰陽師に、避けることのできない一撃が加えられようとする。鋭く弧を描いた攻撃に大気が裂ける。赤い血が舞う。

だが、それは少女の血ではなかった。

「ごめん、瑞穂。私は、もう大丈夫だから」

刀によって斬られた鬼の片腕が、ぼとりと瑞穂の足元に転がっていた。

陰陽師の少女の前に立ったのは、滝口の少女。

迷いのない目で、断つべき人の産み出した悪意の塊の群れを見据えた少女剣士だった。

「へえ……吹っ切れたみたいね」

琴音に背中を預けて、後方を担当すると言わんばかりに瑞穂は身構える。

「うん。どうあれ、私には人を殺すことはできないって解った。例えば『魔』だと判断された人でも、やっぱり、人は人だもの」

琴音が呟くと、乱戦は幕を上げていた。入り乱れ、少女たちと鬼たちが死闘を繰り広げる。だが、陰陽師を取り巻く戦況は好転していた。枷をなくした彼女は、圧倒的な強さを見せる。彼女の口から放たれる命令に、次々と異形たちは討ち滅ぼされる。それどころか枷であった少女は、今やその陰陽師を補佐、援護し、その行動を自在にさせるのだ。連携のとれた攻撃。それを双方が行なったとはいえ、その差は明確になっていた。

「で？」

その一言が打ち合わせしていた合言葉のように。瑞穂の声に琴音は動いていた。少女剣士の動きに変化が見られる。攻勢をかける動

きではなく、陰陽師を専属的に護衛するように戦闘方針を修正する。

「殺すという行為で裁く権利なんて誰にもない。それじゃ、お兄ちゃんの過ちと同じだよ。それに改心する可能性を絶対に否定したくはないの……生まれながらの悪人なんて、いないはずだもの」

背中では詠唱をする陰陽師に滝口は語りかける。それが彼女なりの滝口としての姿勢だと。スタンス

「だから。覚悟した。私の取った行動で起った事態と結果に、私は責任を持つ。それでも護るために戦い続ける」

幼馴染の言葉に、瑞穂は微笑んだ。

それはその陰陽師が、彼女を滝口と認めた瞬間でもあった。

二人の少女を中心に、強大な風の渦が巻き起こっていた。

高く高く、巻き上がる大気の大渦。それは凄惨なまでに、それに巻き込まれた存在を切り刻む。檻ほろくさ襖屑へと変えていく。

それは一つの戦いの幕となっていた。

第七話：不安

舞い散るは、忌まわしき生命の残滓^{ざんし}。その芥^{あくた}は、唯、儂げな淡雪の如く校庭の宙に降り踊っては、しかし、決して地面に触れることなく消失する。

それは陰陽師の呪術に発生させられた大気の渦に被われ、浄化させられた、人の残留思念の産んだ異形たちの末路。

やがて乱戦に幕を降ろした、その破邪の風は凧ぐ。季節外れの雪景色も消える。

時節を取り戻した、そのグラウンドで。二人の少女に見えたのは、巨大な大蛇に、その身を拘束された少年の姿だった。

罅^{とひ}を巻いた太い胴。そこから辛うじて現れた、少年の首から上の部位だけが、その状況を少女たちに認識させる。

「渡辺くん！」

少年の姿に、山という抽象的な存在の呼び集めた瘴気の消えたグラウンドには、少女の悲痛な声が透った。

みしり。その声に反応したかのように、そう骨の軋む音が聞かれそうな程。

少年を束縛する白い鱗に覆われた、なだらかな曲線を描いた彼女の胴体が蠢く。

獲物を絞殺する。圧死させる。窒息死させる。

そのような目的の元、少年を捕らえた異形の姿。しかも、その死は即座に執行される様子はない。

標的を弄^{もてあそ}び、甚^{いたぶ}振るかのよう。それはそうであるかの如く、酷く残虐な光景に琴音には映っていた。

だが、それは謝った認識である。

それは愛ある抱擁なのだ。

彼女は愛おしく想う少年を、自分の胸の中で、至高の幸福だと彼女が想う状況の中で、看^み取りたいに過ぎない。

決して、苦しめることが目的ではなく、むしろ、安らぎを彼女は与えていると考えているのだ。

その行為は、愛憎故に『魔』に墮ちた、彼女の歪んだ愛情表現の体現の極みだった。

恍惚としたような瞳で、彼女は少年を見詰める。我が胸に抱かれながら、自身をその黒い澄んだ瞳に映す少年の美しい顔を見詰める。永遠の美を約束されたであろう、愛しい男を想いと共に留めるべく凝視する。

「……悲しいな、姫川清美。俺が付き合えるのも、ここまでだ……」
しかし、絞付けられたその少年の顔には、身を拉ひきちげる重圧に苦しむような色はなかった。

普段と変わらぬ冷たい表情で。詩緒は静かにそう呟くと、深く、心深く、何かを探るように己が意識に潜り込んだ。

「渡辺くん！？ がんばって！ あきらめないで！」
瞳を閉じ、俯いた少年。その姿は一見、意識を失い、危険な状態に陥ったように感じられる。

大蛇に巻かれた少年の様を、その通りに受け取ると、琴音は完全に冷静さを欠いてしまっていた。聞いた者が痛々しく感じるような感情的な叫びを上げて。囚われた少年が、かつて握っていた刀を手に、無謀にも真正面から巨大な異形へと詰め寄る。圧倒的な重量階ウエイ級差を考慮せずに、後先なく白い大蛇へと挑もうとする。

「琴音！ 待ちなさい！」

その少女を、幼馴染の陰陽師は一喝した。駆け出した彼女の細腕を掴み止める。

「どうして!?!」

振り向き様に静止した瑞穂を、琴音は睨んでいた。

近くで感じられた音。地を伝う、その感覚を察知し、二人の同性の存在に彼女は気付く。

聴覚の無い世界に生きる蛇という生物は、体に接した地面から感じる振動を、一つの外界認識の手段として利用する。それはその異

形も同様であつたようだった。

彼女はゆらりと鎌首をもたげ、その視覚に二人の少女を収める。そして、それを排除すべく大気を吸引した。

「っ！？」

その姿に、瑞穂は早口に五行秘術の詠唱を開始する。空間に五芒星を記す。

次の瞬間に。二人の少女へと、白蛇の口からは赤々と燃え揺らめく劫火が放たれていた。

だが、彼女たちの前方。そこには不可視の障壁が形成される。僅かに速く、陰陽師の秘術は完成されていたのだ。

「ったく！ 火行を封じてなきや、黒コゲでしょ！ 死ぬ気なの！？ 状況をちゃんと確認なさいな！」

眼前の火行遮断壁まじよくしよへきの向こう。そこで今だ噴出され続け、燃え盛る炎。その激しい燃烧音の中、瑞穂の叱咤が聞こえた。

「何で！？ 瑞穂は平気なの！？ 渡辺くんが危険なんだよ！？」
陰陽師の掴んだ腕を振りほどくと、滝口の少女は感情的に叫ぶ。

「それをしっかりと確認しろって言ってるのよ！ アイツは大丈夫！ 余裕のないヤツが、あんな人をナメたような仏頂面のままで、ただ絞められたりはしないから！」

しかし、瑞穂は冷静に詩緒を見ていた。

確かに、あれは窮地にある人間の顔ではないのだ。黒衣の滝口は、冷静に敵を映していただけである。

それは二人の少女と少年、それぞれの関係、その歴史の差だった。その経験の上に成り立った信頼の差でもあった。

少なくとも賀茂瑞穂という少女は、源琴音という少女より、渡辺詩緒という少年を熟知しているのだ。信頼しているのだ。

あれしき事態で容易く諦め、助けを待つ人間でも。そのまま何の抵抗もなしに、唯、やられるような玉でもない。

瑞穂は、そういう彼を知っていたのだ。だから、少年を冷静に観察することができた。

そして、知ることでもできたのである。

渡辺詩緒という滝口は、敢えて敵の手に落ちて、今回の事変で習得した力を試していたのだと。

「でも！」

「それよりも備えなさい！ 来るわよ！」

そして、この現状に於いて、もう一つの経験の差がそこには在った。

実際のところ、窮地にあるのは少年だけではなかったのだ。

瑞穂は、異論を唱えようとした琴音の言葉を遮る。新米者ルキに対し、スペシャリスト熟練者は警告する。

「え！？」

瑞穂の言葉に、状況は理解できずも、琴音は辺りに注意を払った。そして、滝口として戦い始めたばかりの少女も、そこで認識する。瑞穂が端から感知していた、その存在を、である。

この場に残っていた『魔』の気配は、一つではなかったのだ。その巨大さに比例するような大きな邪気を放つ白蛇に隠れ、押さえていた微弱な邪気を放つモノが、この広場には居たのである。

そして、その微弱な邪気にこそ、陰陽師は極度に警戒していた。

それは極、弱いもので在りながら。しかし、その質は根本的に異なるものであると、直感的に理解していたからである。そして、それこそが先の烏合の衆に秩序を与えた者であろうと、彼女は推測していた。それは自分の存在を隠すという、狡猾な知能を有しているのだから。

不意に。突如と物体が内包する何かの膨張に耐え切れず、破裂したように。

禍々しい邪気が辺りを支配するように、急激に拡がった。

それに伴って、グラウンド中央に君臨していた白蛇の巨体が、ふわりと宙に浮く。

それはその巨大な異形が跳躍したわけでも、飛翔したわけでもない。

只、浮いただけなのだ。

只、その真下に、酷く不均整な形状をした異形が居ただけなのだ。
アンバランス フォルム

それが、彼女を、片腕で持ち上げて居ただけ、なのである。

彼女を持ち上げた何かは、辺りに在った大蛇の邪気を上塗りするように、恐怖という感情の元を放つ。

勇ましく、剛毅に笑いながら本性を現す。

「な
」

異口同音に、少女は驚きに声を詰まらせていた。

それは確かに信じ難い光景だったのだ。それは人がビルを持ち上げているようなものなのだ。

甲高い叫びのような音を白蛇は上げる。それは敵意を剥き出しにした音。だが、怯えに似た音。

鋭く太い牙を、彼女は鬼へと向ける。噛み殺すべく、頭を勢い良く突進させる。

その大蛇の動作に構わずに、異形は空いていた片腕で力任せに握り潰すように尾を掴んだ。

瞬間。異形へと迫っていた大蛇の顎は、異形から遠ざかる。

高笑いを上げる両腕の異常に発達した鬼を中心に。それへと襲いかかっていた白蛇の頭部は、空中に大円を描いていた。

異形は掴んだ尾を支点にし、彼女を振り回し始めたのだ。

「っ！」

二人の少女は身を伏せる。尻尾を中心に振り回された彼女は、信じ難い速度でその上空を過ぎった。

「きゃあっ!?!」

地面にあつた少女たちをも、吹き飛ばすような暴風が後を追うように過ぎ去る。

驚異は大規模な破壊を産んでいた。

猛る異形に玩ばれた大蛇の体は、野球用に設置された大きなフェ

ンスを破壊し、校庭に面して設けられた運動部の部室棟を薙ぎ払う。校庭には、先の陰陽師の産み出したものよりも、巨大な渦が生じていた。

それは一切の魔術的なものや、不可思議な力の働きにより発生した事態ではない。

純粋な筋力ちからのみで作られた超常だった。

その光景に琴音は目を疑っていた。在り得ないようなその様相は、正にコンピュータ・グラフィックだけで製作された大災害映画のディザスター・ムービーコマでしかない。

「……………何？ ……これは夢？」

呆然と呟いた琴音の言葉に、その真横に伏せる瑞穂は肯定も否定もしない。

「……………アレは『魔』なんて生易しいものじゃないわよ。厄災、そのものじゃない……………冗談じゃないわ……………なんで、あんな存在ものがここにいるの!？」

その変わりに、唯、愕然と零していた。その大蛇を紐か鞭かのように軽々と振り回す異形を見て、陰陽師が知ったのは絶望に酷似した感情だったのだ。

現状で戦力で、何の犠牲も払わずに対処できるレベルの障害ではない。そこには眼前の『魔』を、そう冷静に判断している退魔術師としての一面があったからだだった。

しかも、それはその異形の討伐を可能とするための犠牲ではないのだ。単に撤退を可能にするための犠牲なのである。

誰かが生き残るためには、誰かが生贄になる必要があるということ。

そこにいる『魔』は、魔術的な力であれ、科学的な力であれ、人智を結集させた力なくば、対処しようがないほど強大で凶悪な存在。異様に発達した両腕を持つ異形。それは間違いない、近世で最悪の『魔』。果たして、歴史を紐解いても、その異形ほどの鬼は数えるほどしか存在しないだろう。

どこか諦めを感じながら、そう瑞穂は感じていた。

「え!？」

しかし、続けて驚愕したときに、少女のその瞳には希望が宿る。刹那。瞬間だけ発生したその異常を、陰陽師は感知したのだ。

「……今のはかなりきわどいんじゃない? 後、少しタイミングが狂ってたら自殺でしかなかったわよ?」

その希望に、瑞穂は自然と独りごちていた。

巨大な質量と、その運動によって生じる遠心力。

その莫大な力量をもるともせず、その異形は軽々と巨大な白蛇を振り回し続けていた。

「墳!」

そして、嗤いながら掛声を一つ上げると、異形は校舎へと向けて白蛇を投げ捨てる。

放り投げられた大蛇には抵抗はない。ぐったりとした身を晒し。

彼女は自身よりも遥かに小型の異形に、投棄されるがままに校舎へと激突していた。

地響きを立て、大きな破碎音が響く。

それは巨大な鉄球によるビル解体作業をしたような轟音。否。建造物に叩き付ける物体が異なるだけで、行なわれた行為自体は同質のもの。ともすると、叩き付けられた物質の質量も、衝撃に発生した純粋な破碎力も、こちらの方が上だったのかも知れない。

見るも無残に。粉々の瓦礫と化した少女たちの学び舎。その瓦礫の山の中心に、力なく横たわる巨大な白蛇。

「あ……渡辺くんは?」

離れた場所にあつた少女たちの周りにも、その破壊行為による土煙は広がっていた。その煙に撒かれながら、感情をどこかに落ちてしまったように琴音は呟く。しかし、煙霧に酷く不鮮明になった視界の中に、それでも少年の姿を探していた。

「大丈夫よ」

その声に応えたのは少年ではない。琴音よりも少年との付き合い

の長い少女の声だった。

「でも……」

否定的な、力のない反応。

それでも。そう信じたいのは琴音も同じなのに。

しかし、あの状況で、一介の人間に過ぎない少年が無事であるはずはないのだと。常識を知る思考は、そう彼女の頭の中で何度も何度も、少年の安否を否定し続けていた。

晴れ始めた視界。

不安を視覚化したような、その靄の端。霞れた世界の一角で。

その音は聞こえていた。

「……刃音？」

それは金属が、刃物が弾かれた音。

琴音は恐る恐ると、そちらに視線を送る。

そこで繰り広げられていたのは、戦闘の一幕だった。

月明かりの下。

校庭の中央では、刀を振るう黒衣の少年と異常な両腕を持つ異形とが、剣戟を開始していたのだ。

「うそ…… 本当に、渡辺くんなの？」

驚きに少女は固まる。しかし、それは一瞬のことだった。その直後には、琴音の顔には安堵の表情が浮かんでいた。

第拾八話：本性

「生きておったか！ 渡辺！」

その鬼は、眼前に立ち塞がった滝口に声を張る。

敵対者であるはずの存在を前に、その声は不思議と弾んでいた。

異形は満ち足りてはいなかったからだ。

人間の振りをしていたことで抑制されていたある欲求。それは本性を晒したことで開放されていた。

戦いを興じ、殺戮を好む嗜好。それは大蛇を振り回し、破壊活動を行なった程度では納まらないのである。

はち切れんばかりに隆々とした肉体に潜む欲望。

その純粋な闘争本能を満たすためには、死闘という名の命を懸けた遊戯を行うためには、相手が必要だった。

そして、その異形が最高の快楽を得るのは、その戯れの後に残るであろう、標的の無残に代わった軀むくろを喰らう瞬間に他ならない。

戦闘に熱くなつた身を冷まし、その戦いの記憶を自らの血肉とすることが、何よりも堪たまらないのである。

だから、その鬼は嗤っていたのだ。

本性を晒した自身の力を前に、その滝口がどの程度、持ちこたえることが叶うのか。それを愉しみにしながら。

「此れしきで逝くなよ！」

巨大な腕に見ると極太な血管が浮き上がる。その言葉に続け放たれる攻撃は、間違いなく本気の力を行使してのものであることを、その肉体が偽りなく伝える。

それでありながら、理不尽で矛盾した注文を言い放つ。それはこれから繰られる一撃で終わるのでは、不満だという鬼のエゴの現れだった。

吠えた直後。強大な力を秘めた腕を一つ、欲に飢えた鬼は力任せに薙いだ。

少年との距離は十分にある。それは決して異形の白兵戦可能距離ではない。如何にその巨大な腕とて、その届く場所には滝口はいないのだ。

しかし、その間合いは十分に攻撃可能距離であった。

振るわれた腕に押し潰され圧縮された、空気の塊が少年を襲う。不可視の凶器と化したそれは、大気を震わせ唸りを上げながら滝口へと迫る。校舎だった砂埃を再び地面から巻き上げる。

滝口の体を捉えた。そう感じられる刹那、詩緒は体を左に跳躍させると、寸での処でそれを回避していた。

それ自体を少年は感知していたわけではなかった。敵の筋肉の動きと、腕を振るった角度、耳に届く音から弾道を予測したに過ぎない。

それには魔力などという標はないのだ。如何にその滝口をしても、それを完全に感知することは不可能なのである。

ほぼ勘に頼ったような回避運動。結果として成功したといえ、現状が維持されれば、後手に回することは明らかだった。

しかし、それをおくびにも出さず、足が地に着くや、再度、滝口は身を躍らせる。鬼との距離を詰める。

一介の剣士に過ぎない詩緒には、不可視の弾丸を中間距離で射出され続ければ、ギリ貧でしかない。鬼切の持つ斬間に入らねば、その剛腕の間合いに入ることがどれだけ危険であれ、少年に勝機はないのだ。

「天晴！ あっぱれかわしおつたか！」

自らの攻撃を回避したというのに、鬼は心底愉快そうに敵を称える。

人の言葉を解する高い知性を有する異形。その上に凶悪な邪気を放つ異形。

そして、それは決して見掛け倒しの虚像ではないことを詩緒は知る。

振るわれた腕に隠れた死角を利用して、虚を突いて仕掛けた攻勢。

恐らくは反応することさえ困難であるような自身の動きに、それは反応し動いているのだ。

その鬼が見せているのは慢心ではなく、絶対的な力に裏づけされたもの。

だが、それにも詩緒は動じはしない。

少年は理解しているのだ。

それでも、自分の成すべきことに変わりはないのだから。

だからこそ、少年は渡辺詩緒という個人でいられるのである。

後方で大蛇の体で瓦礫と化した校舎が爆ぜた。詩緒の回避した拳圧が、それをさらに粉塵に変える。

「ふざけた攻撃力だな」

後方の破砕音に、突進しながらに呟く。

「愉しいなあっ！」

見えない場所からの攻撃に、だが、やはり、異形は防御に動いていた。迫り来る鬼切に、その左腕を差し出す。

「裂けるか！？ 吾が腕を！？」

鬼はあくまで嗤う。その巨大な肉塊を形成する筋組織は唸りと共に膨脹し、硬直する。そして、見るも強固な壁と化していた。

「断つ」

その肉壁を前に、詩緒の刃は疾走する。その太刀筋に迷いはない。それは気合いを乗せた雄叫びでも、唸り声でもなかった。滝口が零したのは呟きに過ぎない。

だが、そこには強い意志の力が存在した。彼ら滝口が通常の剣士と異なる点はそこなのだ。

彼らは刀に意思を乗せる。それこそが実体を持たない『魔』さえを、刀という物理的な武器で断つことを可能にする力なのだ。

朱を撒き散らし。少年の愛刀は深々とそれを切り裂いていた。

肘の辺りまで。そこまでを上下二つに裂かれた腕で、だが、それでも異形は嗤う。

「見事である！」

「　　っ!？」

その表情に、その声に、詩緒は後方へと身を逃す。

瞬間、裂かれ露見した腕の筋肉組織から、それは飛び出していた。自らの肉片を破裂させ、飛び散らせながら、それに構わず、その物体は滝口を襲う。

鬼切を前方に構えた詩緒の体は、しかし、その塊に弾かれ、後方へと大きく飛ばされていた。

防御に構えた退魔の聖刀の刃にも怯まずに、それは繰り出されていたのだ。

二つに割れた腕から生じたもの。それは新しい凶腕であった。それが裂かれた古い腕を破裂させながら、構わず少年を殴打するべく突き出されていたのだ。

地面に体をぶつけ、二、三転すると、詩緒は立ち上がる。

その様を、異形は悠々と眺めていた。

「まだ、愉しませてくれるのであろう?」

未だ満たされ切れぬ欲求を少年に求め、それは顔を歪める。

その声に、その邪気に、詩緒は確かに覚えが在った。それは陰陽師の少女が舞い降りる直前に感じた感覚。

「……大隈雄吾。それがお前の本当の姿か?」

黒衣の滝口は、ゆつくりと刀を横八層に動かす。

「如何にも。これが吾がの真なる姿ぞ。綱の子よ。」

ぼとり。残されていた斬られた腕の残骸が肩から千切れ、その足元に落ちる。

ダメージ 損傷は皆無であることが、その表情で伺い知れる。その程度は髪の毛の一本が抜けたのと同義。

そういう素振りで大隈は嗤う。

「……綱? 渡辺党の祖、渡辺綱か? くだらない。さも知った風」

源頼光の四天王の一人。滝口という武門の誉れであった滝口に数々の武人を輩出した一族の祖。

それがその人物である。

「知っている。吾がは、その綱らが束になろうと戦いを恐れた者、故。吾がは四天王ぞ。偽りの四天王にあらず。真なる者」

少年の言葉を遮ったその声が、広場に響く。

「鬼王が四天王の一、くま童子也！」

それは豪胆に名乗りを上げた。

二人の少女の前に現れたのは、紛れも無く黒衣の滝口であった。

見た目、外傷もなく、少年は先ほどの惨事に、何事もなかったかのように、災厄そのものと表現できるような『魔』と交戦している。

「……瑞穂、あれは渡辺くんだよな？」

琴音は訊ねる。それは大蛇に巻きつかれていた状態から、無傷で生還したその少年に不安を抱いていたからだだった。

その姿に死者が自分たちを護るために現れたのではないかとさえ、少女には思えるのだ。

「ええ。あれは真正銘の渡辺詩緒よ。幽霊なんかじゃないわよ？」

ピンピン生きてることが不思議だろうけど、事実よ」

その幼馴染みの思考を知ってか知らずか、瑞穂はそう返した。その少女は単純にその戦闘を眺めていたわけではない。魔術的な側面からそれを分析していたのだ。だからこそ、そう断言もできる。

今の滝口は安定していた。手探りで素人が発動させた、呪術的要素を含む行為にしては上出来な結果であろう。

そう陰陽師まじゆっしとして瑞穂は現状を評価していた。

後は渡辺詩緒という少年が、余力を如何に調整し発現できるのか。それが眼前の戦闘の鍵となり、自分たちの命運をも握るはずである。

現在の少年では、その鬼には敵わないことも瑞穂は理解しているのだ。まだ、その鬼の持つ力に対抗するには、少年の力は脆弱なものなのだから。

だが、この戦況を打破できる可能性が最も高いことが、その少年に賭けることであることも理解していた。というよりも、それにしか光明はないだ。

少年に眠る闇もまた、陰陽寮の重鎮たちが畏怖するほどの強力なもの。現代に存在する、世界の裏の危惧、災厄の一つなのだから。

「渡辺くんは、なんで無事だったの？」

「アイツはアイツでいられたってコトよ……本当に異常だわね。アイツ自身も」

だから、続けて訊ねた琴音の言葉にそう答えてみせると、瑞穂は詩緒と鬼との戦いに背を向ける。

結果として、その異形の相手は少年に一任するのが得策だろうと思っただった。

しかし、三人揃って無事にこの夜を終えるために、まだ自分たちにできることがあるのだ。

「瑞穂？」

だが当然のようにその言葉が、その行為が、世界の裏にまだ疎い彼女には、直感的に理解できるわけではない。

「詳しい説明が欲しいなら解説はしてあげるから、とりあえずは後にして頂戴」

琴音へと顔だけで振り返りながら、陰陽師は臨戦態勢を取っていた。

呟くと彼女は前方、上方へと視線を向ける。

「まだ戦えるわね？ 琴音？」

その闇に、妖しく輝く双眸が浮かぶ。

「……ええ」

決意するように心えると、琴音は手にした刀の柄を握り締めた。彼女もその存在を悟ったのだ。討つべき『魔』の存在を。

「……それは私が負うべきことだから」

陰陽師の少女の前へと、滝口の少女は移動する。彼女のフォロワーをすべく、そこで正眼の構えを取る。

フォワード バックス

前衛と後衛。鬼たちとの乱戦で見せたように、適材適所で自分の利点を活かす戦闘方法を実戦すべく滝口は動く。

「いい覚悟ね。新人滝口さん」

瓦礫からゆらりと身を現し、彼女は確かに、そこに居た。

陰陽師は、その彼女を見上げたままに微笑う。

源琴音という少女は賢い。少なくとも状況に対応するための感情を押さえる術をもっているのだ。

瑞穂は三人目の自分の命を預けることのできる信頼できる仲間を得たところを理解していた。

「……わかつてる。この闇から解放することだけが、姫川さんの救いになるんだよね……」

怒りに揺らめくような光を夜闇に見せる両目。その間にある、友人になれたばかりの少女に似たオブジェの様な器官を、真っ直ぐと見詰めながら琴音は呟く。

「ええ 苦しみから早く解放してあげるためにも、速攻で片をつけるわよ？」

「うん」

二人の少女退魔師の前には、巨大な白蛇が鎌首をもたげていた。

「……くま童子。酒呑童子しゅんどうじの腹心の一人の名だったな」

無表情に詩緒は反応する。

「如何にも。恐怖に気概を失ったか？ 吾がは人が畏怖して止まぬ純血なる鬼ぞ！」

それだけで勝ち誇ったかのようにくま童子は吼えた。

「純血種、か」

鬼には二種、存在する。

人を始めとする何かの存在が『魔』に成り堕ちたもの。

そして、生まれながらのもの。

純血種などと呼ばれる、その鬼の力は森羅万象さえも瞬時に操り、神の領域に達する存在^{もの}も珍しくはない。固有の名前を持つ鬼たちの多くが、この純血の鬼なのである。

神代や、古代、中世を最後に、その存在は確認されていないが、それらの討伐には、やはり神と同格の存在が必要とされている。人がそれを討とうとしたときには、大軍勢による討伐隊を組織するよ
りないのだ。

「……初見だが、くだらないな」

しかし、鬼切を構えると、詩緒は吐き捨てる。

「ほう」

にたりと大隈は厳つい顔を歪める。

「鬼は鬼だ……。ただ、斬るだけのこと」

射抜くように詩緒はくま童子を捉えていた。

「出来るのか？ お主の祖等は、吾がらを討つのに、不意打ちと騙し討ちしか出来なかつたぞ？」

滝口の少年の視線の先にあるそれは、侮蔑したように嗤う。

「出来るさ。出来るから滝口を継いでいる。そして、言っただ
」

鬼切の古雅な刃紋が月影を反射した。

冷たく静かに。

それは少年の意志を映しているようだった。

「 渡辺詩緒。お前を殺す人間の名だ、と」

第九話：詩緒

「笑えはせぬな！」

少年の言葉に、異形は吠えた。その不均等な全身に血管を浮き上がらせ、怒りという感情を露わにする。

その体軀からは邪気が強く放たれていた。その邪気は嗅覚をきつく刺激する。酷く死臭に似た異臭が辺りに立ち込める。

大隈雄吾という虚構の姿で、滝口という相入れない組織で頂点付近にまで至った鬼は猛る。

今はただ、生粋の鬼として存在し、その存在意義を、与えるべき恐怖をばら撒く。

いつもと変わらぬ素振りでも対しているような滝口。だが、その少年の顔のラインに沿って、一粒、汗が流れ落ちていた。

「……なるほど、な……」

口から漏れたのは、乾きによって掠れた声。

滝口は平静を装いながら、しかし、直面した『魔』に対し、確かに生理的な身体の変化を覚えていた。だが、それを否定することなく、納得するように受け入れる。

それが自然なのだと、詩緒も理解していたからだ。

寧ろ、その反応がもっと前面に出ることの方が、人間としては正常なのだろう。そうとさえ思考する。

それは脅威や畏怖という言葉を象った存在^{もの}。否、それがその言葉を産み出した存在^{もの}と等号^{イコール}なのであるのだから。

恐怖して当然なのだ。

純血種とは、謂わば、そういう領域に属する存在。信仰の方向性さえ変化してしまえば、彼らは崇拜され、奉られる神と同義の存在なのである。

だが、それを前にしても、詩緒は鬼切を放棄はしない。

腰をやや落とし、瞬時に跳躍できる姿勢を作る。前方下段へとそ

の愛刀を置く。

滝口は戦闘継続を意思表示していた。敵視する『魔』へと向けた視線を、真っ直ぐと逸らしはしない。

裾冑の構えを取りながら、剣士はくま童子という恐怖と確かに対峙していたのだ。

「愚かな。これでも解らぬのか？ お主の無力さを。絶対的な力の差を……人間なぞ吾が等の生餌に過ぎぬのだ。綱の子よ、お主とて同じ事」

辺りを覆った死の気配。その中央で大隈は鋭い牙の覗く口を開き、事実を突きつける。

「……例え、それが真理だとしても 俺は、ただ滝口であるというだけだ」

恐怖を与えること。それが彼らの存在意義だというのなら。自分はその恐怖を排除することが存在意義。

少年はそれを宣告する。

深層。普段、決して思考の届きはしない心の奥地。その身に内包された闇。

そして、そこへゆっくりと意識を送りながら、詩緒は判断していた。理解していた。決断していた。

その禁断の扉を開き放つしかないのだ、と。

「敢えて辛苦を受け入れ、死ぬか？」

鬼は顔を歪める。ちっぽけな捕食の対象でしかない種族の戦士を侮蔑し、嘲る。

「そのための命だ」

少年は薄っすらと笑った。

「下らぬな。反吐が出る」

異形は吐き付け、嫌悪を露わにする。

「興醒めしたわ！」

叫びと共に、その巨躯は既に宙に在った。重量を微塵も感じさせずに、高く上空へと瞬間的に跳躍したのだ。

詩緒はそれを視覚では追いはしなかった。

「ここでお前と対峙できたことは、幸運だったのかも知れないな……」

上空から舞い下りる恐怖の権現。破壊の象徴。

それを感覚的に捉えながら、詩緒は呟く。

瞼を閉じ、心の奥深く潜む暗部、その扉を開く。

山を司る八卦衆の行使した召鬼法。鬼を呼ぶ呪術。

命を賭して。敢えて、その呪術を被って知った、その被術下での心の動きをなぞる。再現する。

爆撃を受けたような。凄まじい衝撃は落下した。轟音が駆ける。

上空から叩き付けられた両腕。異形は力任せに地面を殴打していた。つい今の一瞬まで滝口の存在した場所は、その巨大な両拳に完全に塞がれている。

地面と言わず、空間と言わず。衝撃の起こした振動に、周囲という括りにある存在の全てが激しく揺さぶられていた。

大隈の拳を中心に、グラウンドは大きく凹んでいた。隕石か何かが地面に穿ったような円形の窪みが、不似合いにも校庭という日常に刻まれる。

濛々と。土煙と熱による煙の満ち広がった、そのクレーターの底。その中央で身を大きく構え、月に向かい鬼は吼えた。それは勝利の、凱歌の雄叫び。

違う。

そうではないのだ。

それは威嚇であった。その顔には既に、嗤いも、余裕もない。知性でなく野生を露わにした鬼の顔がそこには在った。

人よりも遙かに鋭いその本能が、異形を刺激し、警鐘を鳴らしていたのだ。

その危険視すべき存在を、敵を、である。

圧縮され、岩盤と化した己が足元の大地に爪を突き立てて、異形は全ての指をめり込ませる。力にいわせ、それを強引に打ち抜く。

上空に在る敵へと向けて。続け様に、鬼は引く抜いた岩盤を持った巨腕を躊躇することなく振り抜いた。

抵抗は驚くほどなかった。

確かに身を起こした直後の彼女は、怒りに支配されていたのだ。体を受けた負傷に、外界の全てを憎んでいたのだ。強大な邪気を発し、強大な『魔』としての自己を誇示したのだ。

圧倒的な規格の違い。その異形の持つ強さ。

それを前に、死闘は必至であつたはずだった。

吐き出される劫火を掻い潜り、強固な鱗を切り裂く。

巨軀に似合わず俊敏な攻撃動作に、集中を途切れさせることなく呪術詠唱を行なう。

その難度を二人の退魔師は理解していたのだから。

だから、身構えていた少女たちにとって、その反応は幸運だった。彼女は恐怖したのである。

もたげた鎌首を振るい、鬱憤を晴らすかの如く炎を吐き出そうとした、その時。彼女は萎縮し、固まった。くま童子という異形の放った、一際濃い邪気に怯えたのだった。

その大蛇の身に刻まれた、その存在に対する恐怖。それは彼女の行動と思考を停止させるほどに、本能に直接刷り込まれたものだったのである。

眼前の『魔』の巨軀が硬直した隙を、瑞穂は見逃しはしなかった。陰陽師は、その一瞬で勝負を決めにかかる。急ぎ、魔力の増幅を実行する。

「オン・マユ・ラ・キランデイ・ソワカ」

五芒星を描き終えた細い指は、直後、呪的な意味合いを持つ複雑な印を結んでいた。そして、その艶やかな唇は、そう真言しんごんを発する。

その真言は孔雀明王呪。

賀茂役君小角。その世界では一般的に修験道の開祖とされる役小角、その人が体得したとされる呪法である。

本来、真言は仏教秘教に於ける仏、菩薩の働きを示す厳秘言語。呪、陀羅尼、明とも呼ばれる、所謂、仏教系秘術の呪文である。

それを陰陽師である少女が使役できる所以。それは彼女の類稀なる魔術感性と潜在能力に因するところが大きいものの、それこそが陰陽道が森羅万象をその思想により解析してきたという結果の現われでもあった。

陰陽道は陰陽五行思想のみならず、それら大陸から伝来した仏教秘教、古来よりこの国で育まれた神道秘教等に至るまで貪欲に吸収統合、解析して完成された魔術体系なのだから。

真言の詠唱が終えた瞬間、大蛇の体を輝く光が駆けていた。

その光は雄々しく羽ばたく孔雀の幻像にも見えた。

孔雀明王の持つ功德の一つは退魔、破邪。

孔雀という鳥は毒虫、毒蛇を排除する益鳥。それらのイメージがこの明王に『魔』を排除する明王としての信仰の力を与えたのである。

大蛇は痛みの音を甲高く発した。光の駆けたその部位が、いとも容易く、いとも脆く、崩壊していく。

その破邪の力は、白蛇の巨軀を瞬間的に壊死させ、光へと昇華していた。

まるで蛩が夜闇に、偶然にも巨大な蛇を描いていて、それが失われていって仕舞うかのように。

大蛇を美しく散らしていく光の粒子が、その場所に幻想的な風景を拡げさせていた。

だが、『魔』は当然の如く、抵抗を止めはしない。のたうち、憤怒とも憎悪とも見える色を見せ、醜い感情に任せながら原型の崩れた体軀を動かす。

孔雀明王呪のもたらした幻光の直撃を避けた頭部。元の姿が完全

に残されている唯一の部分。その頭部を散り逝く体に残されていた力で振るい、陰陽師へと強襲させる。

その勢いに、それは消滅させられていく胴体部分から千切れた。金切り声に似た音を纏い、歪な弾丸と成り果てた異形は退魔術師へと迫る。

しかし、瑞穂は身動きせず、唯、それを寂しげに迎えていた。

「せめて綺麗に逝かせてあげる」

ぼつりと呟いた陰陽師は知ってたのだ。後は『魔』に堕ちてしまった少女の終わりを看取るだけなのだ。自らが動かなくとも安全であることを。そこに頼もしい滝口が現れることを。

瑞穂へと迫る顎の前に少女が躍り出る。刹那、琴音は下唇を噛み締めながら、無心にその刃を閃かせていた。

「……ごめんね、姫川さん……」

残心。その最中で感情を戻すと、琴音は俯く。

頭部に在った琴音の零した名前の少女に似た器官が、滝口の斬撃に二つに裂ける。

「え？」

その瞬間、琴音は彼女の声を聞いた気がした。

陰陽師を襲った大蛇の頭部。それは人型の器官が完全にそこから斬り離れた直後、二人の少女の中間地点、その空中で弾ける様に光の華へと変わっていた。

「ねえ、瑞穂。私、がんばるから」

友達となったばかりの少女。彼女を想うように、琴音は消え行く光を追って空へと頭を上げていた。

瑞穂を護るべく、その前に現れた小さな背中。彼女よりも小さいその琴音の身体が、そう呟きながら震えていた。

「……うん」

瑞穂は優しく微笑み、幼馴染の少女に応える。

その声を合図にしたように、瑞穂の目の前に在った背中は蹲り、嗚咽を漏らした。

宙に舞っていた者。その左手首に吊られた、小さな銀色の鈴が鳴る。それは黒衣の剣士だった。

大隈の放った岩盤に、その手に在った刀を走らせる。

斬るという意志。その意志を完璧に乗せたその剣士の刃は、圧縮され硬化されていた土塊つちくれを見事に斬り裂いていた。

それは渡辺詩緒という剣士の意志が働いた業わざに他ならない。

それは彼の中の闇が少年を乗っ取ったわけでも、その闇の暴走に少年が狂っていたわけでもないことを教えていた。

少年は、少年で在り続けたのである。

「くっ！」

詩緒の口から苦痛が漏れる。飛来した巨大な凶器による外傷はない。それは彼自身の内部から与えられた痛みだった。

着地をすると刻まれた激痛に、一瞬、バランスを失い、少年はふらつく。

「ちっ！」

不満を吐き捨て、詩緒は倒れることを拒否する。身体に力を籠め、抵抗し、滝口はどうにか踏み止まった。

「……何をした？ 渡辺？」

くま童子はクレーターの底から、その滝口を睨み付ける。地獄の底から生者を妬み憎む亡者のような形相を見せる。

「……限界を引き出したまでだ」

その邪な視線を受け止め、苦痛を見せながらも、詩緒もまた『魔』を睨んだ。

少年の視軸の先にある、その鬼に敵つい顔。そこには先ほどまでの圧倒的な優位性がもたらす余裕などは感じられなかった。

殺気立った冷たく張り詰めた空間に、相容れぬ二つの影は対峙す

る。

辺りを光の粒が舞い始めていた。

「戯言を！」

先の攻防で眼前の人間に感じた感覚。それを否定するかのよう
に大隈は咆哮した。辺りに揺蕩たゆたっていた光が、その音に消滅する。

「人間如きが！」

瞋しん恚いに身を任せ、神にも近い純血種おには大地を蹴る。その存在が全
身全霊の力を籠め、一介のちっぽけな人間そんざいに強襲する。

窪地の中央を震源とする激しい揺れが生じていた。グラウンドに
はその点から伸びた、幾筋もの深い亀裂が走る。

「……ああ。人間如きだ」

滝口は、迫る恐怖を迎え討つ。

その覚悟に、痛みに在った少年の顔が和らいでいた。

詩緒は知っているのだ。

その人間如きが見せる可能性を。

魔法、奇跡。それら神と同等の力を、そのちっぽけな存在が実現
することが、時に可能であることを。

あの少女は。

あの少女は大事な人間を護るために、自身に宿った影の力を、
『魔』を、想いの力で行使して見せたのだ。

それならば。

詩緒は闇を呼ぶ。

それは孤独。無力故に護れなかった命に対する悔恨。そして、自
ら殺めた兄に対する罪。

それが凝り固まった絶対的な絶望。

心の深淵から。少年に宿る闇は、少年の意志により呼び出される。
少年を乗っ取り、その存在を喰い尽くすべく、その心で、その体

内で暴走する。

詩緒の身体からは凶悪な邪気が発されていた。そこに在るだけで生に死を与えるような、禍々しい至上の恐怖が漂う。

その溢れ出した絶望が、少年を『魔』として目覚めさせる直前。災厄が兆す、刹那。

「俺は――！」

闇を受け入れて、詩緒は叫んだ。

邪気に震えていた。教え、伝え、泣いていた、鈴の音が止まった。少年は少年で在るとい意志は、闇を抑制する。

神氣は覚醒していた。

詩緒は神氣によって、己が闇の力を発生させながら自身で在り続けたのである。

眼前には鬼の豪腕が迫る。神氣を纏った少年は、虚空に鬼切を跳ね上げた。その動作に鮮血が飛び散り、太い腕は造作もなく断ち斬られる。直接的にその刃で斬ったわけではないのだ。それは斬ると言う意志と、その動作だけで可能にした奇跡だった。先の攻防のような、再生や復元は異形には許されない。それは詩緒の意志で確実に断たれた腕。断たれたと確定された物質だったからだ。

「化けも――」

驚愕し、怯えた鬼の表情は固まる。跳ね上げた鬼切を、詩緒はそのまま袈裟に閃かせていた。そこでその存在の生命は絶たれていたのだ。

滝口の足元。鬼の身体は二つに分け離され、大地に転がる。

「……言っただはずだ。渡辺詩緒。お前を殺す人間だ、と」

少年は刃に残った邪気を抜うように血振りをすると、静かに愛刀を納めた。

そこは在るべき姿を取り戻そうとしていた。

平穏な夜を取り戻そうとしていた。

穿たれた窪んだ地面の淵。人間と偽っていた異形は塵埃じんあいと散る。

少女の咽び声が微かに聞こえる校庭の上空。少女だった光の粒。

その想いの最後の一片。その断片は淡い残光を残し、儚く失われ
た。

最終話：恋慕

「……あの女が、ですか……道理で滝口組織内部の動きが、予見辛かつたわけですね……」

御簾で仕切られた古風な和室。その部屋に居た少女は、口元を開いた扇で隠すと、そう呟く。

上座に淑やかに座すその少女は、白い束帯に身を包んでいた。

本来、束帯とは、この国の中世貴族社会に於ける男性の正装の一つ。通常、女性である彼女は、物具装束や十二単を着飾るべきなのである。艶やか美しい光沢を見せる、腰まで伸びた長い黒髪。雪のように白い肌。まるで日本人形のような上品な容姿。それを持った少女には、その服装の方が遙かに似合いそうでもある。

しかし、少女はファッションとして、それを纏っているのではないのだった。

その束帯姿こそが彼女の制服姿。この館を拠点とする組織を統率する、彼女の仕事着なのだ。

「ええ。あの無駄を極限にまで省いた術式は間違いなく、私の師。土御門霧柄のものです」

ともすれば、その部屋の様式や内装、束帯姿の少女から、傍観者がいたのだとすれば時代を錯綜させそうである。しかし、そう応えた少女の姿が、この二人のやり取りが現在の出来事であることを教える。

その少女は白い学生服姿なのだった。

「……土御門霧柄。天才的な陰陽師。間違いなく、私以上の術者でしょうからね……」

深い溜息と共に憂いの表情を浮かべると、少女は目の前に座す学生服の少女から視線を逸らす。

「晴歌様ともあろう御方が、何 な、何？」

自らが属する組織の頂点。陰陽寮の陰陽頭ともあろう人物の弱気

な発言に、配下の退魔術師として働く少女は即座に反応し、言葉を詰まらせ、そして、普段の口調を戻していた。

陰陽寮の頂点に御座す御方。その御方の冷たい視線に気付いたからである。

「……私たち二人だけのときは、堅苦しい言葉使いは止めて下さい。そう前にも言いましたよね？ 私たちは友達なんですよ！？ 瑞穂さん！」

陰陽頭は、晴歌は不満を告げる。扇に半分隠された、その表情。しかし、それが頬を膨らませ、愛らしく不快感を示す表情であることを、ジト目でありながらも、その目元が教えていた。

「……はいはい……そうだったわね、ごめんなさい……」

だって、役目の話じゃない。なんていう反論が出そうな表情で、学生服姿の少女、瑞穂は謝罪する。

「『はい』は一回ですよ？」

「はいは うっ……わかってるわよ。ごめん」

再び非難する声も可愛らしい少女。この少女が職務に当たるときに、どうしてあのように凛々しく立ち振る舞うことができるのか。

本人を目の前にして、瑞穂はそれが益々、不可解で仕方がなかった。「でも、晴歌があっさりとそれを認めちゃ、マズインじゃないの？」

気を取り直すように声を発するも。

「いいんですよ。こういう本音を晒すのは、瑞穂さんの前だけです。それに私の能力は万能で絶対かも知れませんが、完璧ではありません。それを瑞穂さんがご存知ないはずないでしょ？」

「そ、そりゃ……」

瑞穂はすぐに言葉に詰まる。

陰陽師の頂点に立つ力を有しながら。だからこそ、彼女は籠の中の鳥と揶揄されるのだ。

そして、その話題は、友人である彼女にとって、あまり良い話題ではない。

そのために寂しい思いを、辛い思いを、その少女は重ねて来たのであるうから。

「大丈夫ですよ。瑞穂さんが友達になってくれました。もう、寂しくはありません」

しかし、戸惑う瑞穂に晴歌は微笑む。

「……話題を戻しますね？」

本当に気にしてはいませんよ。そういう彼女の意志が汲める、やんわりとした明るい声が続けて、その顔から起こる。

「霧柄あの下は、今回の件から既に手を引いていますね。確かに陰陽寮わたくしたちの予見なんかに対する、あの人の施した妨害は、まだ残っているのかも知れませんが……」

「どうして、そう断言できるの？」

その意見に瑞穂は冷たく、きつく意見していた。鋭く少女を睨みもする。

「……瑞穂さん。貴女の気持ちは解ります。でも、冷静になって下さい。いつもの貴女なら、私と同じ考えを抱いているはずですよ？」

しかし、少女は動じない。その背景を知ることこそ、晴歌には、その態度が理解できるのでだ。

「いつもの？」

「そうですね。考えてみてください。もう平井万葉の傍にいたところで、彼女には大きな利点メリットがないんです」

「利点メリット? ……ああ。そうか。そうよね……」

包み込むような柔らかな声が、霧柄との確執に捕らわれた瑞穂の心を落ち着かせ、解放させる。そして要点だけで納得もさせる。

八卦衆という人造の魔術剣士を創造したことで、瑞穂の師であった人物の、そこでの目的が達せられたことを晴歌は悟したので。

そして、そういう無駄な状況にあつて、いつまでもその場所に駐留じゅうりゅうするような師でないことを、弟子は良く理解している。

「……また手がかりはなくなった、か……」

ぼつりと零し、瑞穂は俯いた。

沈黙が静かに流れる。

「……大丈夫ですよ。絶対に見つけます。清明あき様の力に誓って」
「うん」

静かに。だが、力強くもたらされたその言葉は、正に陰陽頭としての威光に満ちていた。

だから、瑞穂も微笑んでしまう。大丈夫なんだと安心できる。友人の笑顔に、晴歌もまた微笑んでいた。

「……と、ときに。渡辺さんの具合はどうなんですか？」

しかし、不意に表情を曇らせると、彼女は訊ねる。

「え？ 渡辺？ 渡辺って、詩緒？」

何故に、その朴念仁の名前が突然に彼女の口から出たのか。腑に落ちない瑞穂は、念のために確認をしまっていた。

「は、はい。その渡辺さんです。名を残す純血種との戦闘で、かなり酷い負傷をしたと報告を受けていますよ？」

こくこくと頷きながら、興味深げに少女は身を乗り出す。そこには、先ほどまで終始上品に振舞っていた素振りも、先ほど見せた威光も見受けられない。

「まあ、あれだけ無茶をしたらね……これも報告受けてるだろうけど、以前に、中途半端は呪術を受けて数日寝込んだのよ？ なのに、あんな限界ギリギリまで無茶やったら、そりゃ無事なワケないわよ。傍に私がいなかったら再起不能だったでしょうね。間違いない」

やれやれと態度でも示して、瑞穂は呆れ顔を浮かべる。

「あ、う。そ、そんなに酷かったですか……？ そうだ！ 外傷とか、後遺症とかはないんですか？ 何なら私が治療を行いますし。あ、でも、私、ここを離れられない……来ていただく？ あ、でも、もしかして、まだ動かせないくらい酷いとか……あうっ……」

おろおろとしながら晴歌の口からは、普段の彼女からは聞かれな
い落ち着きのない言葉が忙しなく続く。

「……ま、まあ、大丈夫よ。撫物で穢れは被い終えたし。今頃、追
試の帰りじゃないかと思うわよ……」

少し。そんな反応を見せる友人に、後退りながら瑞穂は教えた。
「そうですか！ 良かった！」

その言葉に、つい今まで泣き出しそうだった少女の顔が、ぱあつと晴れる。

その様子に怪訝そうな表情を浮かべると、水を差すように瑞穂は口を開いた。

「……現状、陰陽寮の依頼を頼める滝口で、アイツが最強なのは解かってるけどさ……少し、大袈裟に心配し過ぎなんじゃないの？」
二人の少女の視線が交わる。

啞然と。晴歌は一番の恋敵だと思っている相手を見ていた。

「……本気でそう思っているのですたら、私にもまだまだチャンスがありますね」

噤んでいた口を開き、晴歌はしたり顔で微笑んだ。

「何が？」

「何でもないですよ」

言葉の真意を瑞穂は問うも、少女ははぐらかすだけだった。

「あ、そうそう、瑞穂さんの恋路には、暗雲が垂れ込めているみたいですよ？」

変わりに意味深に笑うと、彼女がここに報告に来る前に、空いた時間を潰すべく行なった卜占の結果を教える。

「何！？ 晴歌！ アンタ、なんで勝手に人のコト、占ってるのよ！？」

「大丈夫ですよ。細部までは占っていませんから。これ以上のコトは知りません」

無邪気に笑い、自身がその暗雲であることを晴歌は祈る。

「そういう問題！？ 違うでしょ！」
自分を棚に上げた少女の声。

「それに私の占いの結果じゃ、そんな悪いコト出てないわよ！」
その声は静かな屋敷内部に木霊していた。

新校舎、新部室棟の建設。グラウンドの状態の改修。
未だ残されている、あの夜の異変。真相を知らずも、その傷跡を
消し去るべく、慌しく校内を歩き来する土木業者の作業員や、作業
車両。

全ての授業は終わり、数時間が経過していた。

それらの作業のために学生たちを早々に帰っていた学園内部には、
一人、追試を受けていた、その少年を除いて生徒の姿はなかった。
テスト期間中、彼は戦いの後遺症により、床に臥せていたので
ある。

宿る闇の力を、神氣によって抑制しながら使いこなすこと。

それは熾烈なまでの負荷を少年に与えていたのだった。

くま童子との戦闘直後、詩緒は派手に吐血、喀血し、倒れたので
ある。

人体に存在する全ての部位を、器官を、筋肉を、細胞を。その負
荷は襤褸襤褸に、完膚なきまでに破壊していた。

『魔』の力が刻んだ傷。そこに残る穢れ。

それを被い、そのものを無かつた事にする撫物なぐさがなければ、間違
いなく、少年は二度と身体を動かすことができなかつただろう。

その負担は、それほど重いものだったのである。

詩緒は本来、ここにはないはずの往来に混じり校門へと向かう。

あの夜の異変。この学園に襲った出来事。

それは隕石の落下であり、人身的な被害は無かつた。

そう表向きの公式発表がなされ、一時、この都市は、この学園は、日本中の注目を集めた。

無残なまでに遺体を刻まれ、殺害された少女。交際していた高校生男女の失踪。

同じ日に発生した二つの事件を揉み消すように、その出来事だけが大きく報じられ続けた。

失踪事件については、このご時勢、そう大きく取り上げられるものではない。家出を行なう未成年など大量にいるのだから。

しかし、殺人事件についての扱いは明らかに異常だったのだ。

殺害時に行なわれたと見られる、身体の損壊行為。特に顔面部分の状態は、一目で人間だと判別できないほど凄惨な状態だったという。それほど話題性に事欠かない猟奇的な事件でありながら、そういう発見時の内容さえ、信憑性皆無だと認識される、三流ゴシップ誌でしか取り扱われなかったのである。

警察の捜査方針もあったのだろうが、当然、それらは偶然にそうなったわけではない。

滝口の活動と一般社会を隔離する者。『魔』という存在の痕跡を消し去る者。

そう情報操作を行った、一組の調律者が確かに存在するのである。校門を目の前に、詩緒の足が止まっていた。

「……源琴音」

そこに、出会った日の雨の後のように、ぽつりと立っていた少女を見つけたからである。

「一緒に帰っていいかな？ 渡辺くん」

少女は白い学生服に身を包む少年に微笑みかけた。

「渡辺くんはスゴイよね……あんな存在自体が信じられないような

鬼に、一人で勝てちゃうんだもの」

夕日に染められた坂道を、二人は歩く。

「……あれは運が良かったに過ぎない」

それは謙遜などではなかった。滝口は言葉通り、あの常識を逸した戦いの結末を、そう判断している。

大隈が相手の出方を窺うような慎重な戦い方を選んでいれば、攻勢に出るにしても、猪突猛進に強襲をかけるだけの行動を実行しさえしなけば。結末は違うものになっていただろう。

その身体にかかった負荷に、少年は間違いなく自滅していたのだから。

極限にまで解放した闇の力を抑制しながら戦闘行為を行うことは、五体と引き換えにしても、瞬刻しゅんくわくだけに許された行為なのだ。

そう無表情に答える詩緒に、しかし、琴音は微笑んでいた。

当然、そんな感想を伝えるために、少女は試験時間の終了まで待っていたわけではないのだ。

しかし、何となく口を吐いた言葉が、無駄ではなかったことを知ったのだ。

お前には関係ない。

そう少年は言わなかったのだから。

「……ねえ。あの時……姫川さんだった『魔』を斬った時……私には彼女の声が聞こえたんだ……って。そう言ったら、渡辺くんは信じしてくれる？」

足を止めることなく、琴音は訊ねる。

「……ああ」

詩緒は端的に答えた。

彼らしい返答。そう思い、琴音はまた微笑む。

「ありがとう……」

そして、そうお礼を告げた少女の歩みは、不意に止まっていた。だったら。だから。

琴音はこれ以上、彼女の最後の場所から離れることを拒んでいた。

静かに。暫し訪れていた、沈黙を破る。

「あの時。あの時、姫川さんは『ありがとう』って言ったの。とっても満ち足りた声で……」

詩緒から数歩の距離。そこには俯いた少女の顔があった。

「教えて？ 本当に姫川さんはそう言ったのかな？ これって私がそう思い込みただけなのかな？ 自分で勝手に自分を許したいだけなのかな！？」

少年を見上げ、露わになった表情。そこには悲しみと不安の入り交じっていた。

「……姫川清美という存在の消える、最後の一瞬。彼女は俺に微笑んだ」

少女の潤んだ目から逃げず、少年は真っ直ぐに少女の視線を受け止める。

「だから、お前が聞いた言葉は本心だと思う。お前の思い込みなんかじゃない。だから、そう断言できる」

少女の頬に涙が流れ落ちた。

それは救いの言葉だった。

琴音には清美の思いが理解できなかった。

愛しい人を奪われないように、恋敵を殺すことも。間違った思想に囚われた愛しい人を、正そうともせずと同じ道を歩むことも。

だから、罪の意識でも働いて、あそこで『魔』に堕ちて、消えることを納得できたのだろうか。

そんな想いは、決して認めたくはなかった。

それでも、一つだけ。

少年の言葉に、一つだけ、理解できたことがある。

あの言葉が本当だったのだとしたら。

自分の想いに真っ直ぐに正直だったからこそ、彼女は微笑わらえただろう。死に際に在っても、幸せを感じていたのだろう。

だったら、自分もそうありたいと思う。想いの人が、いつ潰れるとも知れない儂い存在であるのなら尚更に。

だから、告げないといけないと思う。自分の想いに正直に。後悔はしたくないのだから。

「ね、ねえ、渡な……詩緒くん」

震える声で少女は呼びかける。

坂道から一望できる水平線に、陽は浮かんでいた。

いつも在る日常。それは決して特別ではなく、在りのままの形で少年と少女を包む。

それでも、その瞬間。特別は訪れていた。

「私は、貴方が好きです」

幾つも零れる涙をそのままに。

少女は確かに想いを、人の起こす奇跡の一つを伝えていた。

戯言・挨拶（前書き）

本編ではありません。よろしければ、お付き合いください。

戯言・挨拶

投稿時間的に今晩は。初めて今作でお付き合い頂いた皆様、初めまして。世木維生です。

さて。毎回恒例(?)の筆者戯言の始まりです(笑)

少しでも作品ネタに興味が湧かれた方は、ここまでお付き合い頂ければ嬉しく思います。きつと『現代滝口譚』を読む楽しみが増えると思いますよ〜

早速ですが、3rdシーズンとなりました今作、『恋慕』は珍しくモチーフがあつたりします。

前2作はアイディアや日本刀アイテムをぶち込んで、世木風シナリオを作っていたんですけど、今回は違うのですよ!

今回のシナリオは紀州、道成寺伝説『安珍・清姫』の説話を元に構築されています。

昔々、安珍という旅の僧がいました。修行の旅の途中、安珍は清姫という女性に出会い、想いを寄せられます。

求婚する彼女に安珍は『修行の旅の身ですから』という理由で断るのですが、清姫は『ならば修行の旅の帰りに迎えに来て下さい』というのです。

安珍はその場ではとりあえず了承し、旅を続けます。

そして、旅を終えた安珍は、しかし、清姫を迎えに行くことなく帰路に着くのです。

それを知った清姫は怒り、安珍を追います。愛憎に狂った彼女の姿

は、その追走の際に大蛇へと変じるのです。化け物となった清姫が追ってくることを知った安珍は、女人禁制の場所である道成寺に逃げ込みます。しかし、鐘の中に隠れていた安珍を、清姫は口から吐き出さした炎で焼き殺すのでしたとさ。

この伝説の概要はこんな感じですよ。聞くと『ああ〜知ってる!』って人も多いのでは?この話、アニメ『日本むかし話』でも放送されたはずですしね(記憶が確かなら…)。

『滝口譚』的にはこの話の内容は、非常に大きな作品設定の骨子となっています。

今作の根幹である設定『人を始めとして深い感情に囚われた存在は鬼に変わる』という事象を地で行なっている伝承なんですよ。と、まあ、そこらへんは置いて、『恋慕』の話に戻しましょう。

ええ(笑)まんまなんです。

姫川清美は清姫の名前をもじってます(『川』は蛇の化け物と多々同一視され畏怖される自然界のもの、『美』は…音で選びましたが(笑))。

丑寅の一般社会での名前(本名?偽名?)である、安藤慎太郎も然り。安慎〓アンシン アンチン〓安珍(笑)

清美が蛇の化け物に変わるのも、丑寅がその蛇に殺されるのも、まんま(笑)

この伝説は女性の純粋な感情・情熱の激しさっていう、時代を超えて指示される普遍性の高いテーマを持っています。それで昔からこの話を元にした様々な作品が創作され、愛好されてきました。

よし!んじゃ、僕も挑戦してみよう!とまあ、こんな感じで作られたんですが、連載要素(詩緒のパワーアップ等)を含んだ今作、ど

うだったでしょうか？

続いて大隈くんです。

大隈くんは本名『くま童子』といたしましたが…。

誰です？世木はネーミングセンスないな〜…なんて思ったのは？（汗）

ボスクラスの敵に『くま』ってwwww

なんて、言わないでください（涙）

いや、そりゃセンスないですケド

ね（笑）

でも、くま童子は実在する鬼の名前なんですよ！それも酒吞童子の四天王って設定も僕独自のものじゃないんです！本当だったりするんですよ！

酒吞童子配下の有名な鬼というと、茨木童子が一般的（なんででしょうか？）ですが、他にもちゃんといたんですね〜

くま童子を始めとする酒吞童子四天王の名前は、彼の鬼の原典である古典作品にもしっかりと登場しています。

え？くま童子以外の名前ですか？それは今後の楽しみの一つとしてとっておいてください（笑）

それから今回、瑞穂についにというか、いろいろな作品の陰陽師が使っている真言を使わせてみました…う〜ん。いろいろ悩んだんですけどね…陰陽師について語ると長くなりそうなので、いつか改めて書こう！なんて、思います（笑）

とまあ、今回もだらだらと書き連ねてきましたが、いよいよ本題に。

4 & 4 K氏。ありがとうございました。このサイトで最初に知り合えたのが、氏で本当に良かったと心から思います。作品だけでなく、作家さんとしても大好きです（ホモじゃないですよ（笑））ブログ、いつも楽しく拝見させていただきながら、書き込みをほとんどしないで申し訳ないです。寂しいですが、一つの区切りとして、お疲れ様でした。ですが、僕は待っています（笑）氏の才能は非常に素晴らしいものです！そして、それは僕だけの認識では絶対にありませんよ！どこでも良いので、また僕らを楽しませてください。お願いいたします。本当にありがとうございました。

沙堂留々亞さん。今回もありがとうございました。いつまでもやはり、沙堂さんは理想の作家さんです。僕も沙堂さんのように書けたら…そう思います。作品をいつも楽しみに待っています。こまめに感想・メッセージをお送りできなくて申し訳ありません。どの作品も拝見させていただいています。そんな沙堂さんからのお言葉は、今回も大変励みになりました。今後も見捨てられないよう頑張ります（笑）本当にありがとうございました。

友人T・K。いや、もう、ありがとう（笑）ただただありがとう、ありがとう（笑）今後寝ていても、働いていても、ゲームに夢中な時間でも、また助けてくれ（笑）…いや、本当に感謝していますよ？

某氏のHPで交流を持たせて頂いた、ちくは氏。『小説家になろう』初投稿、初連載、おめでとうございます。是非にがんばってください！一緒に少しでも読者の方を喜ばせることができるような作品を作っていきましょう！

同じく某氏のHPにて交流を持たせて頂いた、あおいさん。僕の作品も目を通して頂いたようで、本当にありがとうございます。よろしければ、またお付き合ってください。

そして、そのHPの管理人様でもあらせられる、月城柚氏。深い感

謝を。：月城氏からは、これまでも計り知れないくらいの影響と恩恵を受けてきています。が。それに飽き足らず、ついにはいよいよ、がつぷりと、おんぶに抱っこで継るときが来たようです（笑）『セカイノハザマ』とのコラボ、何卒、よろしくお願いいたします。いきなり遅筆でご迷惑をかけまくりですが…（涙）本当に申し訳ないです。

最後となりますが、このような未熟な書き手に作品公開の場を与えてくださった『小説家になろう』管理人・うめ様に感謝を。

そして、なによりも。このような稚作の、このような最後の文章までお付き合い頂いた全ての読者の皆様に心からの精一杯の感謝とお礼を。

本当にありがとうございました。

2007年5月某日 世木維生

< 追記 >

次回連載作品は上記の通り、月城柚先生（W0584A）の連載作品『セカイノハザマ』シリーズとのコラボ作品になる予定です。『現在滝口譚外伝』みたいな感じになりますね。

『世界の狭間』シリーズの外伝なんですが、このシリーズは本編・外伝とも非常に面白い作品ですよ！次回作をより深く楽しむためにも是非に読んでみてください！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3857b/>

恋慕、美しく ~現代滝口譚3~

2010年10月8日12時56分発行